

福井県埋蔵文化財調査報告 第122集

木 崎 遺 跡

— 一般県道小浜インター線道路改良工事に伴う調査 —

2 0 1 1

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

序 文

本書は、一般県道小浜インター線道路改良工事に伴い、小浜市和久里において平成18年度に発掘調査を実施した木崎遺跡の発掘調査の成果をとりまとめたものです。

木崎遺跡は北川下流左岸の沖積平野に位置し、弥生時代後期、古墳時代後期、平安時代の3時期を中心とする複合遺跡です。先に舞鶴若狭自動車道建設に伴う発掘調査を行った際には、「乃井村」と墨書された灰釉陶器が出土し、若狭国遠敷郡に置かれた濃飯駅家の濃飯と同音の文字資料であった点で注目を集めました。また、県下で検出された古墳時代の建物では最大の規模を誇ると考えられる掘立柱建物も確認しました。

今回の調査では、その大型掘立柱建物と軸が揃う建物群を検出することができました。これらの建物群は、重複がみられないなど計画的な配置がなされていたことがうかがえることから、居館のような大型の掘立柱建物に関連する可能性が高いと考えられます。

本書が今後地域の歴史研究に寄与するとともに、各方面で多くの方がたに活用される一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の実施から報告書の刊行に至るまで、関係諸機関をはじめ、多くの皆様がたから多大なご支援とご協力を賜りましたことに、厚くお礼申し上げます。

平成23年3月

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
所 長 南 洋 一 郎

例 言

- 1 本書は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが一般県道小浜インター線道路改良工事に伴い、平成18年度に実施した木崎遺跡（福井県小浜市和久里所在）の発掘調査報告書である。
- 2 木崎遺跡の調査は、小浜土木事務所の依頼を受けて福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが実施し、文化財調査員坪田聡子、嘱託職員森下智恵が担当した。また、平成18年度の工事立会は坪田が担当し、平成20年度の工事立会は、主任清水孝之が担当した。
- 3 発掘調査は、平成18年（2006）10月18日から12月18日まで実施した。出土遺物の整理作業は、平成19年（2007）4月2日から平成23年（2011）3月31日まで、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターにて実施した。
- 4 本書の編集は坪田があたり、主任富山正明と坪田が分担して執筆した。また、出土した柱根の年輪年代鑑定については、総合地球環境学研究所・奈良文化財調査研究所の光谷拓実氏より玉稿をいただいた。なお、執筆の分担は以下のとおりである。
坪田聡子 第1～3・5章 富山正明 第3章（石器・石製品）
光谷拓実 第4章
- 5 木崎遺跡に関するこれまでの成果の発表のうち、本書と齟齬がある場合は、本書をもって訂正したものと了解されたい。
- 6 遺構の図版作成、出土遺物の図化・図版作成、写真撮影は坪田が行い、石器・石製品の図化は富山が行った。
- 7 本書に掲載した地形図および遺構図は、国際航業株式会社に委託して作成したものを一部改変して使用した。上空からの写真は、航空測量時に上記の委託業者が撮影したものである。
- 8 遺物実測図と写真図版などの遺物番号は符号する。写真の縮尺は不同である。
- 9 本書における水平レベルの表示は、海拔高（m）を示し、方位はすべて座標北を用いた。また、X・Y座標値は、国土方眼座標系第VI系に基づく。
- 10 色については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」2007年度版を基準とする。
- 11 遺物実測図は、断面黒塗りが須恵器を指す。土器に付した薄いスクリーントーンと、石器・石製品の黒塗り部分は赤色塗彩を示す。
- 12 本書に掲載した遺物と調査に際して作成した図面・写真は、一括して福井県教育庁埋蔵文化財調査センターに保管してある。
- 13 発掘調査ならびに本書の作成にあたり、次の方々および機関のご協力・ご教示を得た（順不同・敬称略）
出土木器研究会、吉岡泰英
- 14 発掘調査には、地元の方々の参加・ご協力を得た。また、遺物整理作業は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターの整理作業員があたった。

目 次

第 1 章 調査の経緯	1
第 1 節 調査に至る経緯	1
第 2 節 調査の経過	1
第 2 章 遺跡の地理的・歴史的環境	3
第 1 節 地理的環境	3
第 2 節 歴史的環境	4
第 3 章 遺構と遺物	7
第 1 節 遺構および遺構内出土遺物	7
第 2 節 遺構外出土遺物	26
第 4 章 木崎遺跡出土木材の年輪年代	41
第 5 章 まとめ	43

写真図版目次

図版第 1	遺跡	(1) 調査区遠景・木崎山城跡遠景	(2) 調査区全景
図版第 2	遺構	(1) SB01	(2) SB02
図版第 3	遺構	(1) SB03	(2) SB04
図版第 4	遺構	(1) SB05	(2) SB06
図版第 5	遺構	(1) SB07	(2) SK02
図版第 6	遺構	(1) SB01 SP50	(2) SB01 SP26
		(3) SB02 SP150	(4) SB02 SP03
		(5) SB02 SP04	(6) SB02 SP152
		(7) SB02 SP05	(8) SP164
図版第 7	遺構	(1) SB03 SP171	(2) SB03 SP172
		(3) SB04 SP11	(4) SB04 SP06
		(5) SB04 SP402	(6) SB05 SP374
		(7) SP85	(8) SB06 SP240
図版第 8	遺構	(1) SB06 SP312	(2) SB06 SP276・285
		(3) SB07 SP60	(4) SB07 SP58
		(5) SB07 SP218	(6) SB07 SP219
		(7) SB07 SP63	(8) SB07 SP55・SP70
図版第 9	遺構	(1) SP415・416 遺物出土状況	(2) 立会 2 区全景
図版第 10	遺物	遺構内出土土器	
図版第 11	遺物	遺構外出土土器 1	
図版第 12	遺物	遺構外出土土器 2	
図版第 13	遺物	遺構外出土土器 3	
図版第 14	遺物	(1) 遺構外出土土器 4・銭貨	(2) 遺構および遺構外出土石器・石製品
図版第 15	遺物	遺構(掘立柱建物)出土柱根	
図版第 16	遺物	遺構(柱穴)および遺構外出土柱根	

挿 図 目 次

第1図 木崎遺跡位置図 …………… 2	第21図 柱穴実測図1 ……………19
第2図 若狭湾沿岸の地形区分図 …………… 3	第22図 柱穴出土遺物実測図1 ……………21
第3図 周辺の遺跡分布図 …………… 5	第23図 柱穴実測図2 ……………22
第4図 標準土層図 …………… 7	第24図 柱穴出土遺物実測図2 ……………22
第5図 遺構配置図 …………… 8	第25図 SD土層断面図 ……………24
第6図 SB01実測図 …………… 9	第26図 SD出土遺物実測図 ……………25
第7図 SB01柱穴出土遺物実測図 …………… 9	第27図 遺構外出土遺物実測図1 ……………27
第8図 SB02実測図 ……………10	第28図 遺構外出土遺物実測図2 ……………28
第9図 SB02柱穴出土遺物実測図 ……………11	第29図 遺構外出土遺物実測図3 ……………29
第10図 SB03実測図 ……………12	第30図 遺構外出土遺物実測図4 ……………30
第11図 SB03 SP172出土遺物実測図 ……12	第31図 遺構外出土遺物実測図5 ……………31
第12図 SB04実測図 ……………13	第32図 遺構外出土遺物実測図6 ……………32
第13図 SB04柱穴出土遺物実測図 ……………13	第33図 遺構外出土遺物実測図7 ……………33
第14図 SB05実測図 ……………14	第34図 遺構外出土遺物実測図8 ……………33
第15図 SB05柱穴出土遺物実測図 ……………14	第35図 遺構外出土遺物実測図9 ……………34
第16図 SB06実測図 ……………15	第36図 遺構外出土遺物実測図10 ……………34
第17図 SB06柱穴他出土遺物実測図 ……………16	第37図 遺構外出土遺物実測図11 ……………35
第18図 SB07実測図 ……………16	第38図 木崎遺跡出土木材の年輪年代測定結果 ……42
第19図 SB07柱穴出土遺物実測図 ……………17	第39図 調査区および遺構配置図 ……………44
第20図 SK02土層断面図 ……………17	

表 目 次

第1表 遺跡名一覧表 ……………	5
第2表 土器・陶磁器類観察表 ……………	36
第3表 土錘観察表 ……………	39
第4表 木製品観察表 ……………	40
第5表 石器・石製品観察表 ……………	40
第6表 銭貨観察表 ……………	40
第7表 掘立柱建物一覧表 ……………	45

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

木崎遺跡は、遺跡の北方を東西方向に流れる北川と、遺跡の南方を南東から北西方向に流れて北川に合流する多田川とに挟まれた標高3 m前後の低地に位置する（第1図）。遺跡から約2 km北西方向に進むと小浜湾に至る。遺跡の西方には和久里集落が形成されており、調査地は水田として利用されていた。

舞鶴若狭自動車道⁽¹⁾は、舞鶴東インターチェンジから北陸自動車道の敦賀インターチェンジまでを結ぶ自動車専用道路として平成元年（1989）に基本計画が決定された。小浜市和久里地籍では、この舞鶴若狭自動車道の本線の建設と、本線に連結する一般県道小浜インター線の道路改良工事が計画され、事業予定地内にある木崎遺跡の試掘調査ならびに発掘調査が実施された。

試掘調査は、舞鶴若狭自動車道の事業予定地と合わせて、平成16年（2004）11月19日・22日に福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが実施した。おおよそ20m間隔で設定した試掘坑を重機で掘削した結果、遺構は確認されなかったものの、弥生・古墳・平安時代の土器が出土する良好な遺物包含層を検出した。また、事業予定地の東方に砂層をベースとする微高地が存在することが明らかとなり、その範囲が遺跡の主体となることが推測された。以上により、両事業予定地内において本調査が必要と判断され、県道の事業予定地内においては良好な遺物包含層が遺存する範囲がその対象となった。

まず舞鶴若狭自動車道建設事業に伴う発掘調査を平成18年（2006）6月14日から9月6日まで実施し、続いて一般県道小浜インター線道路改良工事に伴う発掘調査を10月から開始した。

第2節 調査の経過

一般県道小浜インター線道路改良工事に伴う発掘調査地点は、先に実施した舞鶴若狭自動車道建設事業に伴う発掘調査地点から西に約8 m離れており、平成18年（2006）10月から着手した。また、本調査終了後の平成19年（2007）2月には、パイプライン移設に伴って本調査地点の西方にある農道部分（立会1区）と、本調査地点の北端に隣接する市道木崎東西線の南側水路部分（立会2区）の工事立会を行い、平成20年（2008）10月にはJ R小浜線に近接する橋脚の敷設部分にあたる本調査地点の南方隣接部分（立会3区）の工事立会を実施した。

それぞれの期間・面積・航空測量日は以下のとおりである。

本調査

調査面積 540m² 調査期間 平成18年10月18日～平成18年12月18日

航空測量日 平成18年12月14日

工事立会

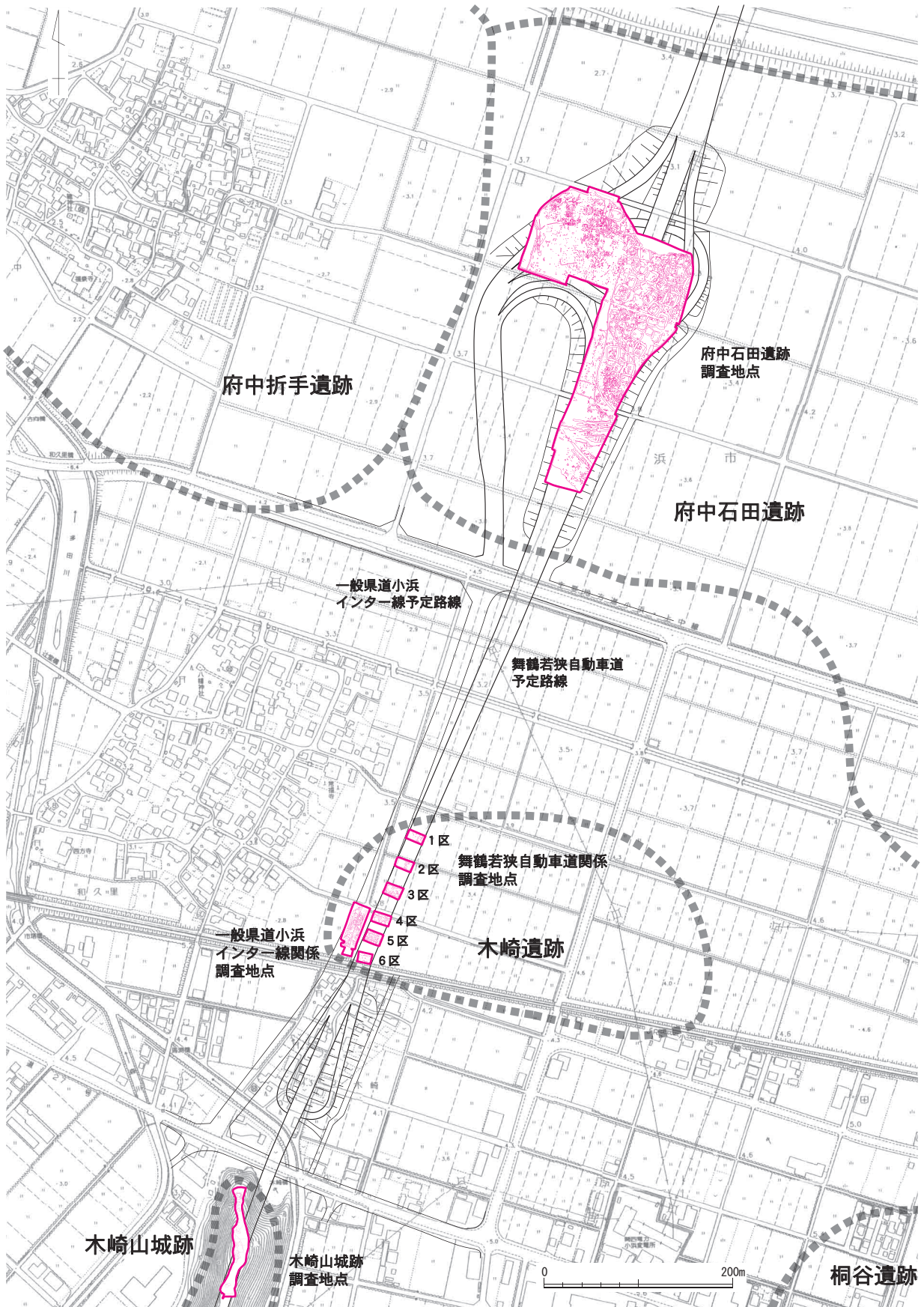
立会1区 立会面積 10m² 立会期間 平成19年2月7・13日

立会2区 立会面積 66m² 立会期間 平成19年2月22日～平成19年3月2日

立会3区 立会面積 100m² 立会期間 平成20年10月16日～平成20年10月20日

註

1 舞鶴若狭自動車道については、当初「近畿自動車道敦賀線」と呼称していたが、平成15年（2003）3月9日に福井県内で一部開通した際、兵庫県の吉川ジャンクションから福井県の敦賀ジャンクションまでの道路名称が「舞鶴若狭自動車道」に改称された。



第1図 木崎遺跡位置図（縮尺1/6,000）

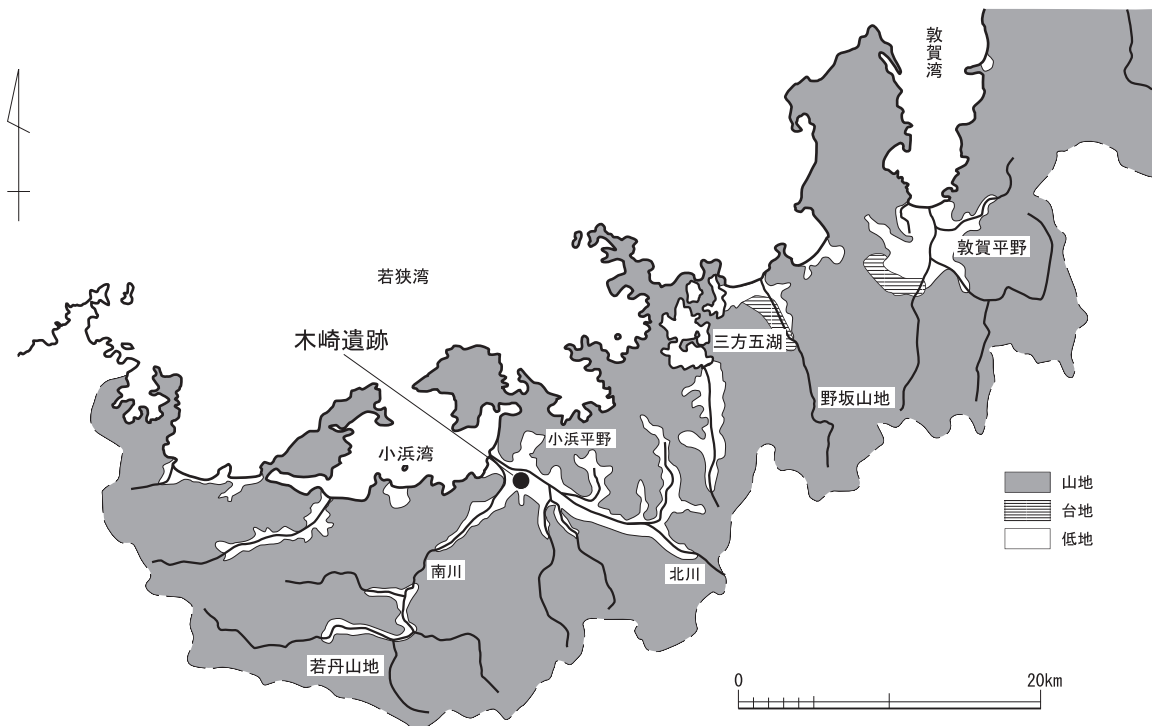
第2章 遺跡の地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

福井県は、本州中央付近の日本海に面した凹部に位置し、東西約130km、南北約100km、面積約4,189km²をはかる。敦賀市の北東部にある木ノ芽山嶺を境として二分し、北方を嶺北地方、南方を嶺南地方と呼称している。

嶺南地方は若狭湾に面した狭小な地域であり、令制国の若狭国の範囲に、越前国の一部であった敦賀市を加えたものとはほぼ一致する（第2図）。背後は、丹波高原北縁にあたる若丹山地の山稜を境に京都府および滋賀県と接している。若狭湾一帯は著しく沈降した地形で、山地は海岸部に迫り、沿岸部は典型的なリアス式海岸となっている。鋸の歯のように複雑に入り組んだ入り江内は、波が低く水深が深いため古くから天然の良港として利用されてきた。その一方で、陸地は起伏が多く、平地に乏しい。

小浜市は嶺南地方の西寄りに位置し、東方に突出する内外海半島と西部に突出する大島半島に挟まれた袋状の海岸線を有する小浜湾に面している。市域は東で三方上中郡若狭町と、西から南西にかけて大飯郡おおい町と接し、南東は野坂山地を挟んで滋賀県高島市と接する。市域には、若丹山地から発する南川と野坂山地を發する北川という二大河川が流れており、この両河川の流域に回廊状に細長く続く平野に集落が点在する。河口の複合デルタである小浜平野は、敦賀平野を除けば嶺南地方最大の沖積平野であり、古代より一貫して若狭国の中心であった。平野の西端では、北東方向に流れてきた南川が流路を北西方向へと変え、北川と並んで小浜湾に注いでおり、両河川の間を多田川が貫流している。霊峰多田ヶ岳の山麓を發するこの多田川が流れる谷の出口に位置するのが木崎遺跡である。



第2図 若狭湾沿岸の地形区分図（縮尺1/500,000）

第2節 歴史的環境

小浜市域では約200箇所の遺跡・遺物散布地が確認されており、小浜平野とその周辺山麓部に分布が集中する。ここでは、木崎遺跡が所在する平野西部域にある弥生時代から中世にかけての遺跡で、内容が把握できるものを中心に概説したい（第3図・第1表）。

弥生時代

平野に沿った山際縁辺において多くの遺跡が確認されており、近年、高塚遺跡(28)、中辻堂遺跡(13)、下松塚遺跡(39)、平野遺跡、加茂遺跡などが相次いで調査された。中辻堂遺跡が中期末にかかる以外はいずれも後期に属する。高塚遺跡と加茂遺跡では平地式住居が検出されている。これらの遺跡は平野に面する谷の出口に形成された扇状地上に立地しており、該期における集落立地の傾向を示していると考えられてきた。

一方、小浜平野の中央部は、自然堤防があまり発達せず、居住には適さないとの認識が一般的であったが、舞鶴若狭自動車道建設に伴う府中石田遺跡(11)や木崎遺跡(1)の調査成果によって、居住域や墓域として開発されていたことが明らかとなった。府中石田遺跡では、敦賀市吉河遺跡に次いで嶺南地方で2例目となる方形周溝墓群が発見された。中期中葉から後期にかけてのもので、総検出数は59基におよぶ。方形周溝墓群とは区域を違えて掘立柱建物や周溝をもつ建物も検出されたほか、分銅形土製品や巴形銅器などが県内で初めて出土し、地域の拠点的な集落と考えられる。また、木崎遺跡では、若狭地方では初例となる後期後半の縦板4枚組の井戸2基が検出されており、集落(居住域)と考えられる。この木崎遺跡の南方の丘陵上にあつて、同じく舞鶴若狭自動車道建設に伴って調査した木崎山城跡(2)では、後期後半から末にかけての台状墓2基が確認され、その墳頂部では長軸を揃えて並列する複数の埋葬施設が検出された。木崎山城跡と木崎遺跡との直線距離は500m足らずで、どちらからも互いがよく見える位置にあることから、木崎遺跡に居住した集団が木崎山城跡で検出した台状墓の造成に関わった可能性が高いと考えられる。これらの調査成果は、若狭湾岸の弥生時代の集落・墓制を考える上で非常に有意義なものである。

古墳時代

小浜平野および周辺山麓部における古墳分布は、若狭地方でも有数の大型前方後円墳が集中する北川中流域と、小型古墳や横穴墓が山麓部を中心に群在する下流域とに分けて考えることができる。小浜平野西部域にあたる後者においては、北川の支流である多田川、遠敷川、松永川沿いが中心域となる。まず、多田川と遠敷川に挟まれた丘陵の北東端には多田古墳群(19)、同じ丘陵の北西方には検見坂古墳群(22)が展開し、あわせて100基以上の古墳が確認されている。その主体を占めるのは円墳あるいは方墳、および横穴墓である。また、多田古墳群では多田山上古墳、検見坂古墳群では九花峰古墳と呼ばれる全長40m前後の小型前方後円墳がそれぞれ確認されている。両古墳群とも埋葬設備や外部設備については不明なものがほとんどで、円墳数基に横穴式石室が確認されるにとどまる。なお、横穴式石室をもつ円墳は、多田川左岸の山裾でも3基が認められ、池町古墳群(16)と呼ばれている。次に遠敷川と松永川に挟まれた丘陵には金屋マンダイ山古墳群(33)・小浴神社裏山古墳群(47)が展開し、方墳あるいは円墳が計26基確認されている。また、その北西方の平地には円墳3基からなる松塚古墳群(44)が、北方には国分古墳(41)および国分寺古墳(43)が所在している。国分古墳は前方後円墳と推測され、江戸時代の出土と伝えられる中国製画文帯四仏四獣鏡1面が現存するほか、埴輪も採集されている。国分寺古墳は国指定史跡「若狭国分寺跡旧境内」内に所在する。径約50mの円墳とされるが、詳細は不

第2節 歴史的環境



第3図 周辺の遺跡分布図（縮尺1/25,000）

第1表 遺跡名一覧表

番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代
1	木崎遺跡	集落跡	弥生・古墳・平安	25	西牟久遺跡	散布地	弥生・古墳・奈良
2	木崎山城跡	墳墓・経塚・城跡	弥生・平安・中世	26	下見定遺跡	集落跡	弥生・古墳・平安
3	湯岡城跡	城跡	中世	27	金屋上關原遺跡	散布地	
4	野代遺跡	散布地	平安	28	高塚遺跡	集落跡	弥生・古墳・奈良
5	生守・妙楽寺	寺院跡		29	栗田古墳群	古墳	古墳
6	野寺遺跡	散布地		30	岸の上下遺跡	散布地	平安
7	丸山古墳群	古墳	古墳	31	高塚古墳群	古墳	古墳
8	丸山河床遺跡	散布地	弥生	32	流れ谷古墳	古墳	古墳
9	政広遺跡	散布地	中世	33	マンダイ山古墳群	古墳	古墳
10	府中折手遺跡	散布地	縄文・中世	34	薬師谷古墳群	古墳	古墳
11	府中石田遺跡	墳墓・集落跡	弥生・古墳・平安	35	畦崎遺跡	散布地	奈良
12	沓町田遺跡	散布地	古墳・中世	36	若狭彦神社・下社	神社	
13	中辻堂遺跡	散布地	弥生	37	滝村遺跡	散布地	弥生
14	中川原遺跡	散布地		38	馬場遺跡	散布地	奈良・平安
15	多田神社遺跡	包含地	古墳・近世	39	下松塚遺跡	散布地	弥生・古墳・平安
16	池町古墳群	古墳	古墳	40	国分遺跡	散布地	弥生・古墳・奈良・平安
17	多田遺跡	散布地	奈良・中世	41	国分古墳	古墳	古墳
18	多田寺	寺院跡		42	若狭国分寺跡	国史	
19	多田古墳群	古墳	古墳	43	国分寺古墳	古墳	古墳
20	多田山城跡	城跡	中世	44	松塚古墳群	古墳	古墳
21	桐谷遺跡	散布地	弥生	45	上松塚遺跡	散布地	奈良・平安
22	検見坂古墳群	古墳	古墳	46	金屋マンダイ山古墳群	古墳	古墳
23	湯谷山城跡	城跡	中世	47	小浴神社裏山古墳群	古墳	古墳
24	遠敷堂ヶ谷遺跡	散布地		48	金屋敷遺跡	散布地	弥生・古墳

第1表は、福井県遺跡地図遺構地名表をもとに作成した。なお、種別・時代については最新の調査成果に合わせて変更した。

明であり、古墳とはみなさない説も提起されている。

これらの古墳を墓域とする人々の居住域については未だに不明な点が多いが、舞鶴若狭自動車道建設に伴う木崎遺跡の発掘調査において、居館とも想定される後期の大型掘立柱建物が検出され、その一端が明らかとなった。

古代

奈良・平安時代の遺跡は多田川、遠敷川、松永川が流れる各谷の出口付近に多数分布し、この一帯が若狭国における政治的な中心地であったと推測されている。近年の発掘調査で、下見定遺跡（26）は10世紀初頭から11世紀中頃、下松塚遺跡は9世紀後半から10世紀前半、国分遺跡（40）は8世紀から10世紀の時期にそれぞれ位置付けられ、各遺跡からは施釉陶器や輸入陶磁器、墨書土器を含む遺物が出土している。さらに、松永川の東岸に位置する西縄手下遺跡では8世紀中頃から中世前期にわたる多数の遺構・遺物が発見され、注目を集めた。遺構の規模や配置は段階的に変遷するが、特に9世紀には大規模な盛土が造成され、その上に大型礎石建物や築地塀が構築される。出土土器は須恵器を主体とし、墨書土器が多数認められる。そのほか、硯、石帯・帯金具、皇朝十二銭といった遺物も検出されている。こうした遺構・遺物は、公的施設の存在を色濃くうかがわせるものであった。

北川右岸の高塚遺跡では、庇付建物などの遺構と共に木簡や人形、多量の船岡式製塩土器が出土している。北川と松永川の合流点付近という立地から8世紀の国府津と想定され、若狭湾岸各地で生産された調塩が集積していたものと考えられている。その対岸にある府中石田遺跡（昭和60～61年調査）では、掘立柱建物と共に9世紀後半から10世紀前半の施釉陶器が発見された。また、この南方にある木崎遺跡では、10世紀を中心とする時期の施釉陶器や土師器の椀皿類が多数出土したほか、墨書土器や付札木簡などの文字資料も確認された。特に「乃井村」と墨書された灰釉陶器は、遠敷郡において初めて出土した若狭国濃飯駅家に関連するとみられる資料で、注目に値する。これらの遺跡においても、公的な施設の存在を想定することが可能である。

また、これらの遺跡を俯瞰できる位置にある木崎山城跡では、集石の下に方形石組をもつ12世紀後葉の経塚1基から、刀子・鉄鎌・火打金といった鉄製品や青銅製鏡、青磁など豊富な副納品が発見されている。

中世

主な遺跡としては、要衝に築かれた山城が挙げられる。主要幹道である丹後街道を見下ろす位置にあるのが、湯岡城（3）と木崎山城跡である。湯岡城は小規模で単純な構造から、1522年に若狭守護武田氏の一国守城として築城された後瀬山城の出城や見張所として利用されたと推測されている。城の成立は南北朝に求められ、若狭地方で最も古い年代を示している。湯岡城と南川を挟んで対峙する木崎山城跡は、大規模な堀切を中心とする城で、文献資料は皆無だが曲輪や土橋などがよく遺存している。また、山城が立地する丘陵の尾根北端付近では、経筒に外容器を被せる形態の経塚1基が発見された。台石を組む際に多数の銭貨を入れるもので、13世紀前半に比定される。木崎山城跡と多田川を挟んで対峙する湯谷山城（23）は永正・大永・享禄年中の築城と考えられ、城主は武田氏の被官、内藤下総守と伝えられる。広範囲に遺構が認められ、ふもとには内藤下総守館跡と伝えられる平場も存在する。なお、城域の尾根北端付近で12世紀末～13世紀に位置付けられる甕や青白磁合子の蓋片、銅銭が発見されており、かつて経塚が存在したと考えられている。

第3章 遺構と遺物

第1節 遺構および遺構内出土遺物

第1章で記述したように、一般県道小浜インター線道路改良工事に関しては、発掘調査終了後に隣接する3箇所工事立会を行っており、ここではその成果を含めて記述する。

調査区は、1～4層の水田耕作土および圃場整備時の盛土に覆われており、その下層の5・6層が包含層で、遺構確認面は7層上面である(第4図)。遺構確認面は湧水のある砂層で、調査地点の遺構確認面の標高は、約8m東方で舞鶴若狭自動車道建設に伴い発掘調査した地点のそれよりも0.2～0.5m低かった。このため調査中は遺構の崩壊が起こりやすい状況にあり、排水に最も苦心することとなった。

検出した遺構は、掘立柱建物7棟、土坑1基、柱穴約450基、溝11条などがある(第5図)。各遺構の規模(大きさ・深さなど)や方位(角度)の数値は、すべて遺構確認面を基準として、測量図上で測定・算出した概測値である。また、出土遺物の詳細については、第2～6表を参照されたい。

1 掘立柱建物

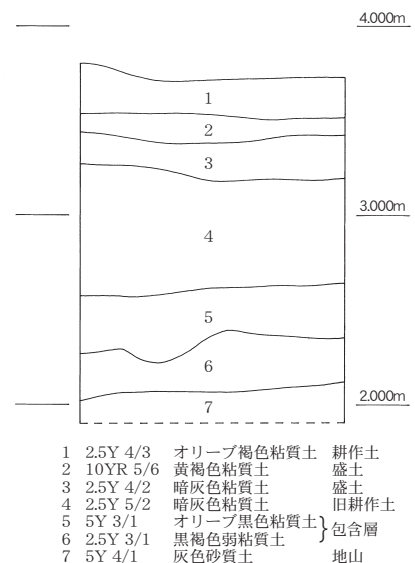
方形を基調として規則的に配列されている柱穴列を掘立柱建物と認定した。便宜上、柱穴列で構成される四角形の長軸方向を桁行、短軸方向を梁行と規定している。各掘立柱建物の桁行・梁行の長さは、各柱穴列の両端に所在する柱穴の中心を直線で結んだ距離を計測している。また、桁行方向は、座標北に対して、東または西に偏する角度を計測している。

SB01 (第5～7図)

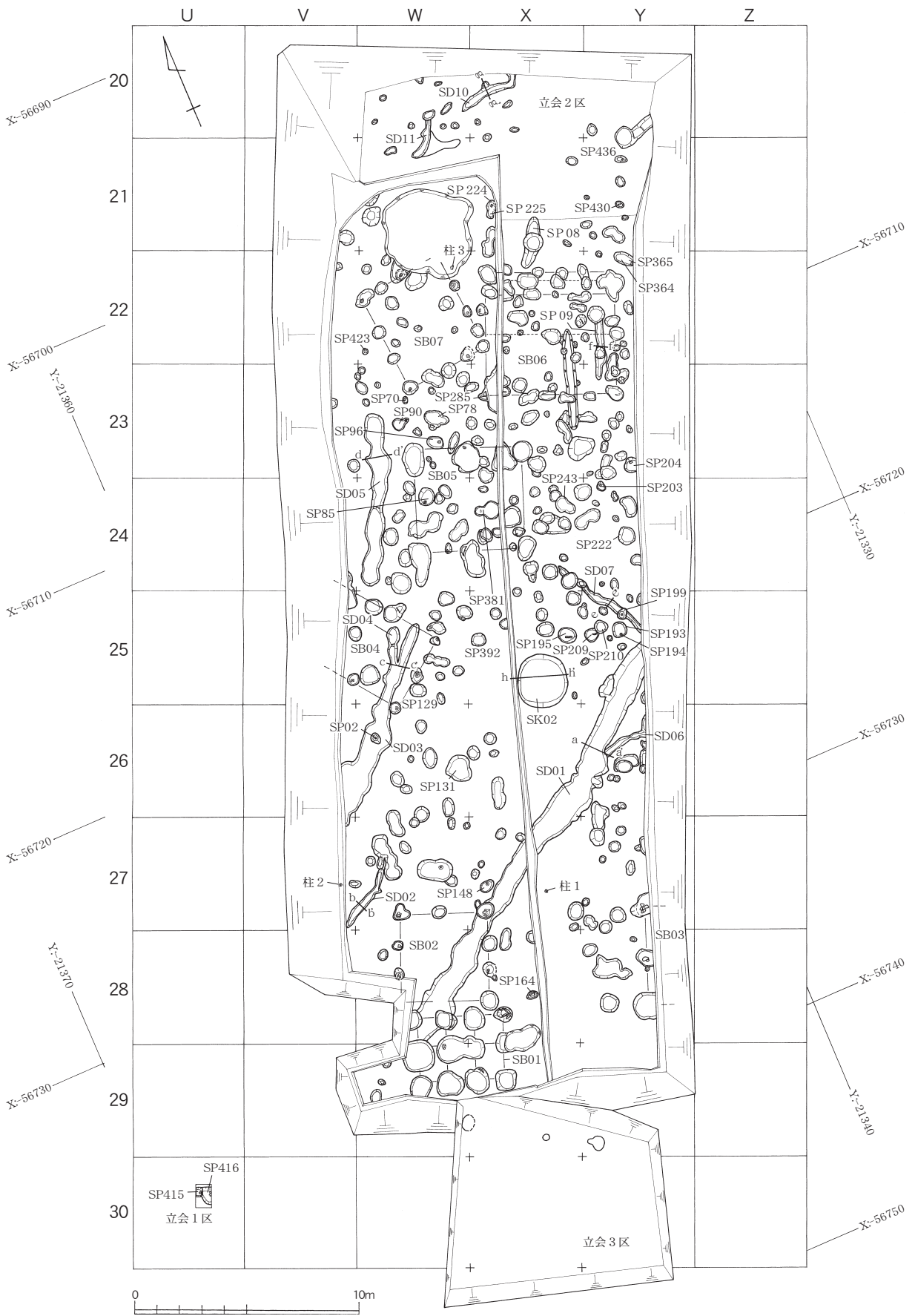
W28・W29・X28・X29グリッドで検出した総柱建物である。建物の南側が調査区外にあたり、また隣接する立会3区では湧水により十分な精査ができなかったため確定はできないが、桁行3間(3.88m)、桁行2間(2.86m)の東西棟の建物である可能性が高いと考えられる。桁行方向はN69°Wであり、柱間寸法は桁行が1.20～1.40m、梁行が1.33～1.53mをはかる。

柱穴は、平面形が隅丸方形または楕円形を呈し、長軸0.74～1.37m、短軸0.74～1.36m、深さ0.14～0.40mをはかる。柱穴SP21・22・28の掘削はSD01埋没後である。北東隅の柱穴SP50では、中央付近の底面に山石6石がコの字状に配置されていた。山石は長軸13～30cm、短軸5～12cm、厚さ9～22cmをはかる。石で囲まれた内寸は20cmであり、柱を囲んでいたと考えられることから、同様の規模の柱が立てられていたと推測できる。柱穴内に石が配置されている例を確認したのは、このSP50と、後述するSB03の柱穴SP171の2基に限られている。

柱穴SP20～22・26～29・31・47・48・50からは弥生土器の破片が少量出土している。加えて、SP29・31・47では土師器の破片、SP28・47では須恵器の破片も少量出土している。SP47で出土した須恵器の坏身(第7図1)は、底部に回転ヘラケズリ調整を施しており、丸みを帯びる器形を呈する。TK43型

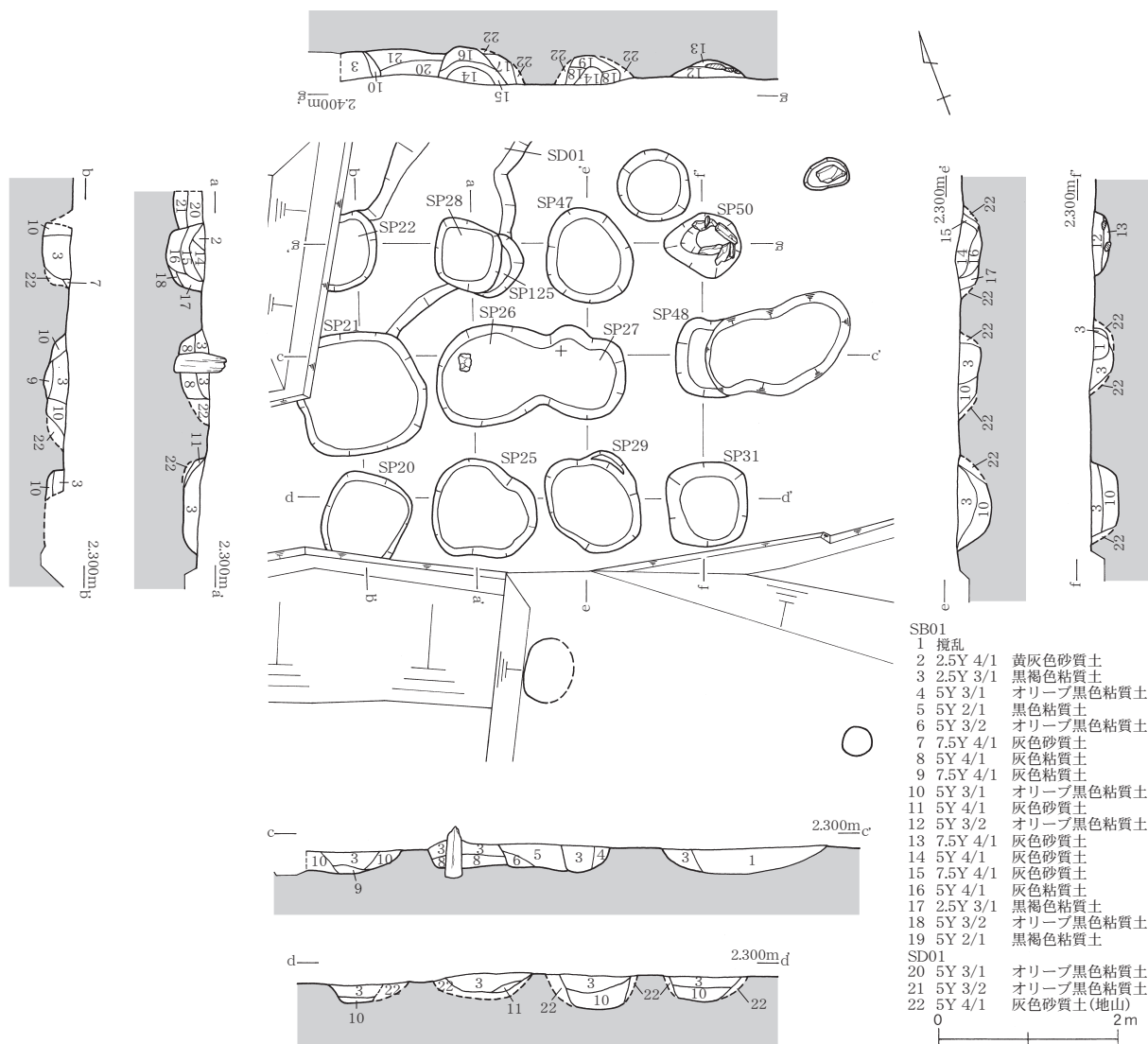


第4図 標準土層図



第5図 遺構配置図 (縮尺1/250)

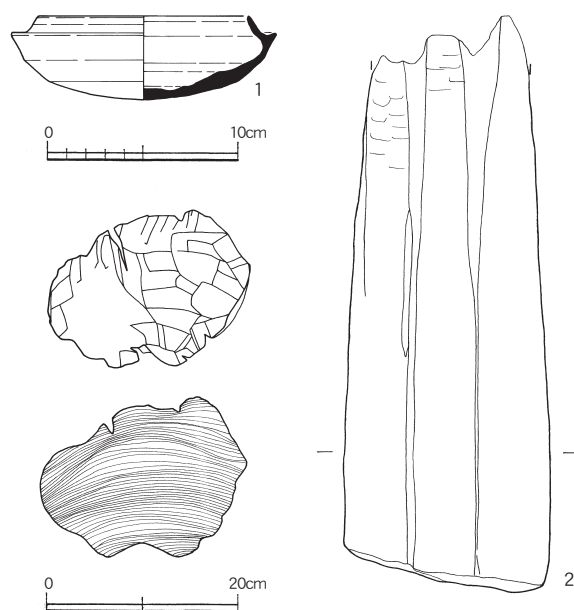
第1節 遺構および遺構内出土遺物



第6図 SB01実測図 (縮尺1/80)

式、Ⅱ様式4段階に相当すると考えられる。また、SP26にはミカン割材の柱根(第7図2)が遺存していた。この柱根は、今回の調査で検出された柱根のなかで唯一、年輪年代鑑定を実施できたもので、推定伐採年代は600年代の中頃以降が想定されている(第4章参照)。

柱穴から出土した須恵器の坏身の年代と、柱根の推定伐採年代には開きがあるが、SB01が古墳時代後期以降の所産であることは確かである。また、SB02と非常に近接して並立していることから、この2棟が同時期に並存していた蓋然性は低いと推測される。



第7図 SB01柱穴出土遺物実測図 (1:縮尺1/4, 2:縮尺1/8) 1:SP47, 2:SP26

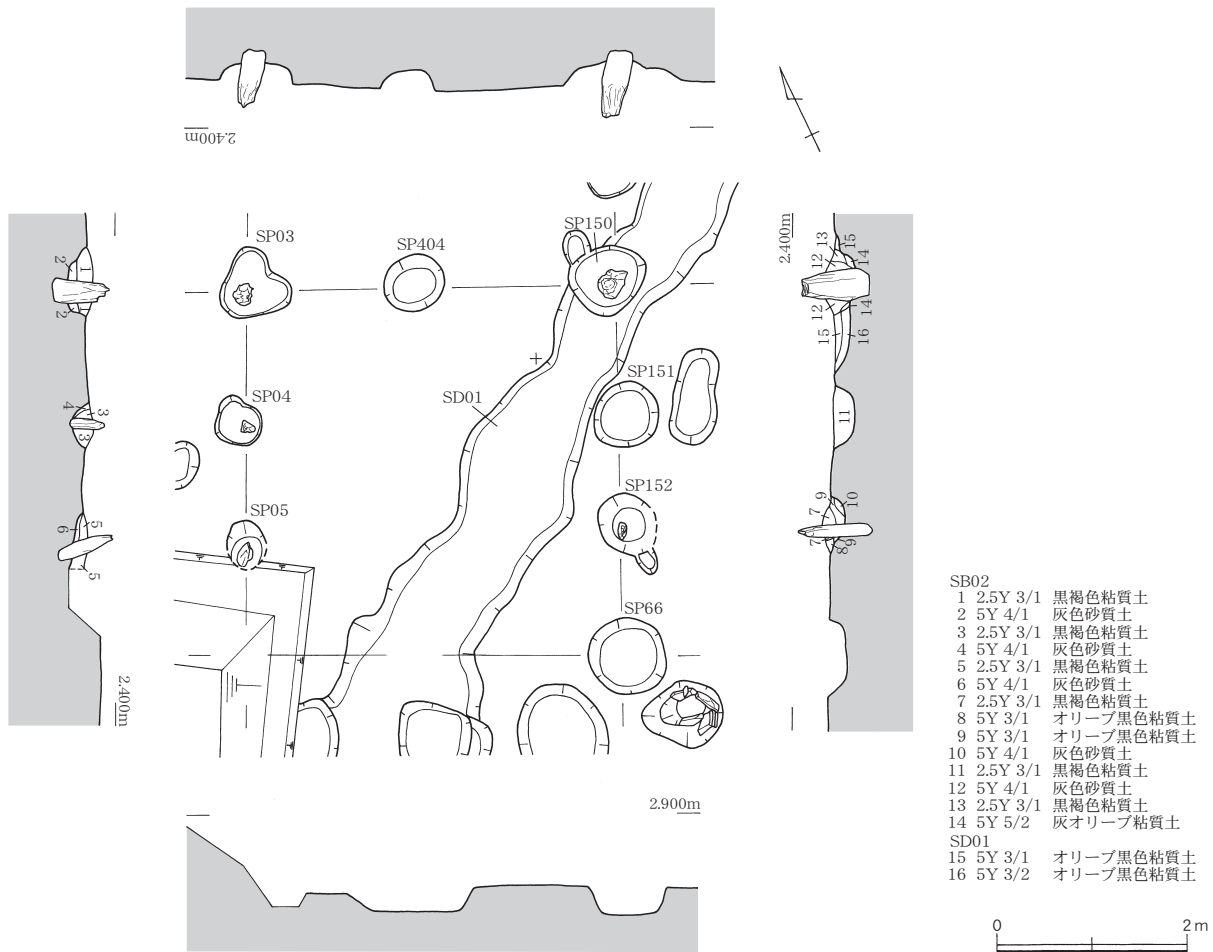
SB02 (第5・8・9図)

W27・W28・X27・X28グリッドで検出した側柱建物である。南西隅と南辺中央の柱穴を確認できなかったが、桁行3間(3.94m)、梁行2間(3.88m)の南北棟の建物と考えられる。SB01の北方に近接しており、桁行方向はN21°Eである。SB01の梁行とSB02の桁行は正確に平行している。柱間寸法は、桁行が1.25~1.37m、梁行が1.82~2.06mをはかる。

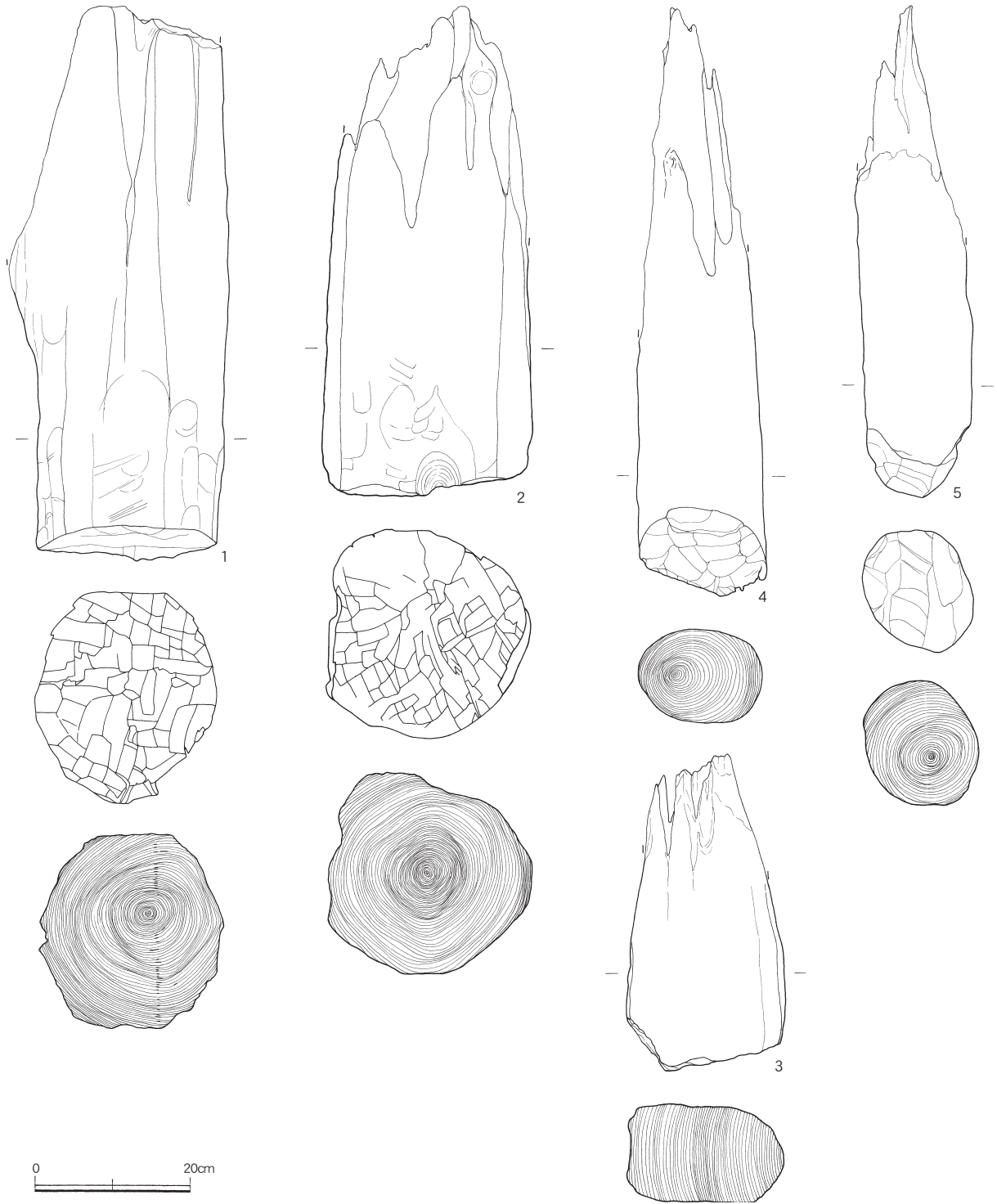
柱穴は、平面形が円形または楕円形を呈し、長軸0.46~0.80m、短軸0.40~0.67m、深さ0.12~0.28mをはかる。SP150の掘削はSD01埋没後である。

柱穴 SP03~05・66・150・404からは、弥生土器の破片が少量出土しているが、図示できるものはない。また、SP150・152・03・04・05には直径14~27cmの柱根が遺存していた(第9図)。これらを観察すると、隅にある柱根(第9図1・2)の直径の平均値26cmは、間にある柱根(第9図3~5)の直径の平均値17cmを大きく上回っており、隅の柱には直径が大きいものを選択されていたとみられる。SP04の柱根(第9図3)は芯去り材で断面が長六角形を呈するが、ほかは芯持ち材で断面が円形を呈する。隅の柱2本を含む柱根3本(第9図1~3)は基底を平坦に整えるが、間の柱根2本(第9図4・5)は基底を一方もしくは二方から斜めに切り取って尖らせている。

前述のようにSB01の柱穴とSB02の柱穴が非常に近い位置にあることから、並存していた可能性は低いと考えられる。しかしながら軸が合致していることから、近接する時期のものとして推測される。なお、SB01とSB02の柱穴には切り合いがみられないため、その前後関係については不明である。



第8図 SB02実測図(縮尺1/80)

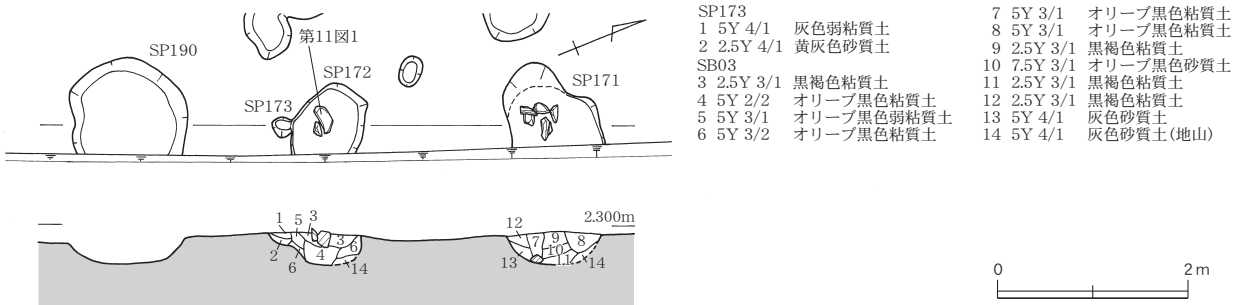


第9図 SB02柱穴出土遺物実測図（縮尺1/8） 1：SP150, 2：SP03, 3：SP04, 4：SP152, 5：SP05

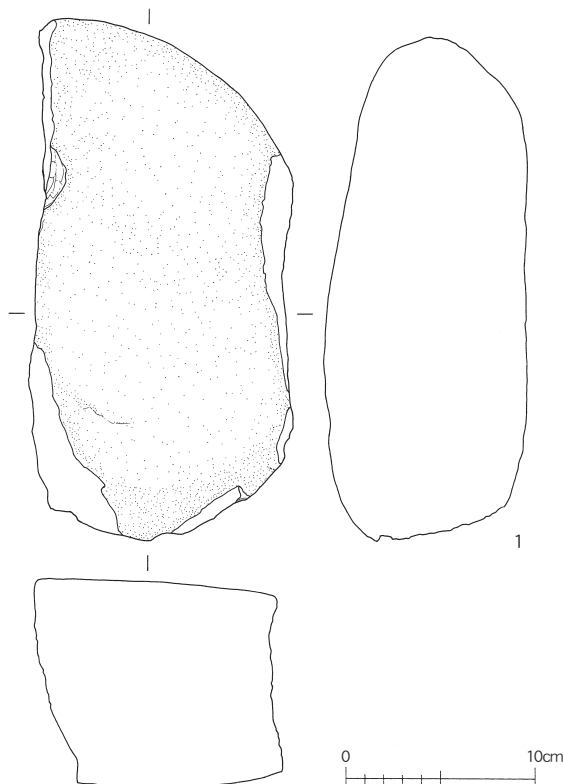
SB03（第5・10・11図）

Y27・28グリッドで検出した柱穴列である。2間（4.40m）分を検出し、柱間寸法は2.08～2.32mをはかる。この柱穴列に対応する柱穴列は東側の調査区外に所在すると考えられる。SB03はSB01・02の東方にあり、SB01からは6.50m離れている。桁行方向はN20°Eで、SB01・02とほぼ平行する。

柱穴は、平面形が楕円形を呈し、長軸0.72～1.20m、深さ0.25～0.32mをはかる。北西隅の柱穴SP171の底面には、山石5石がL字状に配置されており、山石は長軸15～26cm、短軸7～10cm、厚さ2～



第10図 SB03実測図 (縮尺1/80)



第11図 SB03 SP172出土遺物実測図 (縮尺1/4)

10cmをはかる。石で囲まれた内寸と柱痕は同じ10cmであり、同規模の柱が立てられていたと推定される。柱穴内に石が配置されていたのは、このSP171と前述のSB01の柱穴SP50の2基だけである。SP171では弥生土器と土師器の破片、SP190では弥生土器の破片が少量出土しており、SP172の上層では石皿(第11図1)が出土した。石皿は花崗閃緑岩製で、全体の1/3程度遺存している。中央部に向かって僅かに窪む平坦面側には使用痕跡が認められず、反対面に顕著な磨滅が認められる。両面で使用目的が異なっていた可能性もある。

SB04 (第5・12・13図)

V25・V26・W25・W26グリッドで検出した梁行2間(3.52m)の側柱建物である。西面は調査区外にのびているとみられ、桁行は2間(4.75m)分を確認している。南北棟の建物で、桁行方向はN34°Eである。柱間寸法は、桁行が2.35~2.40m、梁行が1.71~1.81mをはかる。

柱穴は、平面形が円形または楕円形を呈し、長軸0.47~0.78m、短軸0.41~0.68m、深さ0.11~0.25mをはかる。SP06・11・133・402では弥生土器の破片が少量出土しており、すべてに柱根が遺存していた。柱根は直径15cm前後の芯去り材で、基底は平坦に整えている。断面は、第13図1が長八画形、第13図2が六角形、第13図3・4が円形を呈する。

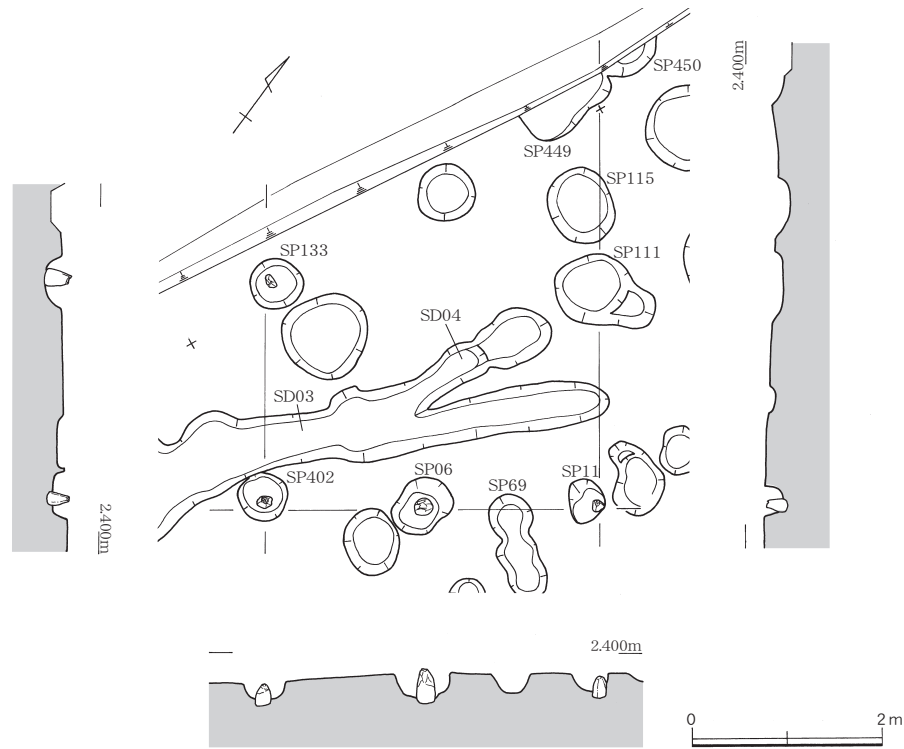
SB05 (第5・14・15図)

W23・W24・X23・X24グリッドで検出した桁行2間(4.83m)、梁行1間(4.57m)の側柱建物である。東西棟の建物で、桁行方向はN69°Wである。柱間寸法は桁行が2.41mをはかる。

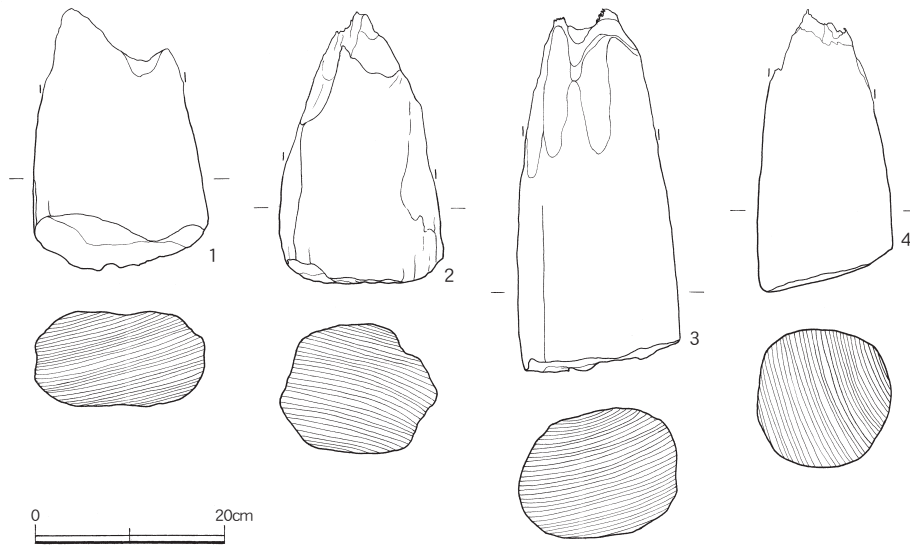
柱穴はすべて楕円形を呈し、長軸0.92~1.95m、短軸0.87~1.00m、深さ0.25~0.38mをはかる。SP110・384・238・448の平面形が長い楕円形を呈しているのは、柱筋に直交して南側に柱を倒して抜き取った痕跡の可能性が考えられる。

すべての柱穴から弥生土器の破片が少量出土しており、SP374・375で出土したものを図示する。第15図1・3は、弥生時代後期後半から末にかけての時期のものと考えられる。また、SP374には直径15cmの柱根(第15図2)が遺存していた。芯去り材で、断面は楕円形を呈する。基底は平坦に整えている。

第1節 遺構および遺構内出土遺物



第12図 SB04実測図（縮尺1/80）

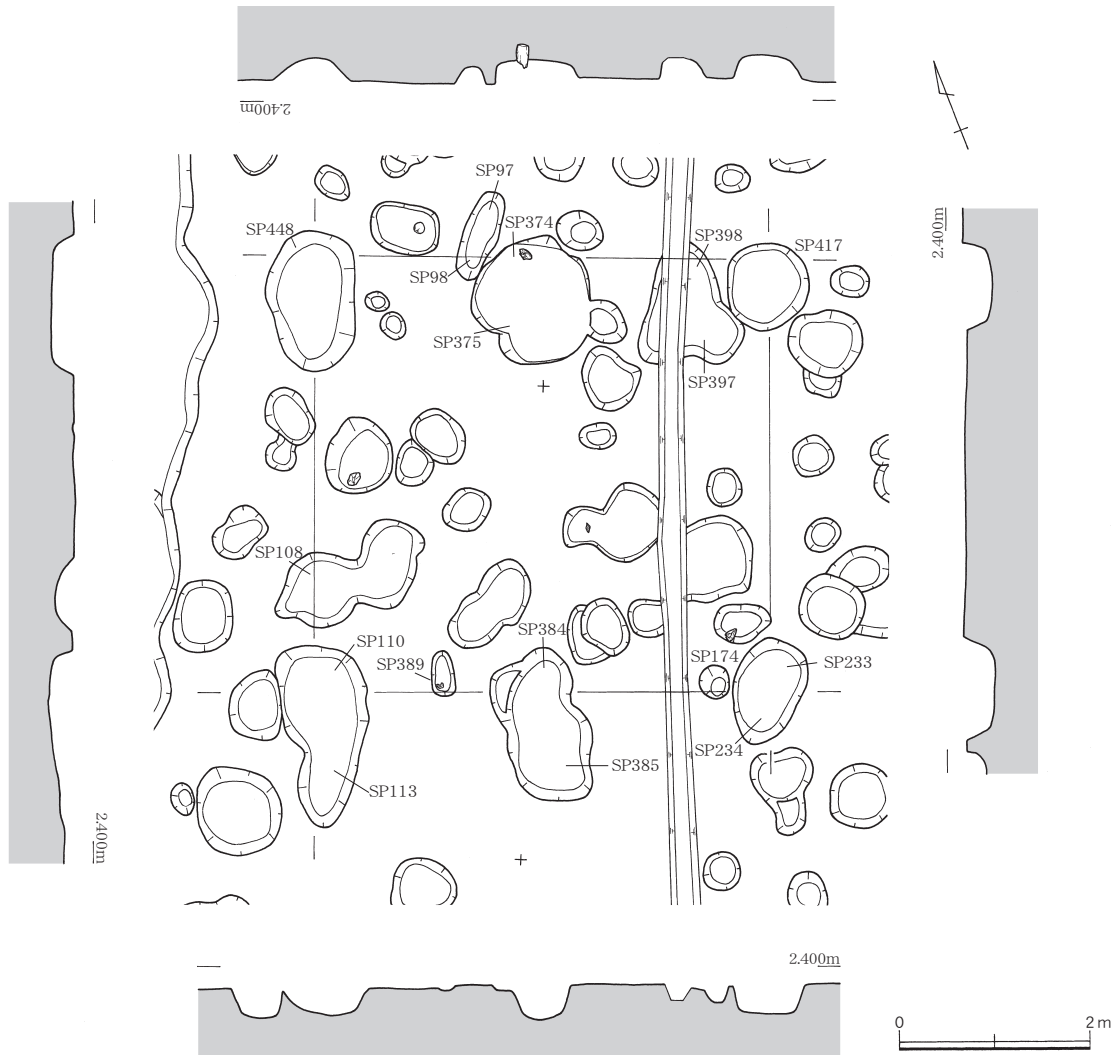


第13図 SB04柱穴出土遺物実測図（縮尺1/8） 1：SP133, 2：SP11, 3：SP06, 4：SP402

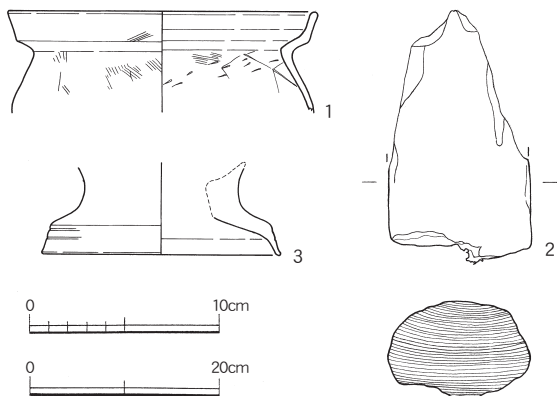
SB06（第5・16・17図）

X22・X23・Y22・Y23グリッドで検出した掘立柱建物で、建て替えを行っていると考えられる。

柱穴の切り合いから新段階と判断した建物は、桁行5間（5.80m）、梁行2間（5.04m）の側柱建物である。南北棟の建物で、桁行方向はN67°Wである。柱間寸法は、桁行が1.00～1.40m、梁行が2.38～2.66mである。柱穴は、平面形が円形または楕円形を呈し、長軸0.58～0.94m、短軸0.38～0.60m、深さ0.22～0.39mをはかる。柱穴 SP228・276・303・308・312・334・348からは弥生土器の破片が少量出土し、SP328では板状石製品（第17図1）が出土している。板状石製品は、砂岩製の自然礫が利用される。わずかに窪みを持つ面に磨滅が認められ、右下がり方向の長さ0.5～1.5cmの細かい擦痕が顕著に



第14図 SB05実測図 (縮尺1/80)



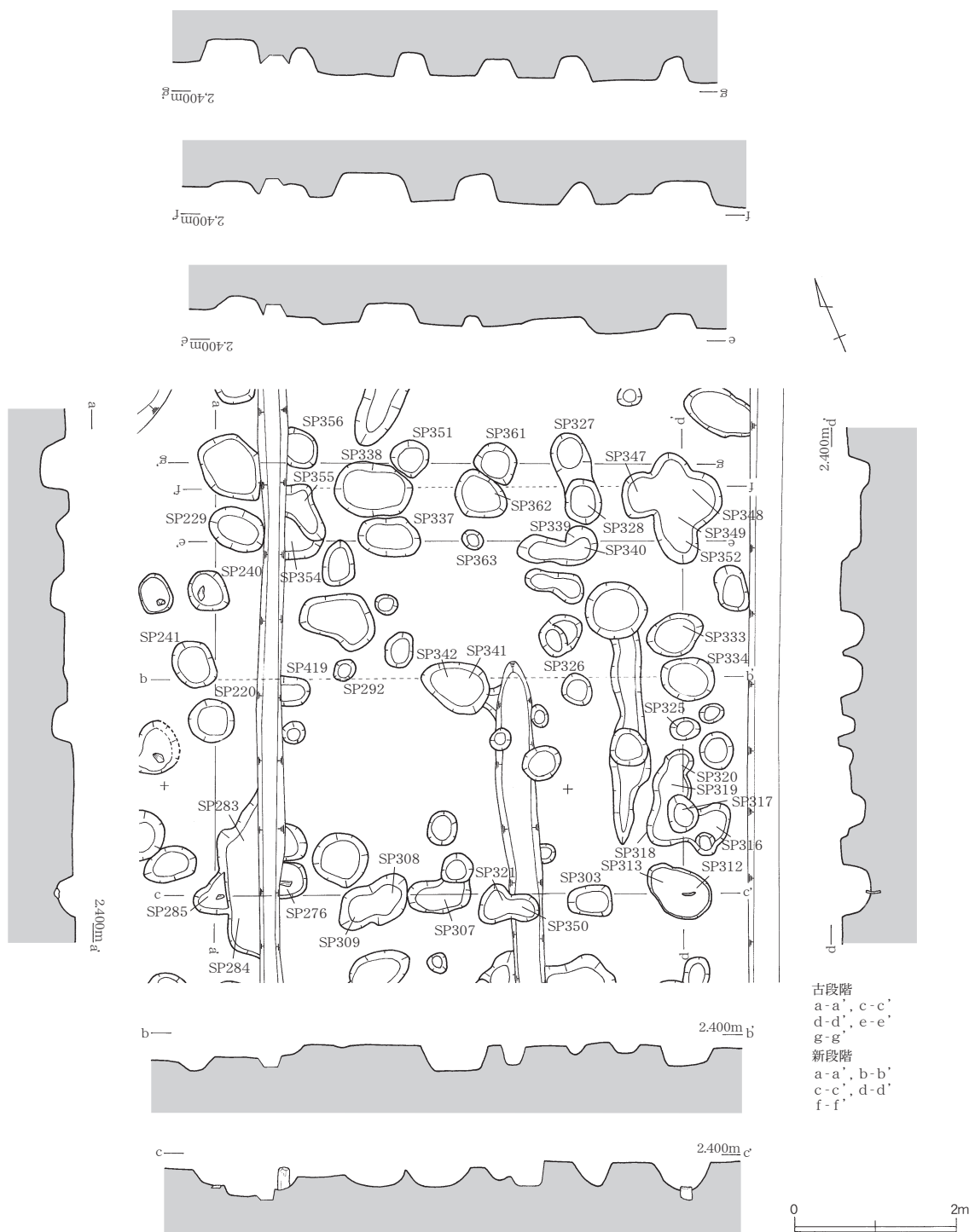
第15図 SB05柱穴出土遺物実測図
(1・3:縮尺1/4, 2:縮尺1/8)
1・2:SP374, 3:SP375

認められる。また、反対面には横方向の傷がみられる。また、SP276・312・385には柱根(第17図2~4)が遺存していた。残りがよくないが、いずれも芯去り材とみられる。

古段階と判断した建物は、桁行5間(5.80m)、梁行4間(4.38m)の側柱建物で、北面に庇が付く。東西棟の建物で、桁行方向はN67°Wである。母屋の柱間寸法は、桁行が1.00~1.40m、梁行が0.82~1.48mである。母屋と庇の柱間は、桁行で0.94mをはかる。柱穴は、平面形が円形または楕円形を呈し、母屋の柱穴は長軸0.38~0.78m、短軸0.26~0.60m、深さ0.14~0.36mをはかる。庇

の柱穴は、長軸0.40~0.94m、短軸0.44~0.74m、深さ0.25~0.33mをはかる。柱穴SP327・333・337・340・356・361からは弥生土器の破片が少量出土している。また、SP240には芯去り材の柱根(第17図5)が遺存していた。

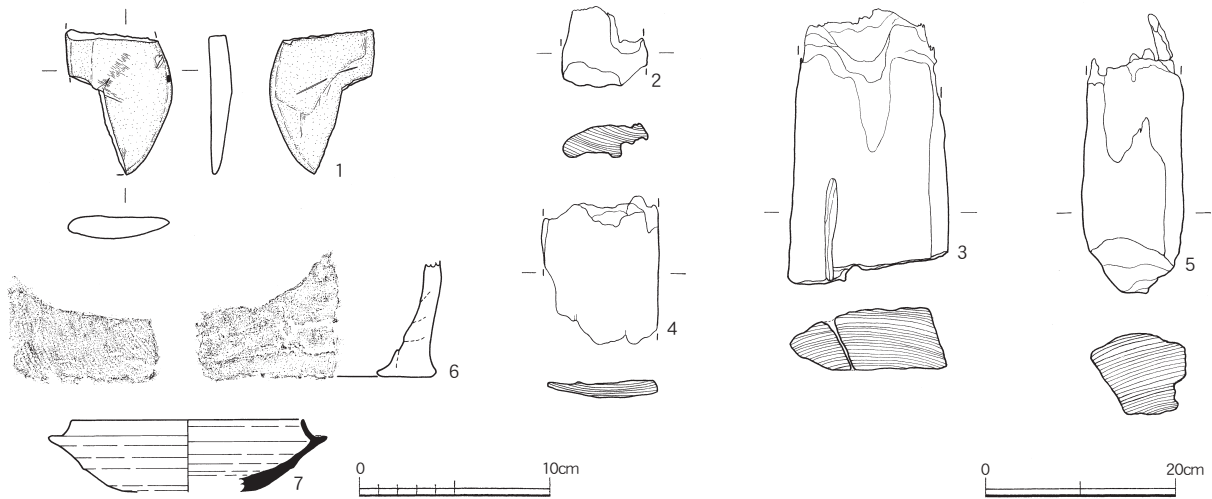
第1節 遺構および遺構内出土遺物



第16図 SB06実測図 (縮尺1/80)

第17図にはSB06の柱穴と重複するピットの出土遺物も掲載した。竈形土製品(第17図6)は、柱穴SP285より新しいと考えられるSP283で出土した。基部で、内外面に肥厚する。柱穴SP317を切るSP320から出土した須恵器の坏身(第17図7)はTK43型式、Ⅱ様式4段階に相当すると考えられる。

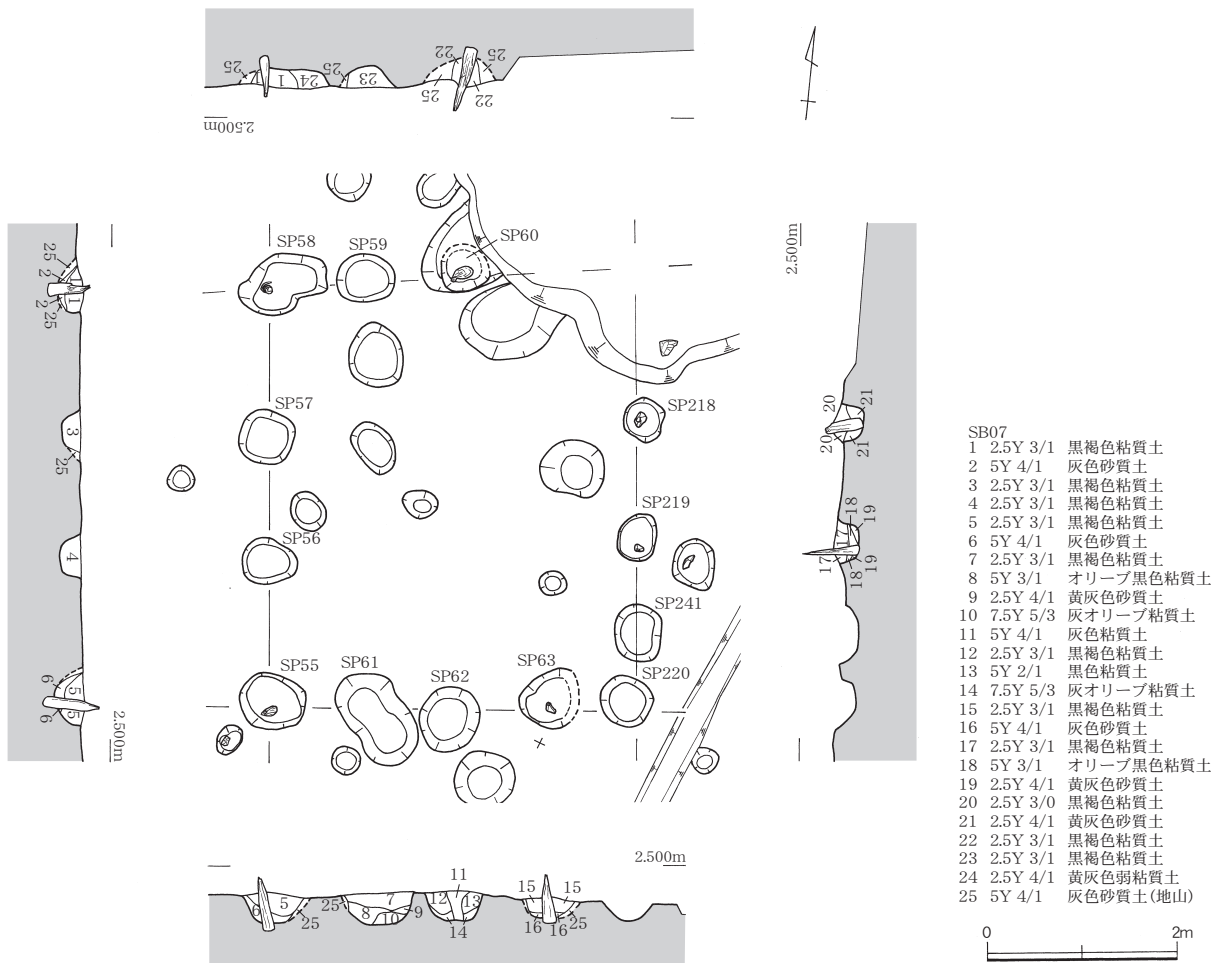
SB06は建て替えを行っていても軸はSB01~03・05と概ね揃っており、整然とした配置がなされていたことをうかがわせる。柱穴より新しいピットの出土遺物も含めて判断すれば、SB06は古墳時代後期に属する可能性が高いと考えられる。



第17図 SB06柱穴他出土遺物実測図 (1・6・7：縮尺1/4, 2~5：縮尺1/8)
 1：SP328, 2：SP285, 3：SP276, 4：SP312, 5：SP240, 6：SP283, 7：SP320

SB07 (第5・18・19図)

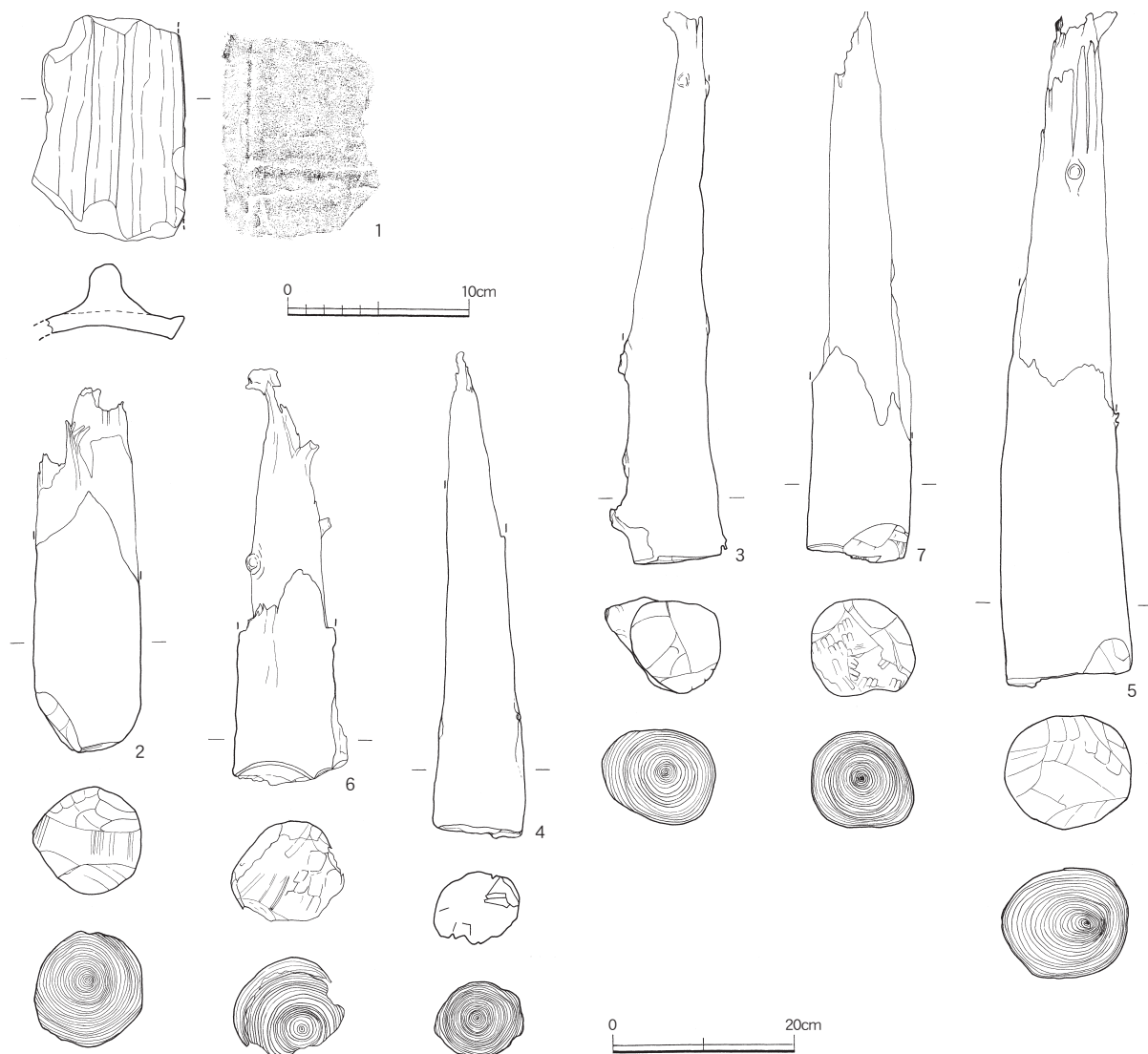
W22・W23・X22グリッドで検出した桁行3間(4.51m)、梁行4間(3.88m)の側柱建物である。北東隅とその西隣の柱穴は攪乱のため確認することはできなかった。南北棟の建物であり、桁行方向はN60°Wである。柱間寸法は、桁行が0.47~0.70m、梁行が0.89~1.03mである。



第18図 SB07実測図 (縮尺1/80)

柱穴は、平面形が円形、楕円形または隅丸方形を呈し、長軸0.47~0.70m、短軸0.38~0.62m、深さ0.14~0.28mをはかる。柱穴 SP62には直径10cmの柱痕が認められ、SP55・58・60・63・218・219には直径10~14cmの柱根（第18図2~7）が遺存していた。柱根はすべて芯持ち材で、断面は円形を呈し、基底部は平坦に整えている。SP55~62・219・220では弥生土器の破片が少量出土しており、SP62からは須恵器の破片1点も出土している。SP218では土師器の破片が少量出土しており、このうち甕形土製品（第19図1）を図示する。底を貼り付ける付け底系のもので、焚口の縁部は内傾する面をもつ。

出土遺物から判断すれば、古墳時代後期に属すると遺構と考えられる。

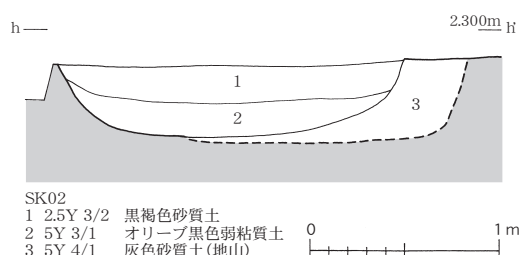


第19図 SB07柱穴出土遺物実測図（1：縮尺1/4，2~7：縮尺1/8）
1・2：SP218，3：SP219，4：SP63，5：SP60，6：SP58，7：SP55

2 土坑

SK02（第5・20図）

X25グリッドで検出する。平面形は円形を呈し、直径1.82m、深さ0.38mをはかる。断面形は浅皿状を呈する。遺物は確認していない。



第20図 SK02土層断面図（縮尺1/40）

3 柱穴

多数の柱穴または柱穴状ピットを検出している。柱根が遺存するものが多数あり、それらを中心に記述する。柱根以外の出土遺物には、弥生時代後期前半の土器（第24図27）、弥生時代後期後半から末にかけての土器、古墳時代中期から後期にかけての土師器（第22図8）、古墳時代後期から終末期にかけての須恵器（第22図9～11・17・20・21、第24図28）、甕形土製品（第22図3・7）、板状石製品（第24図30）などがみられる。

SP02（第5・21・22図）

W26グリッドで検出したもので、SD03埋没後に構築される。平面形は楕円形を呈し、長軸0.45m、短軸0.39m、深さ0.21mをはかる。断面形は角が緩やかな逆台形を呈する。柱穴の中央に芯取り材の柱根（第22図1）が遺存するほか、弥生土器の破片が少量出土している。

SP70（第5・21・22図）

W23グリッドで検出する。平面形は楕円形を呈し、長軸0.35m、短軸0.25m、深さ0.18mをはかる。断面形はU字状を呈し、柱穴の南西寄りに断面が円形を呈する芯持ち材の柱根（第22図2）が遺存する。このほかに、弥生土器の破片が少量出土している。

SP85（第5・21・22図）

W24グリッドで検出する。平面形は楕円形を呈し、長軸0.80m、短軸0.70m、深さ0.33mをはかる。断面形は角が緩やかな逆台形を呈し、柱穴の南西寄りに柱根（第22図4）が遺存する。断面が円形を呈する芯持ち材であり、基底部は平坦に整えている。ほかに遺物は出土していない。

SP90（第5・21・22図）

W23グリッドで検出する。SP91を切って構築される。平面形は楕円形を呈し、長軸0.30m、短軸0.26m、深さ0.21mをはかる。断面形はU字状を呈する。柱根（第22図5）が遺存するが、ほかに遺物は出土していない。

SP96（第5・21・22図）

W23グリッドで検出する。平面形は楕円形を呈し、長軸0.72m、短軸0.55m、深さ0.25mをはかる。断面形は角が緩やかな逆台形を呈し、柱穴の東寄りに柱根（第22図6）が遺存する。断面が円形を呈する芯持ち材で、基底部は平坦に整えている。ほかに、弥生土器の破片が少量出土している。

SP148（第5・21・22図）

X27グリッドで検出したもので、SD01埋没後に構築される。平面形は楕円形を呈し、長軸0.67m、短軸0.48m、深さ0.18mをはかる。断面形は角が緩やかな逆台形を呈し、柱穴の北寄りに柱根（第22図12）が遺存する。状態が悪いが芯持ちの丸柱と考えられる。ほかに遺物は出土していない。

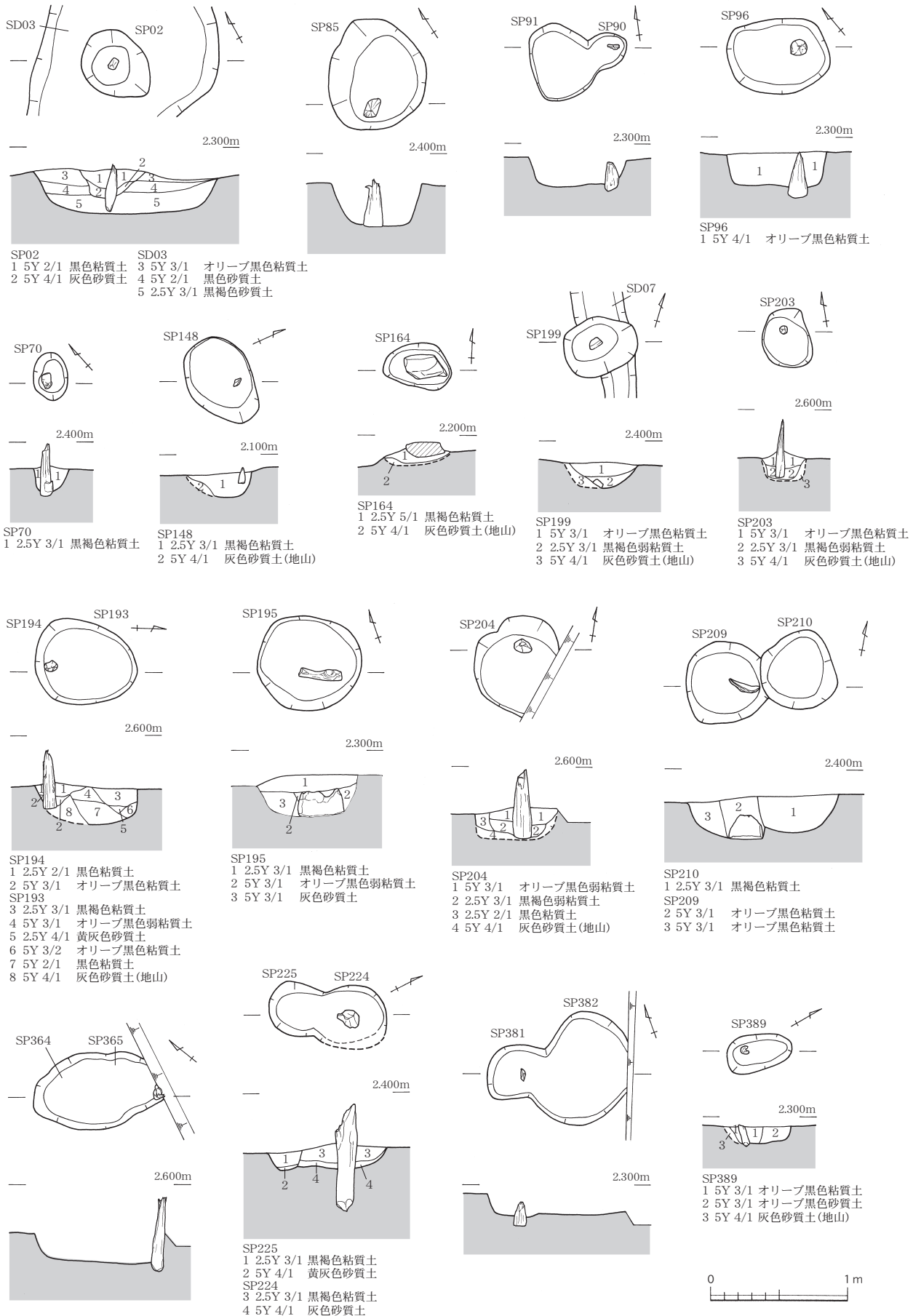
SP164（第5・21図）

X28グリッドで検出する。平面形は楕円形を呈し、長軸0.50m、短軸0.34m、深さ0.11mをはかり、断面形は浅皿状を呈する。柱穴の中央やや東寄りには長軸27cm、短軸15cm、厚さ11cmをはかる長方形の石が置かれており、礎石の可能性が高いと考えられる。ほかに遺物は出土していない。

SP194（第5・21・22図）

Y25グリッドで検出したもので、SP193を切って構築される。平面形は楕円形を呈し、長軸0.60m、短軸0.37m、深さ0.18mをはかる。断面形はU字状を呈し、柱穴の南寄りに柱根（第22図13）が遺存する。芯持ちの丸柱で、基底部は平坦に整えている。ほかに、弥生土器の破片が少量出土している。

第1節 遺構および遺構内出土遺物



第21図 柱穴実測図1 (縮尺1/40)

SP195 (第5・21・22図)

X25グリッドで検出した。平面形は円形を呈し、長軸0.69m、短軸0.65m、深さ0.31mをはかる。断面形は角が緩やかな逆台形である。柱穴の中央やや南東寄りには柱根(第22図14)が遺存していた。断面が長方形の五平状を呈し、木取りは板目取りである。ほかに弥生土器の破片が少量出土している。

SP199 (第5・21・22図)

Y25グリッドで検出したもので、SD07埋没後に構築される。平面形は楕円形を呈し、長軸0.50m、短軸0.42m、深さ0.39mをはかる。断面形はU字状を呈し、柱穴の中央に木片(第22図15)が遺存する。芯持ち材で、柱の一部と考えられる。

SP203 (第5・21・22図)

Y24グリッドで検出する。平面形は楕円形を呈し、長軸0.43m、短軸0.36m、深さ0.20mをはかる。断面形はU字状を呈し、柱穴の北寄りに柱根(第22図16)が遺存する。断面が円形を呈する芯持ち材であり、基底部分は平坦に整えている。ほかに、弥生土器の破片が少量出土している。

SP204 (第5・21・22図)

Y23グリッドで検出する。平面形は楕円形を呈し、長軸0.71m、短軸0.60m、深さ0.21mをはかる。断面形はU字状を呈し、柱穴の北寄りに柱根(第22図18)が遺存する。断面が円形を呈する芯持ち材であり、基底部分は平坦に整えている。ほかに、弥生土器と土師器の破片が少量出土している。

SP209 (第5・21・22図)

Y25グリッドで検出する。SP210に切られる。平面形は円形を呈し、長軸0.57m、短軸0.60m、深さ0.30mをはかる。断面形は角が緩やかな台形を呈する。柱穴の東寄りに柱根(第22図19)が遺存しており、断面が長方形の五平状を呈する。木取りは板目取りである。ほかに、弥生土器の破片が少量出土している。

SP224 (第5・21・22図)

X21グリッドで検出する。SP225に切られる。平面形は楕円形を呈し、長軸約0.7m、短軸0.47m、深さ0.19mをはかる。断面形は角が緩やかな逆台形で、柱穴の中央に柱根(第22図21)が遺存する。断面が円形を呈する芯持ち材であり、基底部分の中央を杭状に尖らせている。ほかに遺物は出土していない。

SP365 (第5・21・22図)

Y22グリッドで検出する。平面形は不整な楕円形を呈し、長軸0.94m、短軸0.47m、深さ0.23mをはかる。断面形は角が緩やかな逆台形を呈し、柱穴の南東隅には柱根(第22図23)が遺存する。断面が円形を呈する芯持ち材であり、基底部分は平坦に整えている。ほかに遺物は出土していない。

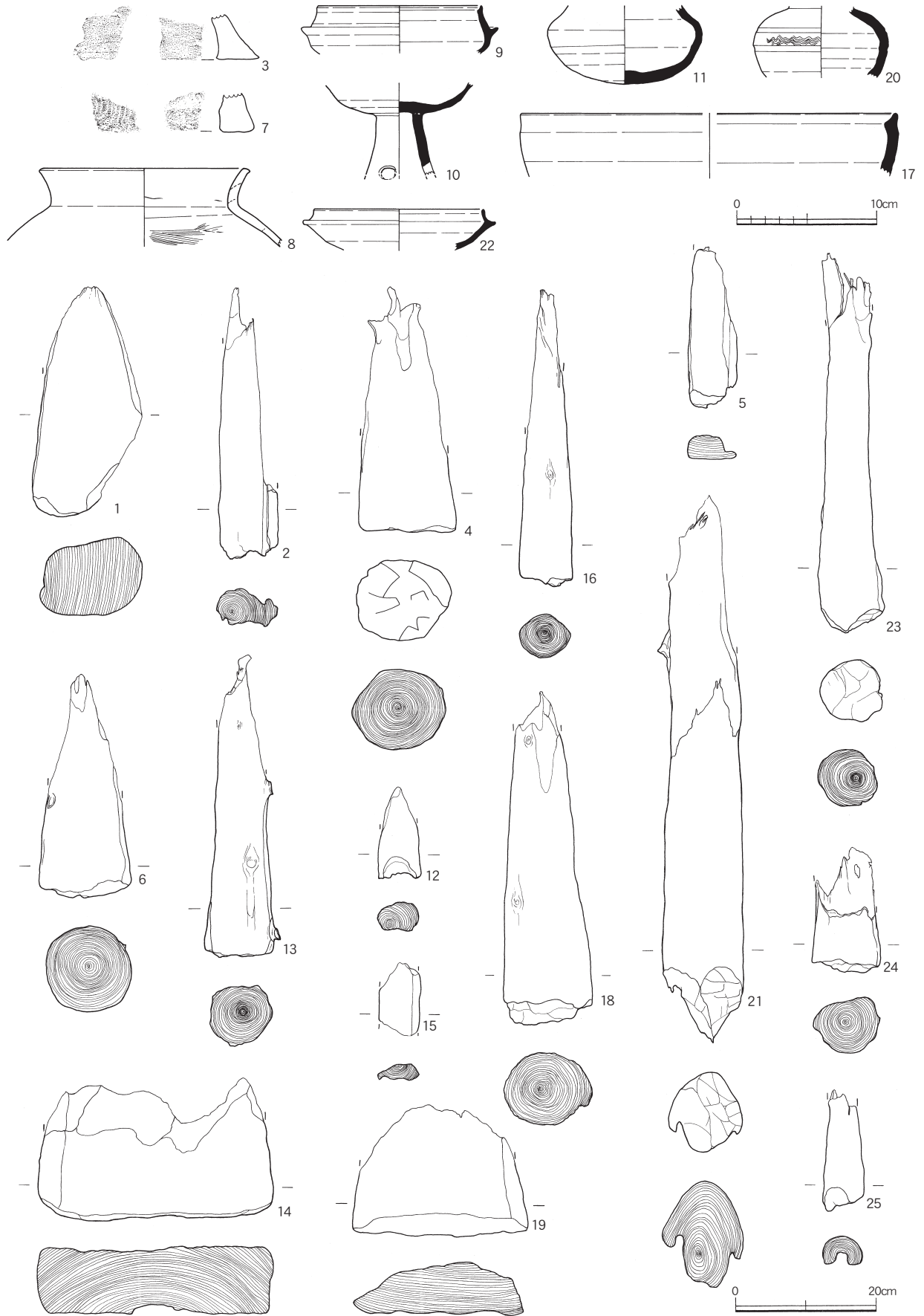
SP381 (第5・21・22図)

X24グリッドで検出する。掘削中に断面が崩れたため、SP382との切り合い関係は不明である。平面形は円または楕円形と考えられ、直径0.4m前後、深さ0.17mをはかる。断面形は角が緩やかな逆台形を呈し、柱穴のほぼ中央に断面が円形を呈する芯持ち材の柱根(第22図24)が遺存する。ほかに、弥生土器の破片が少量出土している。

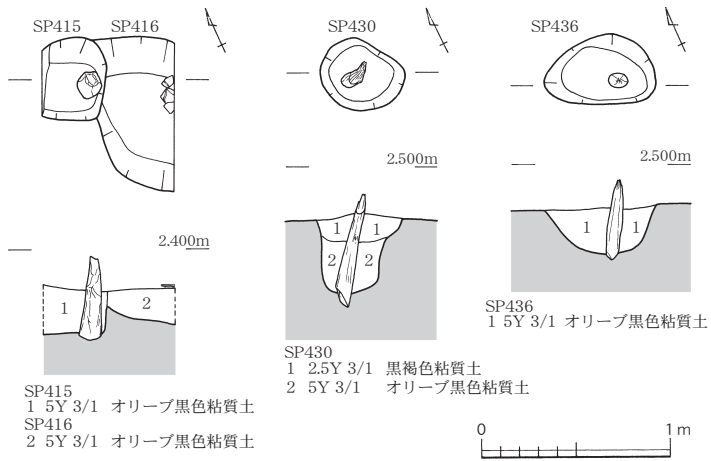
SP389 (第5・21・22図)

W24グリッドで検出する。平面形は楕円形を呈し、長軸0.48m、短軸0.27m、深さ0.12mをはかる。断面形は角が緩やかな逆台形を呈し、柱穴の南西寄りに柱根(第22図25)が遺存する。状態は悪いが、断面が円形を呈する芯持ち材と考えられる。ほかに遺物は出土していない。

第1節 遺構および遺構内出土遺物



第22図 柱穴出土遺物実測図1 (3・7~11・17・20・22:縮尺1/4, 1・2・4~6・12~16・18・19・21・23~25:縮尺1/8)
 1:SP02, 2:SP70, 3:SP78, 4:SP85, 5:SP90, 6:SP96, 7:SP129, 8~10:SP131, 11~12:SP148, 13:SP194, 14:SP195,
 15:SP199, 16:SP203, 17・18:SP204, 19:SP209, 20:SP222, 21:SP224, 22:SP243, 23:SP365, 24:SP381, 25:SP389



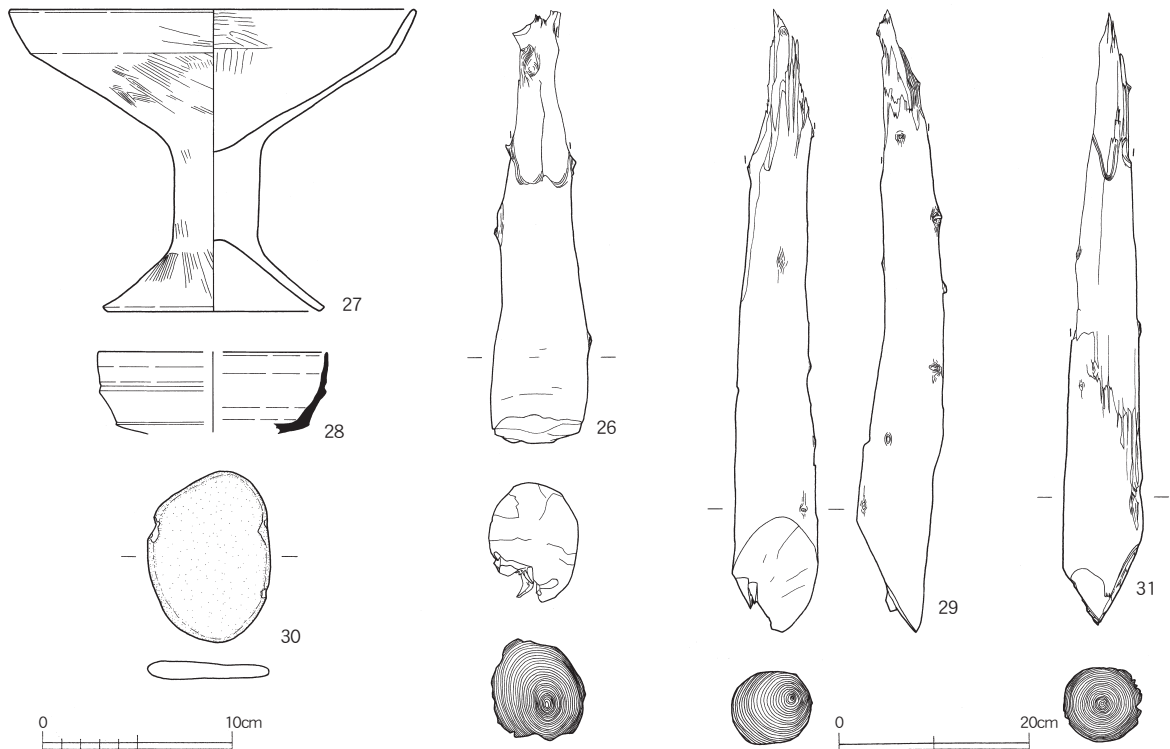
第23図 柱穴実測図2 (縮尺1/40)

SP430 (第5・23・24図)

立会2区、Y21グリッドで検出する。平面形は楕円形を呈し、長軸0.45m、短軸0.39m、深さ0.42mをはかる。断面形はU字状を呈する。弥生土器の破片が少量出土し、柱穴のやや北西寄りに柱根(第24図29)が遺存する。柱根は断面が円形の芯持ち材で、基底部分は一方向から斜めに切り取って尖らせている。

SP436 (第5・23・24図)

立会2区、Y21グリッドで検出する。平面形は楕円形を呈し、長軸0.59m、短軸0.38m、深さ0.25mをはかる。断面形は角が緩やかな逆台形を呈し、柱穴のやや東寄りに柱根(第24図31)が遺存する。断面が円形を呈する芯持ち材で、基底部の中央を杭状に尖らせている。ほかに弥生土器の破片が少量と、板状石製品(第24図30)が出土している。板状石製品は砂岩製で、厚さ1cmの薄い板状の自然円礫を使用し、片面にのみ磨滅が認められる。



第24図 柱穴出土遺物実測図2 (27・28・30:縮尺1/4, 26・29・31:縮尺1/8)
26: SP415, 27: SP416, 28: SP423, 29: SP430, 30: SP436, 31: SP436

SP415 (第5・23・24図)

立会1区、U30グリッドで検出する。パイプ埋設幅の掘削であったため、西側は確認できなかった。SP416を切って構築される。平面形は隅丸方形と考えられ、一辺0.45m、深さ0.27mをはかる。断面形は角が緩やかな逆台形を呈する。柱穴の東寄りに断面が楕円形を呈する芯持ち材の柱根(第24図26)が遺存する。ほかに、弥生土器が少量出土しているが、図示できるものはない。

4 溝

SD01 (第5・25・26図)

Y25～W29グリッドにかけて検出したもので、約12m東方には舞鶴若狭自動車道関連での調査で検出したSD20(第39図)、約7m西方にはSD03がほぼ平行してはしる。SD06を切る。北東から南西方向に流れていたと推測される。幅0.92～2.25m、深さ0.07～0.27mをはかり、断面形は角が緩やかな逆台形を呈する。遺物は弥生土器が大半で、ほかに須恵器、土師器が少量出土している。第26図1は、直立する口縁部外面に擬凹線を施す甕で、時期は弥生時代後期後半と考えられる。

SD02 (第5・25図)

V・W27グリッドで検出したもので、南西から北東方向に流れていたと推測される。約4m西方にはSD01、約3m東方にはSD03がほぼ平行してはしる。幅0.28～0.52m、深さ0.09～0.16mをはかり、断面形は浅皿状を呈する。弥生土器が少量出土しているが、図示できるものはない。

SD03 (第5・25・26図)

W25～V27グリッドにかけて検出する。SD04を切り、北東から南西方向に流れていたと推測される。SD01と平行してはしる。幅0.58～2.30m、深さ0.18～0.38mをはかり、断面形は角が緩やかな逆台形を呈する。遺物は弥生土器と軽石が出土している。弥生土器は甕、壺、高坏などがあり、弥生時代後期後半から末に比定される。甕はすべて有段口縁を呈する。口縁部はあまり伸張せず、外傾するもの(第26図2・4)と、ほぼ直立するもの(第26図3)がある。体部は倒卵形を呈し、体部最大径は中位にある。壺(第26図5)は長頸のもので、直立する口縁部の外面に擬凹線を施す。頸部はミガキ調整を行い、円形浮文を付加する。脚部(第36図7)はハの字状にひらく器形で、小孔3孔を穿つ。軽石(第26図8)は砥石として使用された可能性がある。図正面下半部に、長さ7cm、幅4～5cmの磨滅した平坦面を形成しているほか、ほぼ全面に渡って擦られたような磨滅が認められ、擦痕は主として長軸方向に残されている。また、正面および裏面の上部には、手ずれのような変色した窪みもみられる。

SD04 (第5・25図)

E8～K12グリッドにかけて検出する。北から南方向に流れてSD03に注いでいたと推測される。幅0.44～0.80m、深さ0.11～0.14mをはかり、断面形は角が緩やかな逆台形を呈する。弥生土器が少量出土しているが、図示できるものはない。

SD05 (第5・25・26図)

W23・24グリッドで検出したもので、北から南方向に流れていたと推測される。現状では途切れているが、SD04またはSD03の流路の一部であった可能性も考えられる。幅0.58～1.00m、深さ0.11～0.20mをはかり、断面形は角が緩やかな逆台形を呈する。弥生時代後期後半から末にかけての土器が出土しており、甕・高坏・器台などがみられる(第26図9～15)。甕はすべて有段口縁を呈し、口縁部はSD03出土資料(第26図2～4)より伸張するものが多い。口縁部が外傾するもの(第26図10～12)と、直立して立ち上がり端部付近で外反するもの(第26図9)がある。唯一、全体の器形を復原できた第26図12をみると、体部は倒卵形を呈し、体部最大径はSD03出土資料より上位にある。よって、この甕はSD03出土資料より新しい時期のものと考えられる。高坏(第26図14)は坏部が有段口縁の鉢形を呈するもので、大型品である。器台(第36図15)は大きく外反する受部に、有段の口縁部が直立する器形を呈する。高坏・器台ともに口縁部外面に擬凹線を施す。

SD06 (第5・25図)

Y26グリッドで検出したもので、SD01に切られる。西から東方向に流れていたと推測される。幅0.27~0.40m、深さ0.08~0.14mをはかり、断面形はU字状を呈する。弥生土器が少量出土しているが、図示できるものはない。

SD07 (第5・25図)

X24~Y25グリッドにかけて検出したもので、南東から北西方向に流れていたと推測される。調査区の制限のため確認できなかったが、SD01から枝分かれしている可能性が高い。幅0.30~0.53m、深さ0.07~0.12mをはかり、断面形は角が緩やかな逆台形を呈する。弥生土器が少量出土しているが、図示できるものはない。

SD09 (第5・25図)

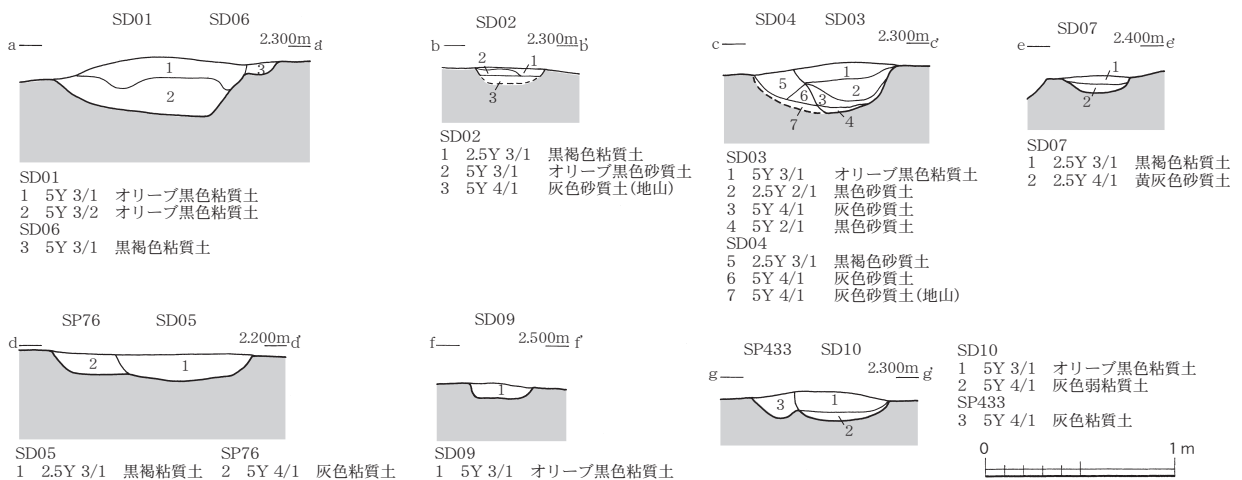
Y22グリッドで検出する。南から北方向に流れていたと推測される。幅0.30~0.57m、深さ0.10~0.13mをはかり、断面形は浅皿状を呈する。弥生土器と土師器が少量出土しているが、図示できるものはない。

SD10 (第5・25・26図)

立会2区、W・X20グリッドで検出したもので、東から西方向に流れていたと推測される。幅0.25~0.44m、深さ0.12mをはかり、断面形は浅皿状を呈する。上面で竈形土製品が出土したほか、弥生土器が少量出土している。竈形土製品は2点ある。第26図16は体部下半を欠く。庇を貼り付ける付け庇系のもので、くの字状口縁をもつ。焚口は逆U字形を呈すると考えられる。体部外面はハケ調整で仕上げるが、体部内面は粘土積み上げ痕と指頭圧痕が明瞭に残る。第26図17は基部で、端部は肥厚しない。体部内外面はハケ調整、基底部はナデ調整で仕上げている。

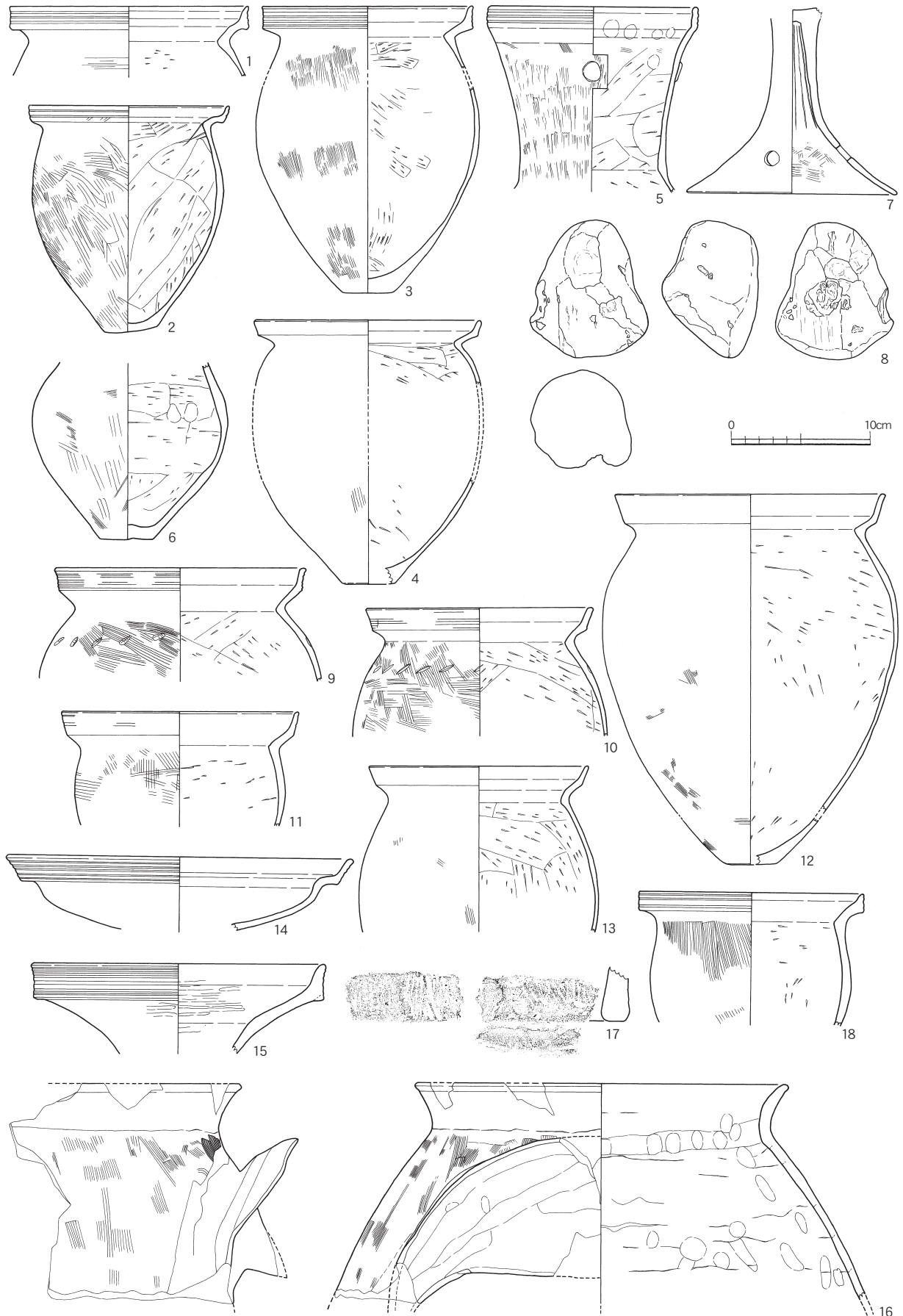
SD11 (第5・25・26図)

立会2区、W20・21グリッドで検出したもので、北東から南西方向に流れていたと推測される。幅0.24~0.41m、深さ0.15mをはかり、断面形はU字状を呈する。弥生土器が少量出土しており、甕1点(第26図18)を図示する。口縁部断面が三角形を呈するもので、外面に擬凹線を施す。時期は弥生時代後期前半と考えられる。



第25図 SD 土層断面図 (縮尺1/40)

第1節 遺構および遺構内出土遺物



第26図 SD出土遺物実測図(縮尺1/4)

1 : SD01, 2~8 : SD03, 9~15 : SD05, 16・17 : SD10, 18 : SD11

第2節 遺構外出土遺物

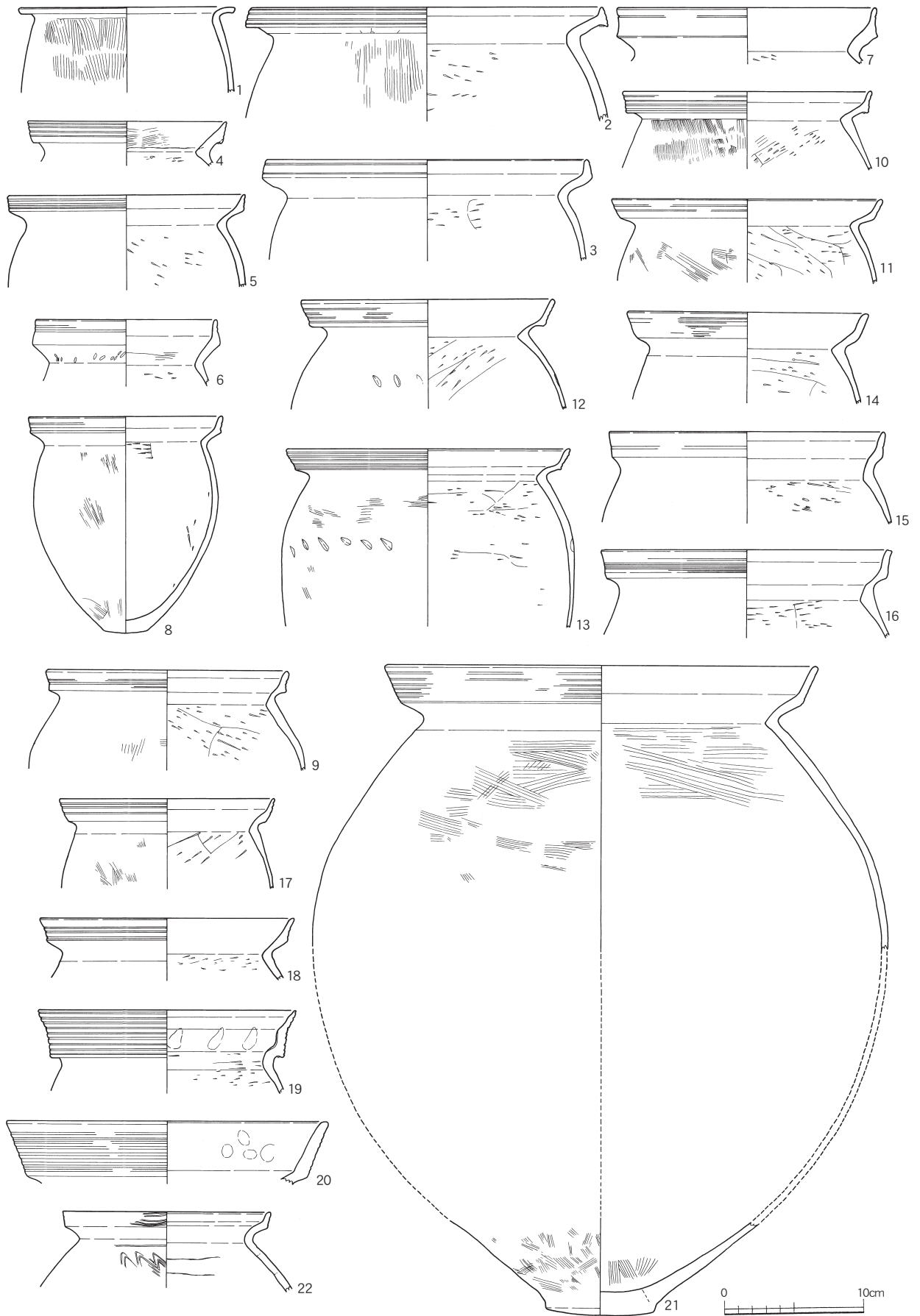
包含層から出土したものが主であるが、排水溝や攪乱から出土したのも掲載している。弥生土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、白磁、土錘、石器・石製品、柱根、銭貨を図示する。

弥生土器には、中期と後期前半に比定できるものも少量ある。中期の土器と考えられるのは、甕1点（第27図1）である。口頸部を外に折り曲げ、口縁端部は狭小な面をつくる。また、後期前半と考えられるものには、甕（第27図2・3、第28図23）、高坏（第29図59）がある。甕は内傾する口縁部を有する。高坏は坏底部と口縁部の接合部に稜をもち、口縁端部はわずかに肥厚する。

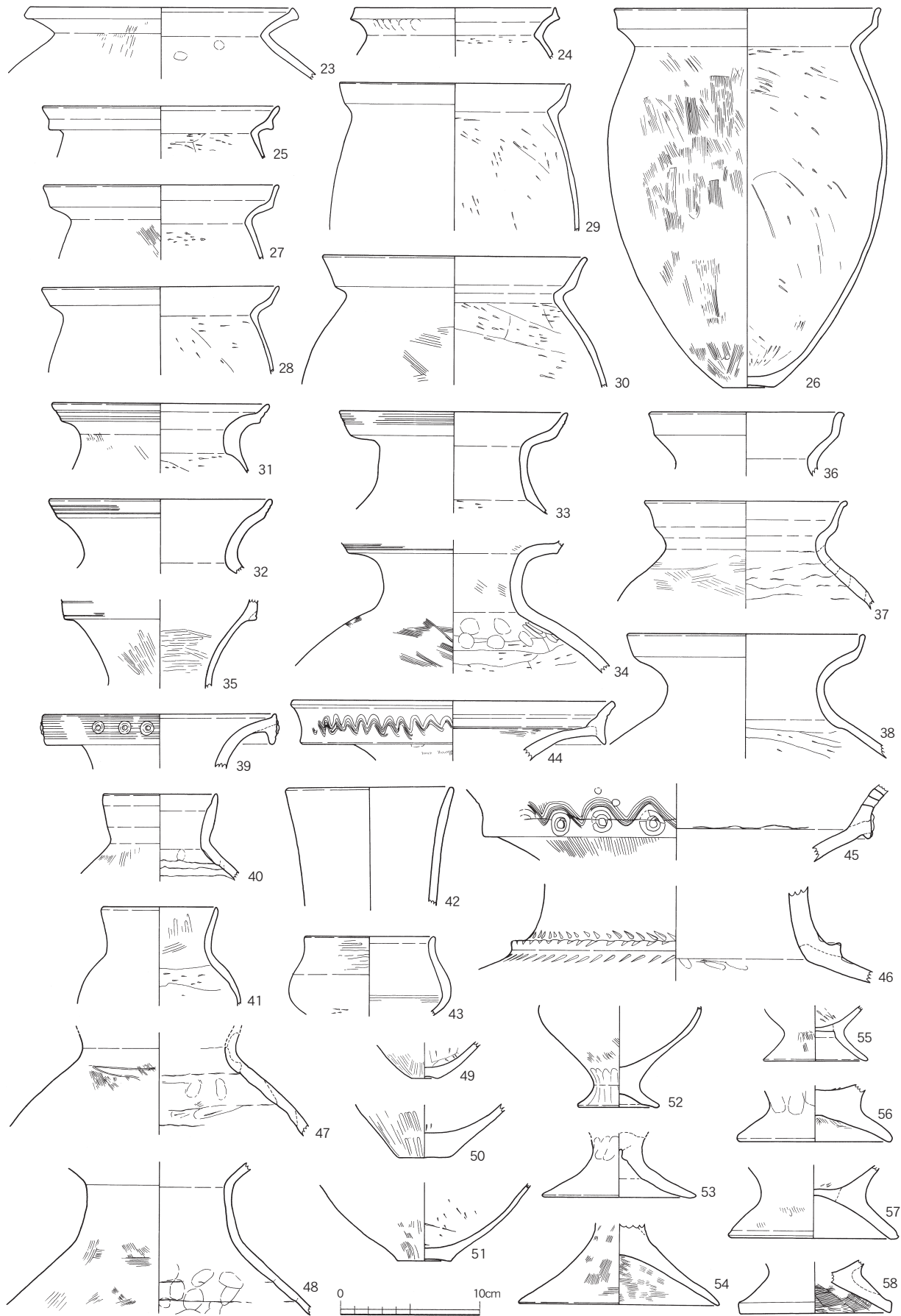
そのほかの弥生土器は後期後半を中心とし、後期末から古墳時代初頭に下るものも含む。甕・壺・高坏・器台・鉢・蓋がみられる。甕は有段口縁を呈するものが大半であるが、近江の受口状口縁の影響が認められるもの（第27図22）もある。有段口縁の甕は口縁部が直立または外傾し、口縁端部を丸く仕上げるものが多い。第27図18・19は口縁部が外反し、口縁端部は先細りとなっており、第27図19・20と第28図30は口縁部が伸張している。これらは北陸南西部に分布の中心をもつ月影式の特徴に通じており、後期末から古墳時代初頭にかけての時期のものと考えられる。壺は、有段口縁の長頸壺（第28図32～35・38）、有段口縁の壺（第28図31・36・37）、広口壺（第28図39）、短頸壺（第28図40・41）、無頸壺（第28図43）、長頸壺（第28図42）、二重口縁壺（第28図44～46）にわけられる。有段口縁の長頸壺は口縁部外面に擬凹線を施すものが多く、有段口縁の壺は口縁部外面をナデ調整で仕上げる。広口壺は、口縁部に粘土を貼り付けて下端を垂下させることで面を形成し、この面に擬凹線を施したのち円形浮文を巡らす。二重口縁壺は、口縁部外面に波状文のみを施すもの（第28図44）と、波状文の下に円形浮文を貼付するもの（第28図45）がある。補修孔がみられる第28図45は、接合しないが、第28図46と同一個体である可能性が高い。第28図46は頸部にある突帯の上端に刺突を施し、さらに突帯を挟んで羽状になるよう刺突を巡らしている。当遺跡では、この2点のみ、生駒西麓産とみられる胎土をもつ。高坏は坏部が有段口縁の鉢形を呈し、口縁部外面に擬凹線を施すものが多い（第29図60～70）。小型高坏（第29図71）は1点のみで、内湾気味に立ち上がる坏底部から屈曲し、外反してのびる口縁部に続く器形を呈する。器台はすべて口縁部外面に擬凹線を施す。有段口縁を呈するもの（第29図76～80）のうち、口縁部が伸張した第29図80は後期末以降のものと考えられる。第29図75は、口縁部が粘土貼付により面を形成するもので、この面に擬凹線を施した上から円形浮文を貼り付けて加飾する。垂下させた下端には刺突を施している。壺の可能性もある。鉢は、口縁部が内湾する器形で平底のもの（第30図88・89）、砲弾形で尖った底部に孔を有するもの（第30図91・92）、椀状の器形を呈するもの（第29図90）、有段口縁を呈するもの（第30図93）がある。脚台（第30図94）は有段を呈し、底面に穿孔が認められる。蓋はハの字状にひらく器形を呈するものが主体である。鈕頂部が明瞭に凹むものが多いと、鈕端部を丸くおさめるもの（第30図95・96・98・100）と、鈕端部の上面に面を形成するもの（第30図97）、鈕端部の外側面に面を形成するもの（第30図99）がみられる。第30図98は鈕の中央に通气孔が貫通している。ほかに鈕頂部がわずかに凹むもの（第30図101）、鈕頂部が凹まないもの（第30図102）もみられる。

古墳時代中期から後期にかけての土師器と考えられるものには、甕、壺、高坏、椀などがみられる。甕は、口縁端部が内方にわずかに肥厚する布留系のもの（第31図103）と、くの字状を呈するもの（第31図104～111）がある。壺は、くの字状口縁を呈し、口縁端部を丸くおさめるもの（第31図112・114）と口縁端部に中央がわずかに凹む面を形成するもの（第31図113）がある。高坏は、坏部が坏底部と口縁部の接合部に明瞭な稜をもち、そこから口縁部が直線的にひらく器形を呈する（第31図115・116）。

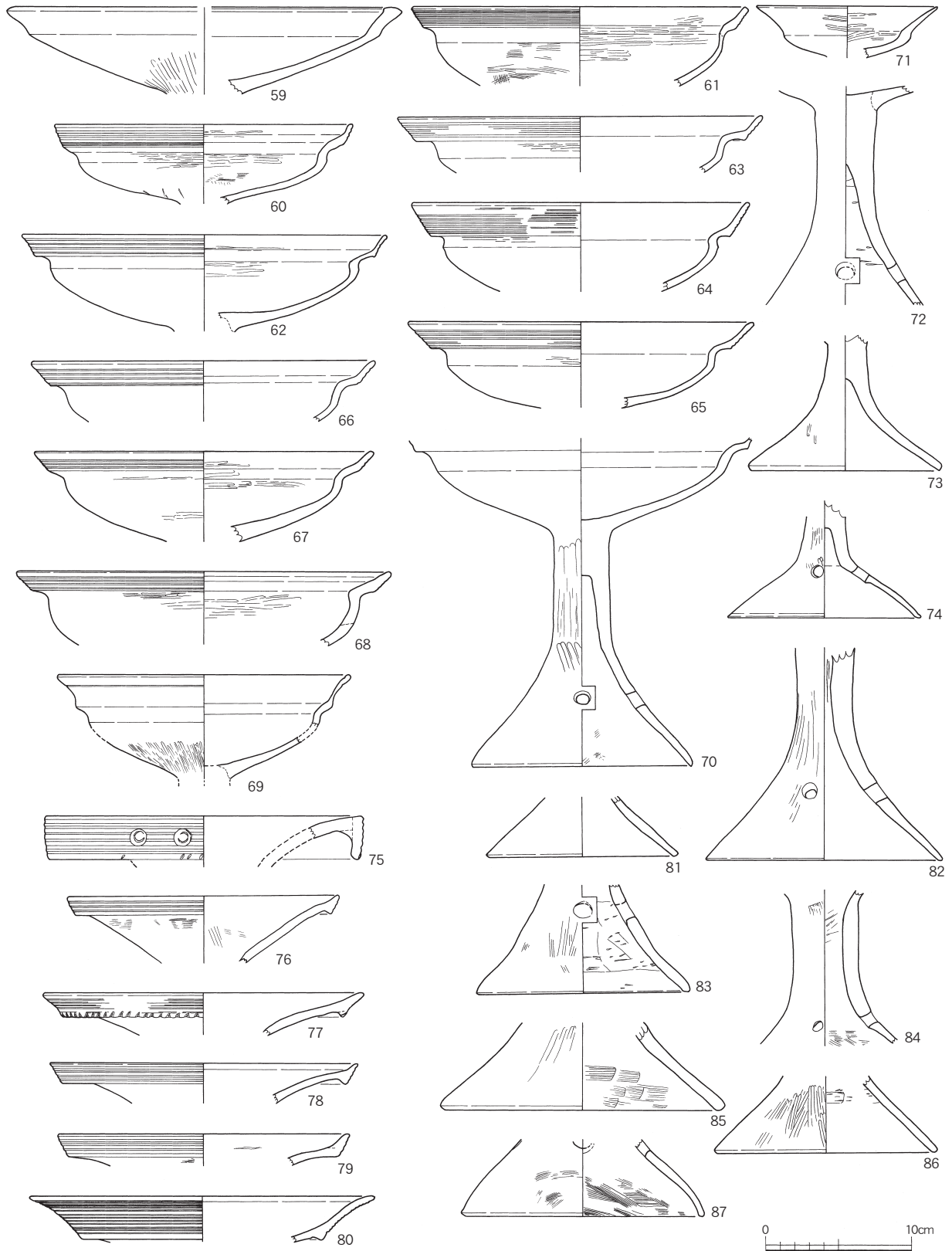
第2節 遺構外出土遺物



第27図 遺構外出土遺物実測図1 (縮尺1/4)

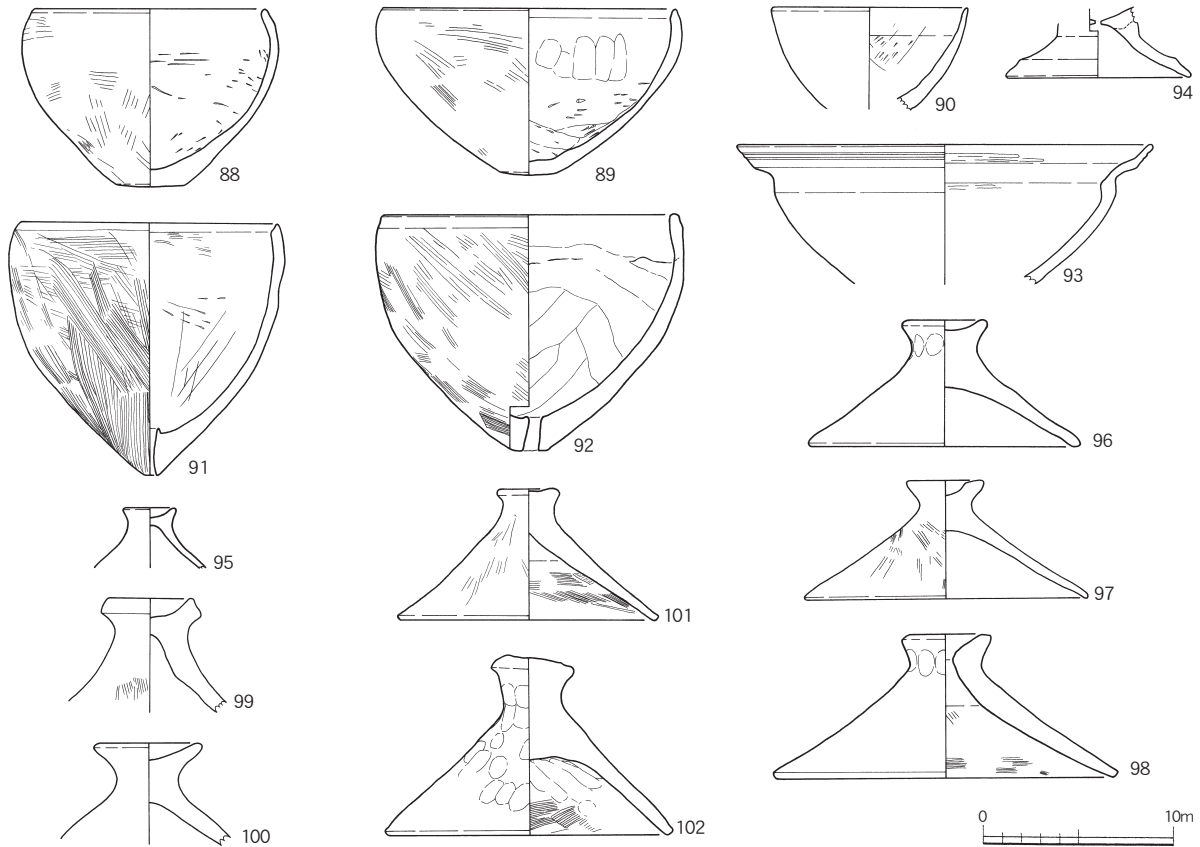


第28図 遺構外出土遺物実測図2 (縮尺1/4)



第29図 遺構外出土遺物実測図3 (縮尺1/4)

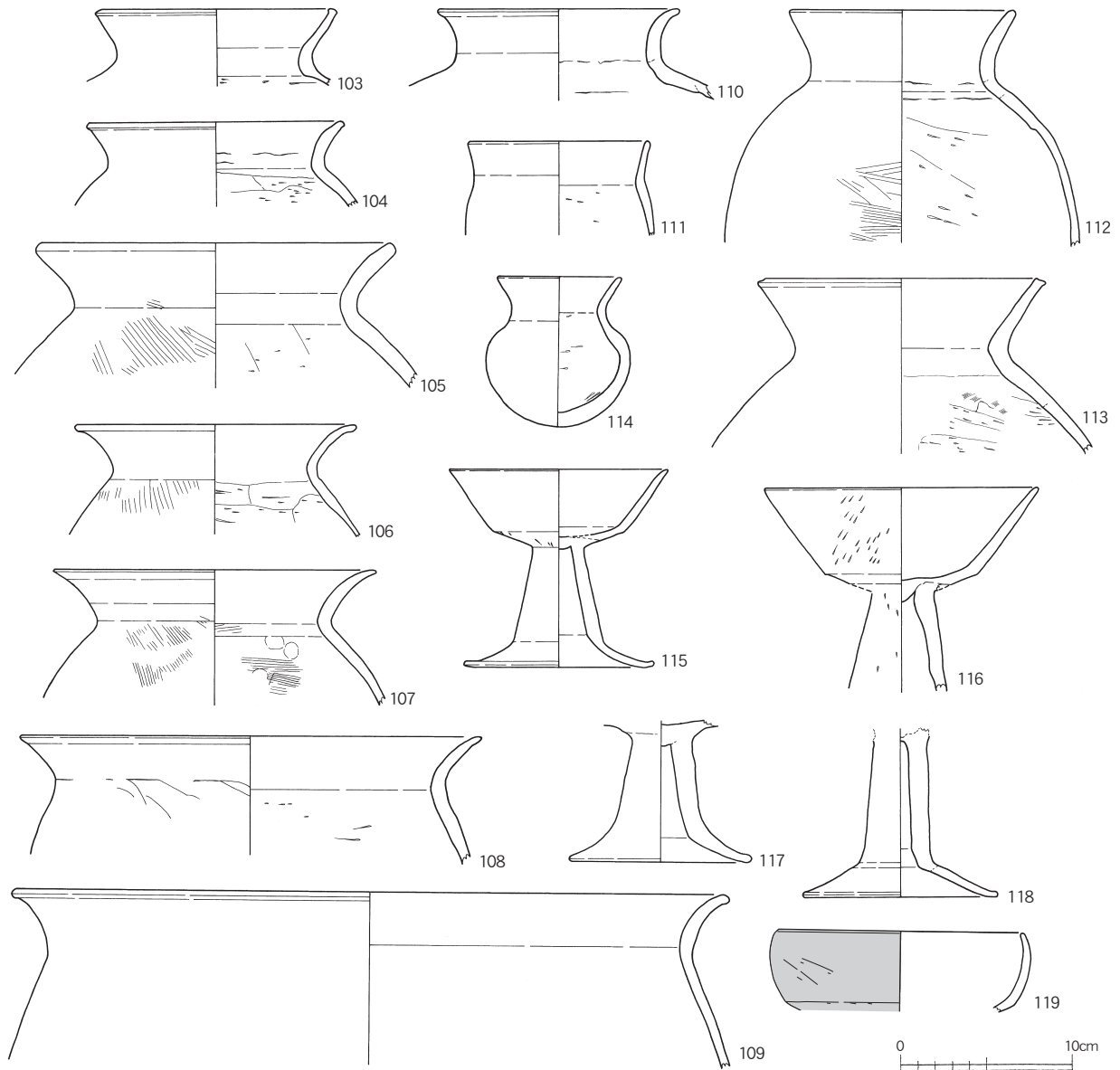
脚部(第31図115・117~118)は、柱部と裾部との接合部付近で強く屈曲して外反しながらハの字状にひらく。椀(第31図119)は、図化したなかで、唯一赤彩が認められる資料で、内湾しながら立ち上がる口縁部をもつ。



第30図 遺構外出土遺物実測図4 (縮尺1/4)

古墳時代後期の土師器には甕(第32図120)と羽釜(第32図121)があり、竈形土製品(第32図122～131)も同時期の所産である可能性が高いと考えられる。甕は、口縁内面に回転ナデによる稜線が明瞭にみられるくの字状口縁、いわゆる段々口縁を呈する。羽釜は鏝部片で、貼り付けていた体部からはがれたものとみられる。長く突出する器形で、端部は狭小な面をもつ。竈形土製品はすべて破片であり、部位は焚口と庇、基部が確認できる。焚口がみられるのは第32図122・124の2点であり、端部は内傾する面をもつ。庇が確認できるものも2点ある。いずれも付け庇で、庇の断面は三角形に近いもの(第32図123)と、台形に近いもの(第32図124)がある。基部は、端部が内外面に肥厚するもの(第32図126・127)と、外面に肥厚するもの(第32図128・129・131)、内面に肥厚するもの(第32図125)、基部と体部の厚みが変わらないもの(第32図130)がある。基部の底面は、ナデ調整で仕上げるもの(第32図125・126)と、製作時の圧痕が残るもの(第32図127～131)がある。基部から体部にかけては、輪積み痕が明瞭に残るものが多い。

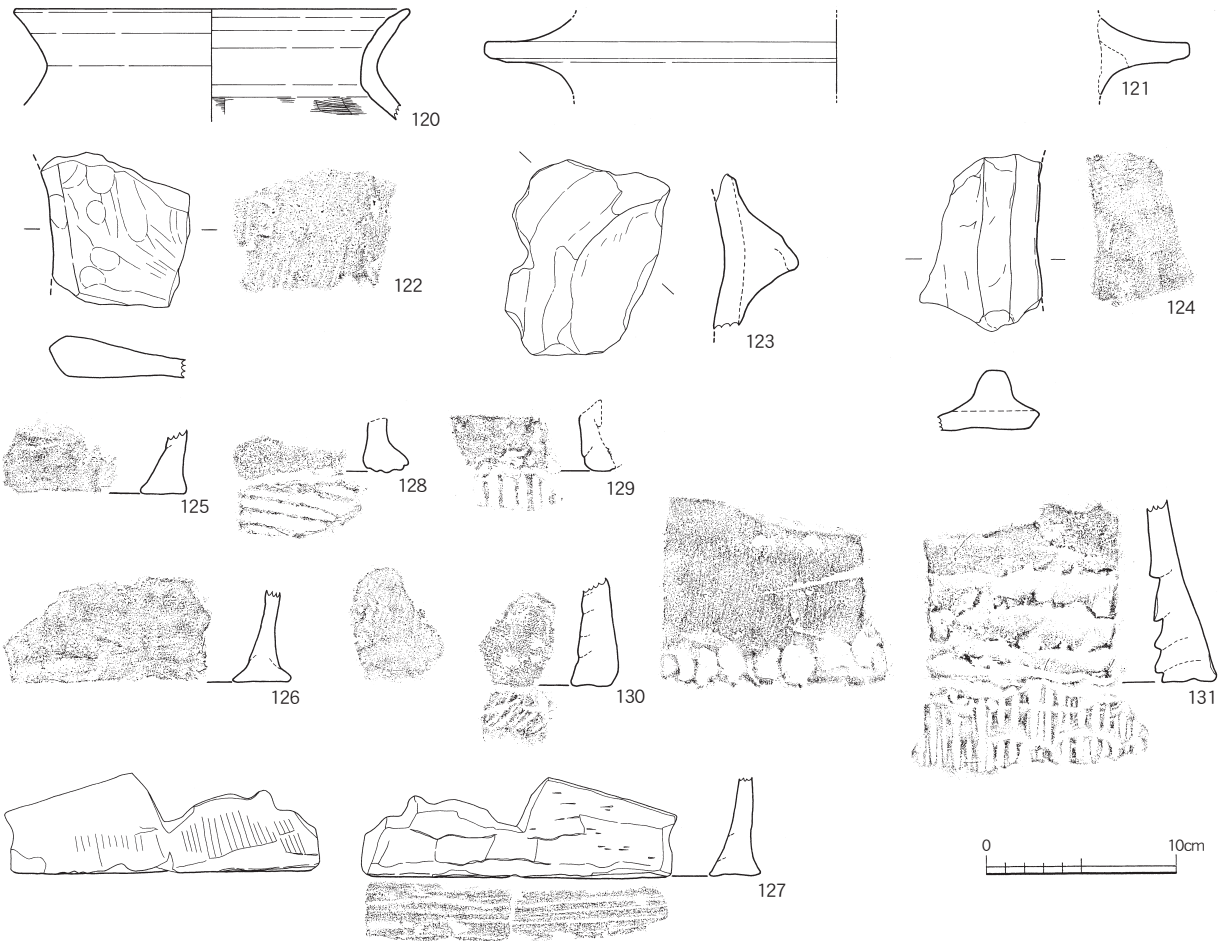
古墳時代後期から終末期にかけての須恵器には、坏蓋・坏身・有蓋高坏・無蓋高坏・甕・平瓶・横瓶・脚台がある。TK43型式からTK209型式に相当するものが中心である。坏蓋(第33図132～141)は、天井部と口縁部との境界が明瞭でないものが大半であるが、第33図132には弱い稜が認められる。口縁端部は、中央がやや凹む面を形成するもの(第33図132～134)と丸くおさめるもの(第33図135～141)がある。天井部は回転ヘラ切り後回転ヘラケズリ調整を施すものが多い。坏身(第33図142～146)は、口縁部の立ち上がりが低く、口縁端部を丸くおさめるもの大半である。底部は回転ヘラ切り後回転ヘラケズリ調整を施している。第33図142は立ち上がりがやや長く、口縁端部は内傾する面をもっており、図示したなかでは最も古い様相を示している。有蓋高坏(第33図147)は口縁部の立ち上がりが低く、浅



第31図 遺構外出土遺物実測図5 (縮尺1/4)

身である。無蓋高坏（第33図148）は口縁部と坏底部の境界に2段の稜を有し、底部口縁部が外反して立ち上がる器形を呈する。甕は様々な形態の口縁部があり、外傾する口縁端部がやや肥厚するもの（第33図149）、外傾する口縁端部の下端を垂下させるもの（第33図150）、口縁部をつまみあげて狭小な面をつくるもの（第33図151）、口縁部端部を外下方に嘴状に引きのばすもの（第33図152）、口縁部付近を上下に引き出して明瞭な稜をもつ凹面を形成するもの（第33図153）がみられる。第33図153は口頸部を沈線で区画し、そのなかを波状文で加飾する。脚台（第33図154）はハの字状にひろく器形を呈する。平瓶（第33図155）は丸みを帯びる器形で、体部外面にカキ目を施す。横瓶（第33図156）は俵形の体部に、ほぼ直立して立ち上がり、中位で外反する口縁部が付くものである。口縁端部はわずかに肥厚する。

平安時代に比定される須恵器は少ない。蓋（第34図157）は扁平な器形を呈し、下方に短く折り返して口縁部を形成する。宝珠形つまみの接合痕がみられ、9世紀代の所産と考えられる。甕（第34図158）は、ハの字状に大きくひろく頸部をもつ。口縁部は、下端を垂下させて、狭小な面を形成する。鉢（第34図159）はわずかに外傾してひろく器形で、口縁端部は丸くおさめる。



第32図 遺構外出土遺物実測図6 (縮尺1/4)

平安時代の土師器には碗と皿がある。碗(第35図160~163)と皿(第35図164)は10世紀代に比定され、底部外面に回転糸切り痕がみられる。碗は口縁端部付近で外反する器形を呈し、皿は直線的にひらく器形を呈する。第35図165は、ての字状口縁を呈する手づくね成形の皿で、11世紀代に比定される。

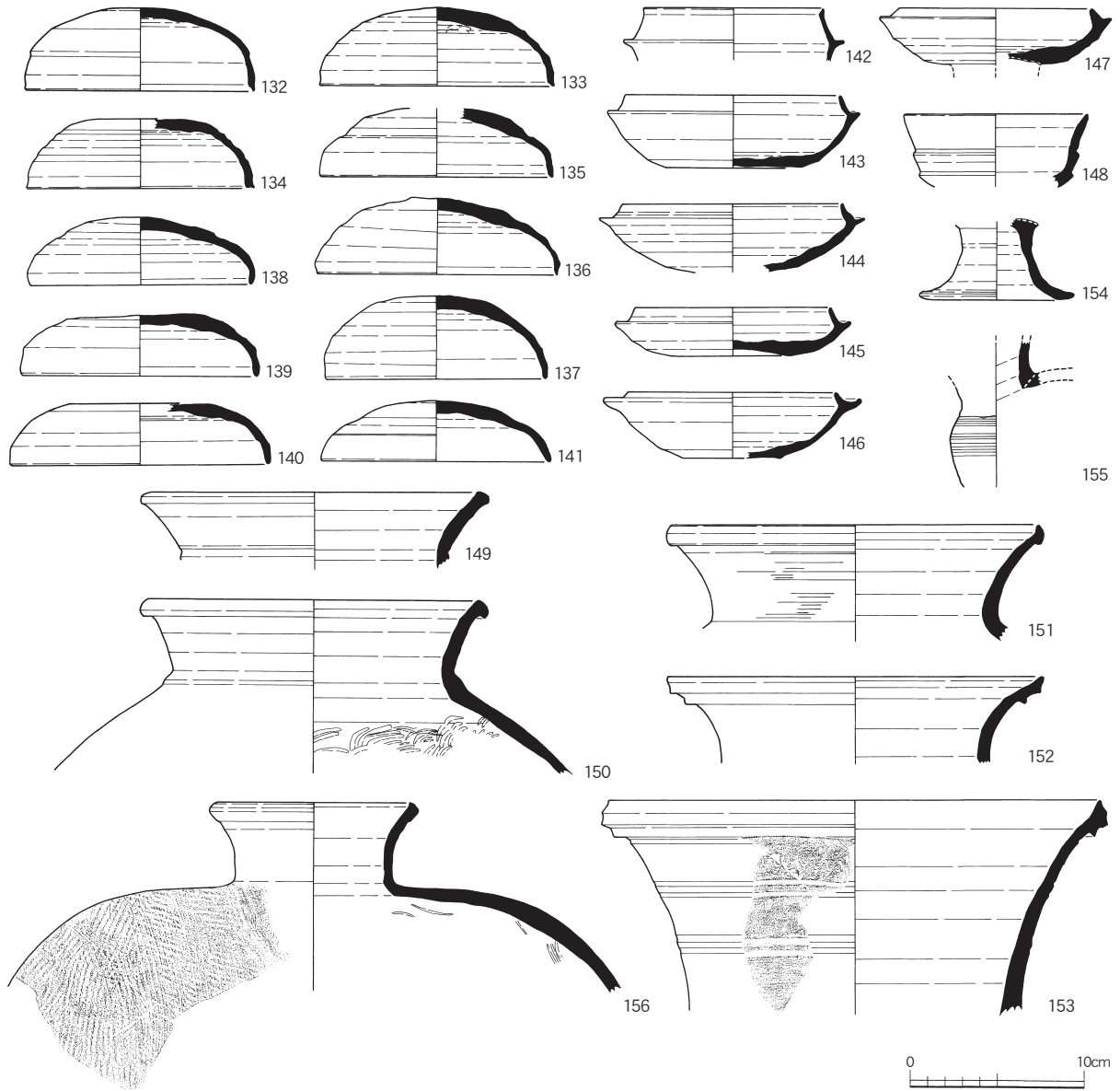
灰釉陶器は碗と皿があり、10世紀代に比定される。碗は大半が貼り付け高台で、三角高台(第35図169)、稜が不鮮明な三日月高台(第35図167・168)、長細くハの字状に開く高台(第35図170)にわけられる。第35図169は高台内に墨が付着している。削り出し高台の碗(第35図171)は深碗とみられ、体部外面に回転ヘラケズリ調整を施す。皿(第35図172・173)は断面が方形を呈する貼り付け高台をもつ。

輸入磁器は白磁の碗と皿があり、11世紀後半から12世紀後半の時期のものと考えられる⁽¹⁾。第35図174・175は白磁碗Ⅱ-1類に分類され、口縁端部は小さな玉縁状を呈する。底部は高台外面を直に、内面を斜めに削り出すもので、白磁碗Ⅱ-1類(第35図176)と白磁碗Ⅴ-1類(第35図177)に分類される。第35図178は白磁皿Ⅷ-1類と考えられ、内面には半月状の陰刻がみられる。

土錘は、全形がわかる資料は1点のみである。第35図166は土師質の管状土錘で、舞鶴若狭自動車道関係の調査区で通例であった幅2cm前後のものである。

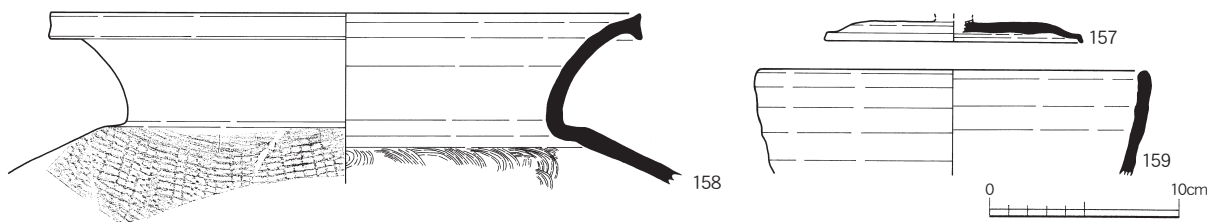
銭貨は1点(第35図179)のみ確認している。開元通寶とみられ、背面に益とあることから益州で鑄造されたものと考えられる。舞鶴若狭自動車道関係の調査区で出土したものも含め、初鑄年が最も古い。

柱根3本(第36図180~182)については柱穴を確認できなかった。第36図180・181は断面が円形を呈する芯持ち材で、基底部は平坦に整えている。第36図182は、状態が悪いものの芯去り材とみられる。

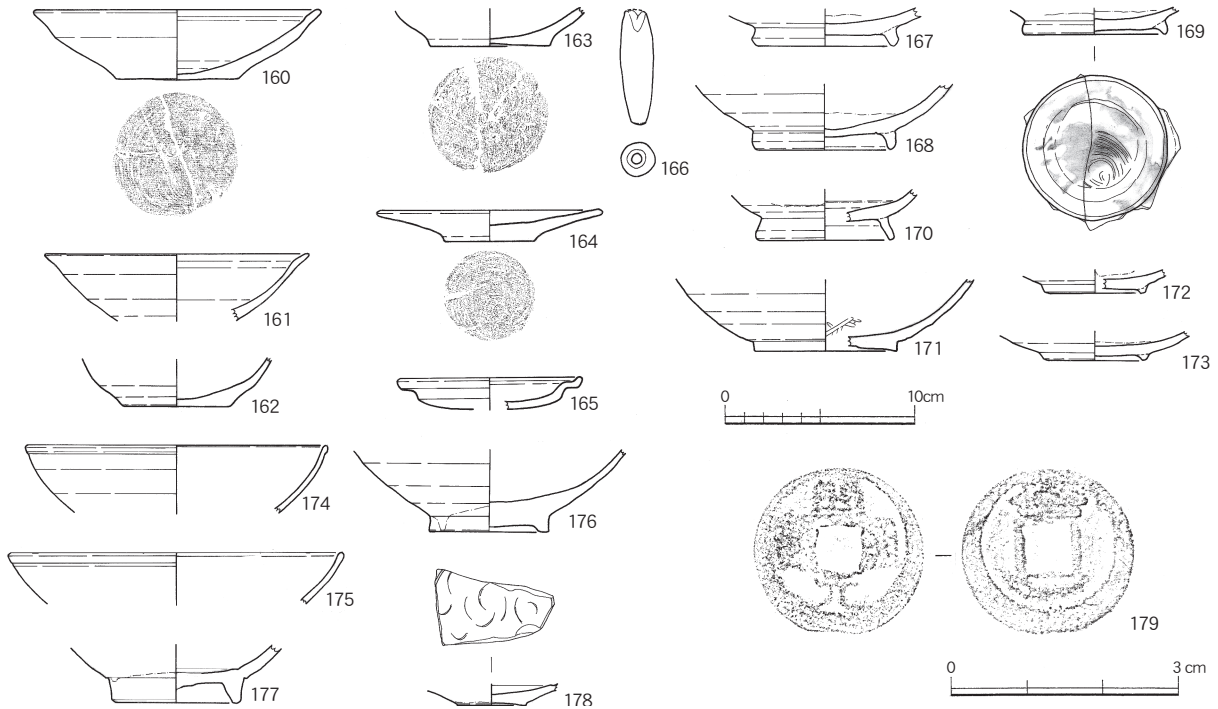


第33図 遺構外出土遺物実測図7 (縮尺1/4)

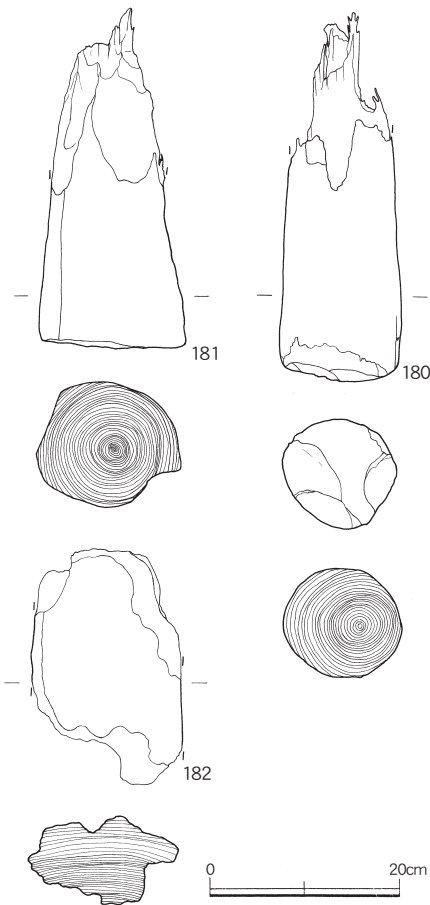
石器・石製品には、板状石製品、ヘラ状石器、磨石類、石冠、不明石製品、蛤刃磨製石斧、切子玉、砥石などがある。板状石製品は3点ある。第37図183は卵形を呈し、意図的なものか不明だが、先端部に打ち欠いた剥離がある。全体に研磨した痕跡は無く、周囲は若干擦った痕跡がみられるに止まる。第37図184は一見扁平片刃石斧を思わせる隅丸方形を呈し、全体に研磨されている。特に側面は直線的に整形・研磨され、0.5~0.6cmの面を成している。上下の辺も一部直線的となり狭い面を形成する。第37図185はやや粗い砂岩を素材とし、周辺は丁寧に研磨整形されている。表裏面には擦られた痕跡がみら



第34図 遺構外出土遺物実測図8 (縮尺1/4)

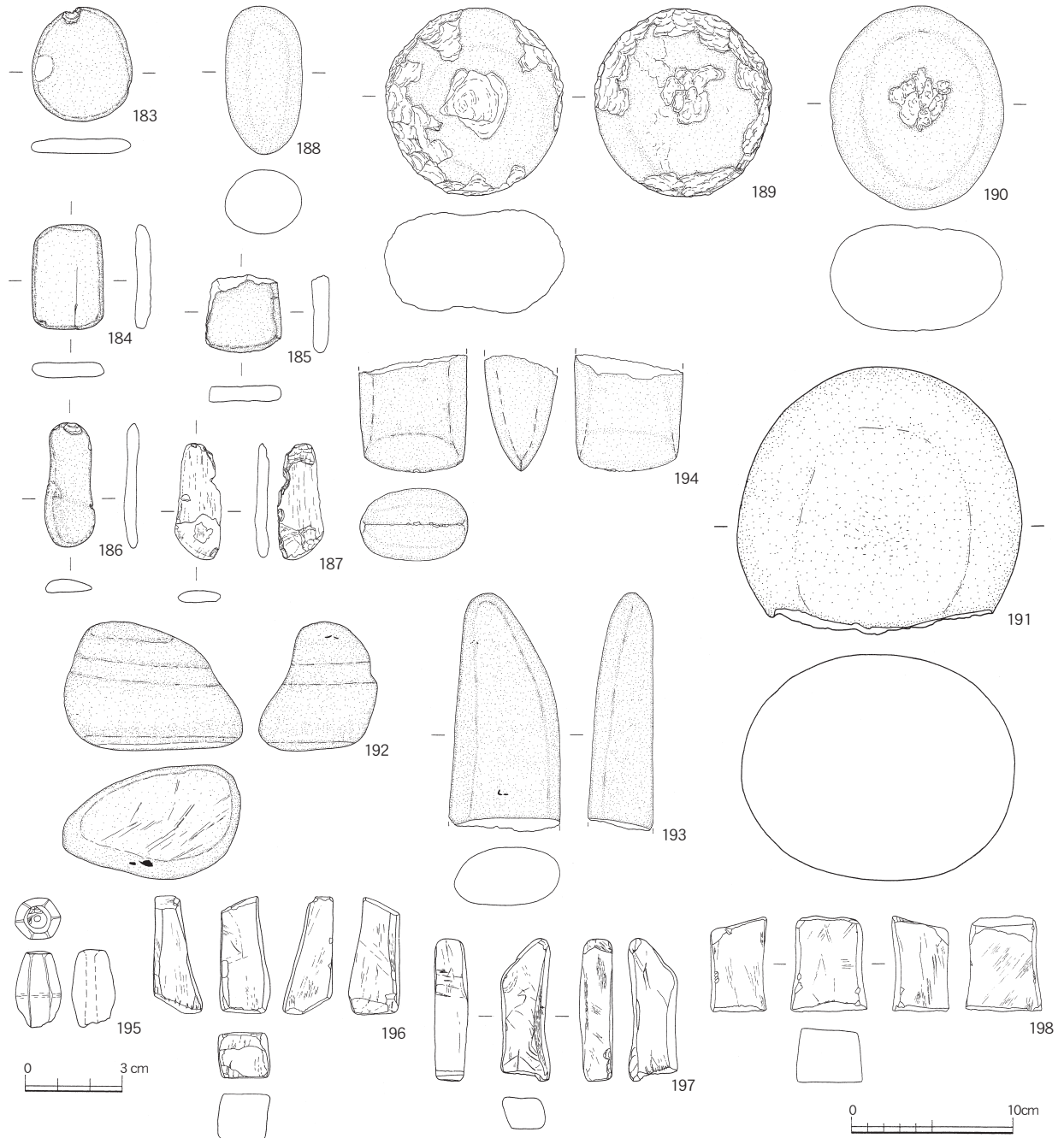


第35図 遺構外出土遺物実測図9 (160~178:縮尺1/4, 179:縮尺1/1)



第36図 遺構外出土遺物実測図10 (縮尺1/8)

れ、内側が僅かに窪んでいることから、砥石として使用された可能性が高い。ヘラ状石器(第37図186・187)は、全体が研磨によって最終整形される。第37図186の側辺は僅かに抉入する。明確な刃部の作出は行われていないが、第37図187の下部1/3には、磨滅痕が明瞭に認められる。磨石類は4点を図示する。第37図188は小型の棒状磨石で、両端部も含めた全面に磨滅が広がり、断面は三角形状となる。底辺部に当たる面の一部には、特に強い磨滅が認められる。第37図189は両面の中央付近が明瞭に窪み、敲打によるものと考えられる激しい剥落が周囲にみられる。第37図190は表裏に平滑な磨滅が認められ、一面の中央部に敲打による窪みが残る。反対面の中央部も敲打痕のような起伏が僅かにみられる。第37図191は大型の円礫で、表裏面には平滑な磨滅が認められる。下部は割れて欠損するが、比較的きれいな平坦面を形成しており、意図的に割られた可能性もある。石冠(第37図192)は、底面が擦られて平滑になり、主として長軸方向に多くの擦痕が残る。中間部の抉入は片面に偏重するため、上部は抉入の少ない方へずれる。部分的に朱色の顔料が付着しており、元来は全体が赤色塗彩されていた可能性が高い。第37図193は、下半部が欠損するが元来はバナナ形をしていた可能性がある石製品で、明瞭ではないが研磨により整形されたと考えられる。表面にはわずかではあるが赤色顔料が付着していることから、祭祀に使用された象徴的な石製品と考えられる。蛤刃磨製石斧の刃部(第37図194)は、刃先に



第37図 遺構外出土遺物実測図11 (183~194・196~198：縮尺1/4, 195：縮尺1/2)

微細な刃こぼれがみられる。側面は研磨がやや弱く、敲打痕跡が僅かに残る。切子玉（第37図195）は水晶製で、片端部1/3は欠損する。表面は磨滅して光沢は失われている。穿孔は主として片面から行われ、反対側から上端0.5cm、深さ0.2cmの揺り鉢状の穴をあけて貫通させている。砥石3点は凝灰岩製の小型品である。第37図196は全面に使用痕がみられ使いこまれているため大きく変形している。上面の小口は斜行していることから、折損後に再利用したものであろう。第37図197は、下面の小口以外は全面が使用され、使用による変形もかなり進んでいる。側辺の1本は稜が消えた状態で、丸みを帯びる。金属によると考えられる細かい傷が多くみられる。第37図198は、片小口側は欠損し、側面の4面が使用されている。使用面の擦痕は顕著にみられるが、使用による変形はあまり進んでいない。

註

1 横田賢次郎・森田勉 1978 「大宰府出土の輸入中国陶磁器について—型式分類と編年を中心として—」『九州歴史資料館研究論集』4 九州歴史資料館

挿図番号	グリッド	出土地	器種・器形	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存率/12		調整・施文・施釉			色 調		胎 土	焼成	備 考
							口縁部	底部	外 面	内 面	底 部	内 面	外 面			
33図140	W22	包含層	須恵器・蓋	(14.7)		(3.5)	1.7		回転ナデ・回転ヘラケズリ	回転ナデ		25YR6/1 黄灰色	5YR6/1 灰色	1~2mm程度の黒・白色粒子少量含む	良	
33図141	X26	包含層	須恵器・蓋	13.0		3.5	5.3		回転ナデ・回転ヘラケズリ 回転ヘラケズリ	回転ナデ		25Y7/1 灰白色	25Y7/1 灰黄色	1~3mm程度の白・黒色粒子中量含む	やや軟	
33図142	X23	包含層	須恵器・坏Hか	(10.2)			1.8		回転ナデ	回転ナデ		N6/ 灰色	N6/ 灰色	微細な砂粒少量含む	良	
33図143	Y28	包含層	須恵器・坏H	12.3	7.7	4.2	1.3	3.5	回転ナデ・ケズリ	回転ナデ	回転ヘラ切りのち 回転ヘラケズリ	5PB6/1 青灰色	2.5Y6/1 黄灰色	微細な砂粒少量含む	良	
33図144	X23	包含層	須恵器・坏H	12.6	7.5	(3.95)	1.5	3.5	回転ナデ・ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	回転ヘラ切りのち 回転ヘラケズリ	N6/ 灰色	N6/ 灰色	1mm以下の砂粒少量含む	良	
33図145	X27	包含層	須恵器・坏H	(11.2)	6.4	2.85	0.9	6.0	回転ナデ	回転ナデ	回転ヘラ切り	N7/ 灰白色	N6/ 灰色	1mm以下の砂粒少量含む	良	
33図146	W27	包含層	須恵器・坏H	11.8	4.8	3.8	2.5	3	回転ナデ・ 回転ヘラケズリ	回転ナデ・同心 ナデのちナデ	回転ヘラ切りのち 回転ヘラケズリ	5P5/1 紫灰色	N6/ 灰色	1mm以下の砂粒少量含む	良	
33図147	X28	包含層	須恵器・有蓋高坏	(11.0)			2.0		回転ナデ・ 回転ヘラケズリ	回転ナデ		10YR7/1 灰白色	10YR7/1 灰色	1mm程度の白・黒色粒子少量含む	良	
33図148	Y28	包含層	須恵器・高坏	(10.5)			1.0		回転ナデ・沈線	回転ナデ		N6/ 灰色	N7/ 灰白色	1mm以下の砂粒少量・2mm程度の小石含む	良	
33図149	Y27	包含層	須恵器・甕	(18.6)			2.2		回転ナデ・沈線	回転ナデ		5Y6/1 灰色	N6/ 灰色	1mm以下の砂粒中量含む	良	
33図150	Y26	包含層	須恵器・甕	(18.9)			7.6		回転ナデ	回転ナデ・同心 円文当て具痕		N5/ 灰色	5Y5/1 灰色	1~3mm程度の白・黒色粒子中量含む	良	外面自然釉
33図151	W27	包含層	須恵器・甕	(21.0)			1.9		回転ナデ・カキ目	回転ナデ		5Y6/1 灰色	5Y7/1 灰白色	1~4mmの砂粒中量含む	やや軟	
33図152	W23・27	包含層	須恵器・甕	21.5			1.8		回転ナデ	回転ナデ		10YR7/1 灰白色	10YR5/1 褐灰色	微細な砂粒少量含む	良	
33図153	W24	包含層	須恵器・甕	(28.1)			1.8		回転ナデ・沈線・ 波状文	回転ナデ		5Y6/1 灰色	5Y4/1 灰色	1~5mm程度の白・黒色粒子少量含む	良	
33図154	—	包含層	須恵器・脚台	(8.9)			0.5		回転ナデ	回転ナデ		N5/ 灰色	N5/ 灰色	1mm以下の砂粒少量含む	良	
33図155	X27・Y23	包含層	須恵器・平瓶						回転ナデ・カキ目	回転ナデ		N5/ 灰色	7.5Y5/1 灰色	1mm以下の白・黒色粒子少量含む	良	
33図156	W22・23	包含層	須恵器・横瓶	(11.0)			1.5		回転ナデ・タタキの ちカキ目・タタキ	回転ナデ・同心 円文当て具痕		2.5Y7/1 灰白色	5Y6/1 灰色	1~3mm程度の白・黒色粒子含む	良	
34図157	W23・X24	包含層	須恵器・蓋	13.5			1.9		回転ナデ・回転ヘラ切り・ 錐貼付のちナデ	回転ナデ		N7/ 灰白色	N6/ 灰色	1mm以下の砂粒少量含む	良	
34図158	X24	包含層	須恵器・甕	(31.1)			1.5		回転ナデ・同心 円文当て具痕	回転ナデ・同心 円文当て具痕		N6/ 灰色	N5/ 灰色	1mm以下の白・黒色粒子少量含む	良	
34図159	X23	包含層	須恵器・鉢	(20.3)			1.0		回転ナデ	回転ナデ		N4/ 灰色	5Y5/1 灰色	1~2mmの白・黒色粒子少量含む	良	
35図160	Y27	包含層	土師器・碗	(15.2)	6.3	3.7	2.8	12.0	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り	10YR7/3 にぶい黄褐色	10YR7/3 にぶい黄褐色	微細~1mm程度の白・赤・ 黒色粒子少量含む	良	
35図161	W23	包含層	土師器・碗	13.8			2.1		回転ナデ	回転ナデ		7.5YR8/4 浅黄褐色	10YR8/4 浅黄褐色	微細~1mm程度の白・黒色 粒子少量含む	良	
35図162	W25	包含層	土師器・碗		5.7			12	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り	2.5Y8/3 淡黄色	2.5Y8/3 淡黄色	1~2mmの赤・白・黒色粒子 少量含む	良	
35図163	Y25	包含層	土師器・碗	(6.4)				12.0	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り	10YR8/2 灰白色	10YR8/3 浅黄褐色	1~2mmの白・黒色粒子少量 含む	良	
35図164	X25	包含層	土師器・皿	(12.0)	4.8	1.7	1	12	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り	10YR8/2 灰白色	10YR7/2 にぶい黄褐色	1~2mmの長石・石英・チ ャート等少量含む	良	
35図165	W27	包含層	土師器・皿	(9.7)	5.2	1.7	4.0	12.0	ナデ	ナデ	ナデ	10YR8/3 浅黄褐色	10YR7/2 にぶい黄褐色	微細~1mmの白・赤・黒色 粒子少量含む	良	
35図167	W26	包含層	灰釉陶器・碗		7.8			3.0	回転ナデ	回転ナデ・灰釉	回転糸切り・高 台貼付のちナデ	2.5Y8/1 灰白色	2.5Y8/1 灰白色	微細な砂粒少量含む	良	内面使用痕
35図168	X24	包含層	灰釉陶器・碗		7.6			3.1	回転ナデ	回転ナデ・灰釉	回転糸切り・高 台貼付のちナデ	N8/ 灰白色	N8/ 灰白色	1mm以下の砂粒微量・4mm 程度の小石含む	良	
35図169	W25	包含層	灰釉陶器・碗		7.7			12	回転ナデ・灰釉	回転ナデ・灰釉	回転糸切り・高 台貼付のちナデ	N8/ 灰白色	N8/ 灰白色	1mm程度の砂粒少量含む	良	内面使用痕・ 底部外面磨損
35図170	Y28	包含層	灰釉陶器・碗	(7.4)			1.4		回転ナデ・灰釉	回転ナデ・灰釉	回転糸切り・高 台貼付のちナデ	7.5Y8/1 灰白色	7.5Y8/1 灰白色	微細な砂粒少量含む	良	内面使用痕
35図171	W25・26・ 27	包含層	灰釉陶器・碗		7.5			2.8	回転ナデ・ 回転ヘラケズリ	回転ナデ・ 高台貼付のち ナデ	高台貼付のち ナデ	5Y7/1 灰白色	5Y7/1 灰白色	微細な砂粒微量含む	良	平高台(蛇の 目高台か)
35図172	X25	包含層	灰釉陶器・皿		5.4			4.0	回転ナデ	回転ナデ・灰釉	回転糸切り・高 台貼付のちナデ	N8/ 灰白色	N8/ 灰白色	微細な砂粒少量含む	良	
35図173	Y25	包含層	灰釉陶器・皿		5.6			6.0	回転ナデ	回転ナデ・灰釉	回転糸切りのち ナデ・高台貼付 のちナデ	N8/ 灰白色	N8/ 灰白色	微細な砂粒少量含む	良	
35図174	X28	包含層	白磁・碗	15.8			1.5		回転ナデ・施釉	回転ナデ・施釉		5Y7/2 灰白色	5Y7/2 灰白色	微細な黒色粒子微量含む	良	二次焼成か (表面変質)
35図175	W26	包含層	白磁・碗	17.5			1.5		回転ナデ・施釉	回転ナデ・施釉		5Y7/2 灰白色	5Y7/2 灰白色	微細な黒色粒子微量含む	良	
35図176	X26	包含層	白磁・碗		6.3			12.0	回転ナデ・施釉	回転ナデ・施釉	回転ナデ・ 削り出し高台			微細な黒色粒子微量含む	良	
35図177	X25	包含層	白磁・碗		6.9			5.2	回転ナデ・施釉	回転ナデ・施釉	回転ナデ・ 削り出し高台			微細な黒色粒子中量含む	良	高台露胎
35図178	Y25	包含層	白磁・皿		3.6			8.7	回転ナデ・施釉	回転ナデ・除刻・ 沈線・施釉	回転糸切り			微細な砂粒少量含む	良	

第3表 土錘観察表

挿図番号	グリッド	遺構・層位	種 類	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	調整	色 調	胎 土	焼成	備考
35図166	W29	排水溝	土師質・土錘	6.0	1.8	0.6	14.2	摩滅	2.5YR6/4にぶい橙色	微細な砂粒微量含む	良	端部欠損

第3章 遺構と遺物

第4表 木製品観察表

挿図番号	グリッド	出土地	種類	法量(すべて残存)		備考
				長さ(cm)	幅(cm)	
7図2	W27・W28	SB01 SP26	柱根	60.5	21.8	上部欠損 ヒノキ
9図1	X27	SB02 SP150	柱根	70.5	24.0	上部欠損
9図2	W27	SB02 SP03	柱根	63.0	27.1	上部欠損
9図3	W28	SB02 SP04	柱根	39.5	20.2	上部欠損
9図4	X28	SB02 SP152	柱根	76.0	16.2	上部欠損
9図5	W28	SB02 SP05	柱根	58.4	14.2	上部欠損
13図1	V25・W25	SB04 SP133	柱根	27.8	17.9	上部欠損
13図2	W25	SB04 SP11	柱根	28.5	16.7	上部欠損
13図3	W25	SB04 SP06	柱根	37.0	16.9	上部欠損
13図4	W25・W26	SB04 SP402	柱根	29.6	14.1	上部欠損
15図2	W23	SB05 SP374	柱根	27.2	15.0	上部欠損
17図2	X23	SB06 SP285	柱根	8.6	9.0	状態悪い
17図3	X23	SB06 SP276	柱根	27.5	16.6	上部欠損
17図4	Y23	SB06 SP312	柱根	15.7	11.5	状態悪い
17図5	X22	SB06 SP240	柱根	30.5	10.6	上部欠損
19図2	W22	SB07 SP218	柱根	40.2	11.8	上部欠損
19図3	W22・X22	SB07 SP219	柱根	61.0	10.5	上部欠損
19図4	W22・X22	SB07 SP63	柱根	48.7	9.8	上部欠損
19図5	W22	SB07 SP60	柱根	72.6	14.0	上部欠損
19図6	W22	SB07 SP58	柱根	45.9	11.3	上部欠損
19図7	W23	SB07 SP55	柱根	57.0	11.3	上部欠損
22図1	W26	SP02	柱根	31.8	14.4	上部欠損
22図2	W23	SP70	柱根	38.6	8.5	上部欠損
22図4	W24	SP85	柱根	34.7	13.3	上部欠損
22図5	W23	SP90	柱根	22.8	6.9	状態悪い
22図6	W23	SP96	柱根	36.9	12.9	上部欠損
22図12	X27	SP148	柱根	13.0	5.8	上部欠損
22図13	Y25	SP194	柱根	42.9	8.8	上部欠損
22図16	X25	SP195	柱根	20.5	32.7	上部欠損
22図15	Y25	SP199	柱根か	10.5	5.7	状態悪い
22図16	Y24	SP203	柱根	41.7	7.3	上部欠損
22図18	Y24	SP204	柱根	47.0	12.5	上部欠損
22図19	X25・Y25	SP209	柱根	18.7	24.0	特に状態悪い
22図21	X21	SP224	柱根	77.6	11.6	上部欠損
22図23	Y22	SP365	柱根	54.0	8.5	上部欠損
22図24	X24	SP381	柱根	17.8	9.5	上部欠損
22図25	W24	SP389	柱根	17.3	5.7	上部欠損
24図26	U30	SP415	柱根	45.6	9.95	上部欠損
24図29	Y21	SP430	柱根	65.7	8.5	上部欠損
24図31	Y21	SP436	柱根	64.6	8.4	上部欠損
36図180	X27	包含層	柱根	39.0	12.5	上部欠損
36図181	V27	排水溝	柱根	36.1	14.8	上部欠損
36図182	W22	攪乱	柱根	24.8	15.8	上部欠損

第5表 石器・石製品観察表

挿図番号	グリッド	出土地	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
11図1	Y28	SB03 SP172	石皿	27.50	14.00	11.00	6980.0	花崗閃緑岩	1/3残存
17図1	X・Y22	SB06 SP328	板状石製品	7.65	5.60	1.20	52.23	砂岩	
24図30	Y21	SP436	板状石製品	9.00	6.45	1.00	83.99	砂岩	
26図8	W26	SD03	砥石	9.90	8.60	7.00	101.05	軽石	
37図183	W25	包含層	板状石製品	7.10	6.20	0.95	59.11	砂岩	
37図184	Y22	包含層	板状石製品	6.45	4.40	0.95	48.55	流紋岩	
37図185	Y22	包含層	板状石製品	4.80	4.65	1.20	41.73	砂岩	1/2残存
37図186	Y26	包含層	へら状石器	7.70	3.10	0.90	25.41	細粒砂岩	
37図187	X26	包含層	へら状石器	7.20	2.85	0.85	20.48	細粒砂岩	下部に磨減痕あり
37図188	Y22	包含層	磨石	9.10	4.70	3.90	263.00	安山岩	
37図189	X27	包含層	凹石	11.60	10.90	6.50	1178.2	花崗岩	
37図190	Y22	包含層	凹石+磨石	12.60	10.70	6.60	1332.6	花崗閃緑岩	
37図191	W29	包含層	磨石	16.60	17.50	14.00	6280	花崗閃緑岩	
37図192	X23	包含層	石冠	8.00	11.00	7.20	842.2	超塩基質岩	
37図193	Y28	包含層	不明石製品	14.80	6.80	4.00	500.6	砂岩	微量の赤色顔料が付着
37図194	X・Y21～29	排土	磨製石斧	7.30	6.60	4.37	290.9	閃緑岩	刃部のみ残存
37図195	X23	包含層	切子玉	2.40	1.40	1.36	5.57	水晶	片端部欠損
37図196	X23	包含層	砥石	7.30	3.20	2.90	62.30	凝灰岩	6面使用
37図197	X23	包含層	砥石	8.80	3.00	2.00	76.20	凝灰岩	4面使用 金属製の傷あり
37図198	X22	包含層	砥石	5.90	4.70	3.50		凝灰岩	4面使用 金属製の傷あり

第6表 銭貨観察表

挿図番号	グリッド	出土地	種類	銭径(cm)	内径(cm)	銭厚(cm)	量目(g)	国名	初鋳年	背
35図179	W27	包含層	開元通寶	2.22～2.30	1.72～1.75	0.08～0.09	2.2	唐	845	背

第4章 木崎遺跡出土木材の年輪年代

木崎遺跡では、平成18年（2006）7月から9月にかけて舞鶴若狭自動車道建設事業に伴う発掘調査が実施され、その後同年10月から12月にかけて一般県道小浜インター線（以下、インター線と略す）道路改良工事に伴う発掘調査が実施された。

舞鶴若狭自動車道関係の調査では、木柵を伴う弥生時代後期後半の井戸2基が2区と4区で検出された。また、5区では古墳時代後期に相当する大型の掘立柱建物跡などが検出された。2区で検出された1基の井戸（SE01）内からは、多量の土器とともに、完形の弥生土器の小壺がスギ材の縦杓子の中に入った状態で発見された。縦杓子の木製品から得られる年輪年代は、縦杓子内の土器に対し、直接的な年代を知る手がかりとなるため注目された。

また、5区で発見された南北3間（以上）×東西2間の掘立柱建物SB01の庇部分の柱穴3基には柱根（スギ2点、ヒノキ1点）がそれぞれ残っており、母屋の柱穴からは古墳時代後期の須恵器（TK209型式に併行）が出土した。このほかに、インター線に伴う発掘調査でも建物遺構が発見され、柱根類が出土した。

今回、年代測定を実施したのは、舞鶴若狭自動車道関係の調査区では、2区の井戸（SE01）内の縦杓子1点と5区の掘立柱建物（SB01）の柱根3本、インター線関係の調査区では総柱建物（SB01）の柱根1本の5点である。以下、その結果を報告する。

1 方法

調査対象木材からの年輪幅の計測は、年輪読取器を使った。年代を割り出す際に使用したスギの暦年標準パターンは、おもに①滋賀県下の遺跡出土木材の年輪で作成したもの（紀元前651～紀元後199年）と②石川県下の遺跡出土木材の年輪で作成したもの（紀元後311年～687年）とを使用した。

コンピュータによる年輪パターンの照合は、相互相関分析法によった⁽¹⁾。これは、比較照合する一組の年輪パターンのなかで、もっとも類似度（同調性）の高いところを検出するやり方で、ヨーロッパの年輪研究者の間で広く使われている手法である。一般に、t検定による最大t値でもって表される場合が多く、ヨーロッパでは最大t値を3.5（危険率0.1%）以上としている。ここでは、最大t値を3.5より高い5.0前後以上に設定し、その信頼性をさらに高めて検討した。年輪パターン照合の正否は、必ずしもコンピュータによる検出結果だけに依拠するものではなく、目視による年輪パターン照合も必ず併せておこない、2つの方法で問題のないことを確認してから、出土木材の年代（年輪年代）を最終的に決定することとした。

2 結果

1) 縦杓子の年輪年代

縦杓子の材種はスギ材で、原木の中心をはずして木取りされたもので、年輪数や年輪年代は第38図に示したとおりである。形状は心材型（心材に続く外周部の辺材が完全に失われた形状のものをいう）であるため、得られた年輪年代94B.C.は上限年代であり、削除されてしまっている辺材部の年輪を勘案すると、少なくとも50B.C.以降のものである可能性が高い。

2) 柱根の年輪年代

A 舞鶴若狭自動車道

3本の柱根の樹種は2本がスギ材で、1本がヒノキ材であった。3本とも心材型であることから、原木の正確な伐採年代を求めることはできない。3本の年輪年代のなかでもっとも新しい年輪年代は、SP211の525年+ α 層である。この年輪年代に削除されてしまった辺材部の平均年輪数（ヒノキの場合はおよそ50層前後）を加算すると、575～585年頃の推定年輪年代が考えられる。これに、さらに失われたであろう心材部の年輪を加算することになるから、年代はさらに下って推定伐採年代は600年代前半～中頃が想定される。

B インター線

この地区の発掘調査で出土した柱根のなかで、年代測定をおこなったのはSB01・SP26の1本であった。樹種はヒノキ材（芯去り材）で、心材型のものであった。計測年輪数は161層であった。この年輪パターンとさきの暦年標準パターン②との照合の結果は、不成立であった。そこで、他の暦年標準パターンとして、近畿地域の遺跡出土木材の年輪で作成したヒノキの暦年標準パターン（紀元前37年～845年）を使用した結果、年輪年代は593年+ α 層と判明した。このときの最大t値は4.8を示した。このt値は、一応の設定基準をほぼ満たしており、目視的にも問題のないことがわかったので、相方の年輪パターンの照合は成立したものとみなした。柱根は心材型であるからヒノキの辺材部の平均年輪数を約50層前後と考えると推定伐採年代は、600年代の中頃以降が想定される。

以上、木崎遺跡の出土木材から得られた年輪年代は、心材型からのものであっても、この地域の土器編年の年代的枠組みを構築するうえで参考になる年代情報として活用されるものと思われる。

No.	試料	樹種	年輪数	t値	年輪年代	B. C.	300	200	100	1	100	200	300	400	500	600	A. D.
1	柱根SP210	スギ	243	5.0	510A. D.								268				510+ α 層
2	柱根SP211	スギ	330	6.7	525A. D.								196				525+ α 層
3	柱根SP275	ヒノキ	220	7.9	395A. D.								176				395+ α 層
4	縦杓子	スギ	162	5.4	94B. C.	B. C. 255											B. C. 94+ α 層
5	柱根SP26	ヒノキ	161	4.8	593A. D.										433		593+ α 層

第38図 木崎遺跡出土木材の年輪年代測定結果 (NO. 1～4：舞鶴若狭自動車道関係, NO. 5：インター線関係)

註

1 光谷拓実、田中琢、佐藤忠信 1990「年輪に歴史を読むー日本における古年輪学の成立ー」『奈良国立文化財研究所学報』第48冊 同朋舎出版

第5章 まとめ

木崎遺跡は複合遺跡で、主な時期は弥生時代後期後半、古墳時代後期、平安時代の3時期である。以下、各時期の木崎遺跡について、舞鶴若狭自動車道建設に伴う調査と、一般県道小浜インター線（以下、インター線と略す）の道路改良工事に伴う調査の成果を合わせて概観し、まとめとしたい（第39図参照）。

1 弥生時代後期後半

木崎遺跡で出土した弥生土器は、後期後半から末にかけてのものが中心である。主な遺構としては、舞鶴若狭自動車道関係の調査区で検出した井戸2基（SE01・03）があり、集落（居住域）であったと考えられる。また、木崎遺跡の南方の丘陵上には木崎山城跡（第1図、第3図2）が所在し、後期後半から末にかけての台状墓2基を検出している。木崎遺跡と木崎山城跡は、互いによく見える位置にあり、木崎遺跡に居住した集団が木崎山城跡で確認した台状墓の造営に関係していた可能性が高いと考えられる。2つの遺跡は直線で400～500mの距離にあり、比高は約32～48mをはかる。

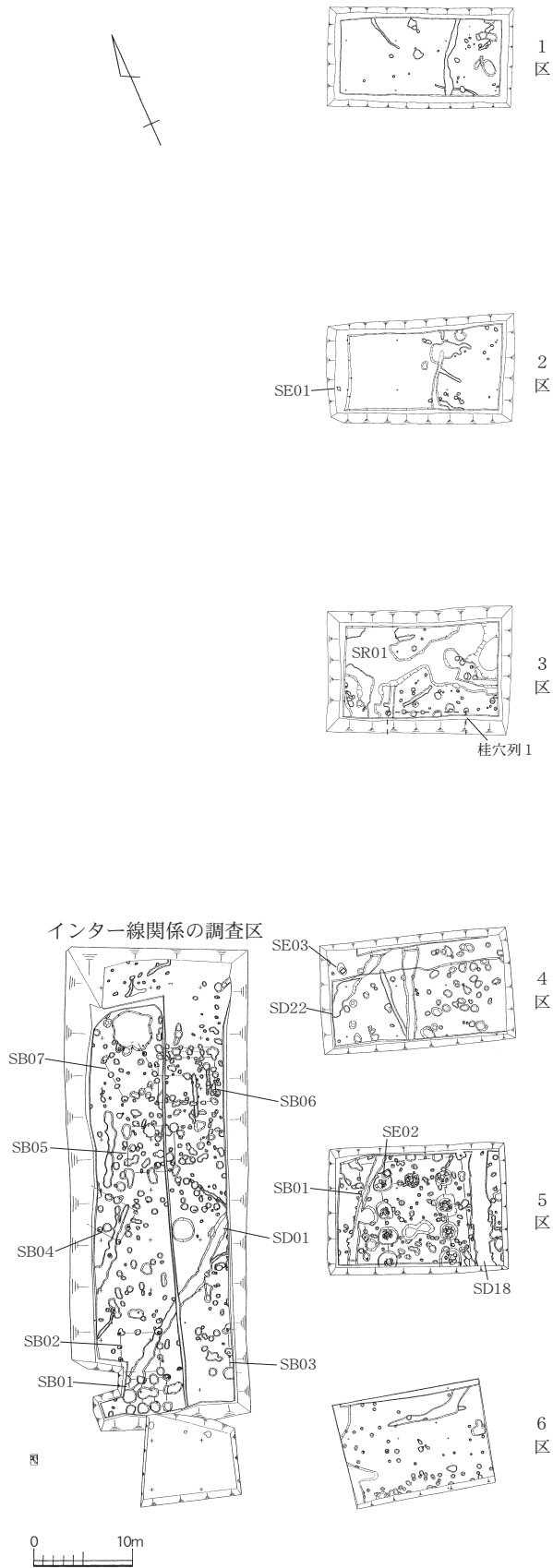
一方、木崎遺跡と同じ小浜平野の中央部、約400～600m北方には、府中石田遺跡（第1図、第3図11）が所在する。府中石田遺跡は地域の拠点的な集落とみられ、弥生時代中期中葉から後期末にかけての方形周溝墓59基、掘立柱建物69棟、周溝建物（周溝をもつ建物）12棟などを確認している。建物は後期のものが主で、一部が中期に遡る可能性があると考えられている。

前述のように、木崎遺跡は後期後半から末にかけての時期を中心とする集落（居住域）であり、木崎山城跡をその墓域（またはその一部）とすれば、居住域と墓域が離れて存在していたと推測される。一方、府中石田遺跡では前期から古墳時代前期中葉まで断続的に造墓活動が認められ、中期から後期にかけては墓域と居住域が隣接して存在している。両遺跡における墓域と居住域のあり方は、異なっているようにみえる。また、木崎遺跡では最も北方に設定した調査区の1区が当該期の集落の縁辺部と考えられ、府中石田遺跡では南方にある落ち込みが遺跡の南限に当たるとされている。2つの遺跡は、後期後半の時期には半径400m圏内という狭い範囲に並存する集落であり、一連のものと捉えることも可能であろうが、墓域のあり方や集落の存続時期、遺跡の内容に相違がみられる。そして、これらのことが集団差を暗示していると考えられる。現在、府中石田遺跡の北方を流れる北川は、発掘調査の結果や現地地形・小字名などから河道が絶えず変化していたと推測されている。北川もしくは北川に合流する河川の流路の変移が、流域に住む人々の営みに与える作用は小さくないと推定されることから、このことも木崎遺跡と府中石田遺跡との関係に何らかの影響を及ぼしていたと考えられる。

2 古墳時代後期から終末期

インター線関係の調査区の包含層から出土した須恵器は、TK43型式からTK209型式に相当するものが主で、6世紀第4四半期から7世紀第1四半期に比定される。また、検出した建物のうちで唯一の総柱建物であるSB01は、柱穴からTK43型式に相当する須恵器が出土している。SB01の柱根の推定伐採年代は7世紀中頃以降と鑑定されており、柱穴出土須恵器とは時期差があるが、SB01が古墳時代後期以降の所産であることには相違ない。当調査区では、このSB01と軸がほぼ揃う掘立柱建物4棟を含め、6棟の掘立柱建物を検出している。これらの掘立柱建物は、重複せずに整然と配置されており、柱穴出土

舞鶴若狭自動車道関係の調査区



第39図 調査区および遺構配置図 (縮尺1/700)

土器などからも近似する時期の所産と推測される。

インター線関係の調査区で検出した軸をほぼ同じくする建物群は、舞鶴若狭自動車道関係の調査区の5区で確認した大型の掘立柱建物SB01とも概ね軸が揃っている(第7表)。この大型建物は、隔絶した規模をもち、柱穴の底面には花形状に大きな石を設置するという特異なもので、一般的な建物とは考えがたく、居館またはその一部の可能性が想定できる。大型建物の時期は、柱穴から出土したTK209型式に相当するとみられる須恵器と、底部分の柱根の推定伐採年代(第4章参照)から、7世紀前半と考えられる。このように、インター線関係の調査区で検出した建物群と大型建物の時期は重なる部分があり、軸も凡そ揃っていることから、両者には関連があったと推測される。

以上のことから、舞鶴若狭自動車道関係の調査区の5区からインター線の調査区にかけて建物群が所在する一帯が、6世紀後半から7世紀代の時期のこの遺跡の中心部であったと考えられる。また、1・2区では当該期の遺構・遺物が皆無であったこと、JR小浜線より南方の工事立会では遺構・遺物とも確認できなかったことから考えれば、当該期の遺跡の範囲は、北限が3区の自然流路SR01付近、南限がJR小浜線付近と推測される。

小浜平野では、古墳時代後期から終末期にかけて古墳以外の調査例は少なく、府中石田遺跡で6世紀前葉に比定される木製遺物集積土坑1基と7世紀以降とみられる横板井籠組井戸1基が検出されたこと、西縄手下遺跡で水田遺構と掘立柱建物柱1棟が検出されたことのほかには、目立った成果は確認できない。こうしたなかで、木崎遺跡で建物の一群を確認した意義は大きいといえる。また、木崎遺跡の南方1.5km圏内には、若狭地方で最も古墳が密集する検見坂古墳群(第3図22)や多田古墳群(第3図19)が所在する。これらの群集墳は、その立地から木崎遺跡と無関係とは考え難く、木崎遺跡で特異な性格をもつと想定できる大型建物とそれに関連するとみられる建物群を確

認できたことは、上記の群集墳の基盤を含めた当地域の社会を考える上でも貴重な資料といえる。

出土遺物で注目されるものとしては、甕形土製品がある。木崎遺跡では、インター線関係の調査と舞鶴若狭自動車道関係の調査で出土したものとを合わせると、十個体以上の甕形土製品が出土していると推測される。非日常の宗教的祭祀において、聖なる食物を調理するための甕⁽¹⁾であったとされる甕形土製品がこれほど多く出土した遺跡は県内では他に例がなく、この遺跡の特徴としてあげることができる。

3 平安時代

舞鶴若狭自動車道関係の調査区の3区から5区にかけては、10世紀代の遺物が多量に出土している。土師器の椀・皿類が最も多いが、灰釉陶器や緑釉陶器などの施釉陶器もかなりの量があり、椀・皿に加えて壺も確認している。このほかに、木簡、灯心油痕をもつ須恵器椀、漆を塗布した土師器椀なども出土している。なかでも特に注目される遺物は、文字資料（墨書土器・木簡）である。墨書土器4点はすべて灰釉陶器で、内訳は「乃井村」が1点、「若栗」が2点、破損のため「栗」のみ判読できるものが1点である。「乃井村」の「乃井」は、若狭国遠敷郡に設置された駅家「濃飯駅家」の「濃飯」の同音異字である可能性が考えられ、遠敷郡内で初めて出土した濃飯駅家に関連するとみられる資料であることから、その所在地論争に一石を投じるものとなった。また「若栗」は、「わくり」と読めば、遺跡の所在地の「和久里」を指すと考えることができる。「和久里」の文字が見出せる最も古い文書は、建久7年（1196）6月日の『若狭国源平両家祇候輩交名案（京都東寺百合文書ホ）』であり、「若栗」が「和久里」の同音異字であるとすれば、「わくり」という名が前述の文書に書かれる一世紀以上前から使われていたことになる。木簡は4点あり、うち2点が付札木簡である。付札木簡は「乃間田」、「□□初一石」と判読でき、前者は前述の「乃井村」と同じ「乃」がつくことから地名をあらわしたもの、後者は種子札と推測される。種子札は種初管理に使われたとみられることから、種初や穀を管理した正倉などの施設が近くに存在した可能性が考えられる。以上のように、出土した文字資料や一般の集落遺跡ではあまりみられない遺物の数々は、駅家や正倉などの公的施設の存在をうかがわせるものであった。

対して、当該期に比定される遺構は、3区で検出した柱穴列1のほかに特記すべきものがなく、前述したような遺物の量や内容からすれば見劣りがする。また、インター線関係の調査区では10世紀代に比定される遺物が激減しており、舞鶴若狭自動車道関係の調査区で多数出土した緑釉陶器は全く確認できなかった。こうしたことから、10世紀代の遺跡の中心は、舞鶴若狭自動車道関係の調査区（特に3区から5区）の東方に展開していると考えられる。

註

1 稲田孝司 1978「忌の甕と王権」『考古学研究』25巻1号 考古学研究会

第7表 掘立柱建物一覧表

調査区	遺構名	種別	柱配置 桁行×梁行	桁行(m)	梁行(m)	柱間寸法		桁行方向	床面積 庇を含む床面積	柱穴掘方			柱痕 直径(m)	柱根 出土位置 直径(m)	庇	
						桁行(m)	梁行(m)			長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)				
舞鶴若狭 自動車道 5区	SB01	側柱	3以上×2	(7.8)	6.2	2.30~3.00	3.00~3.30	N19° E	(48.4) (115.0)	1.50~2.18	1.36~1.80	0.28~0.46	0.37	庇	0.22~0.20	四面か
インター線	SB01	総柱	3×2	3.88	2.86	1.20~1.40	1.33~1.53	N69° W	11.1	0.74~1.37	0.74~1.36	0.14~0.40	0.2	母屋	0.22	
インター線	SB02	側柱	3×2	3.94	3.88	1.25~1.37	1.82~2.06	N21° E	15.2	0.46~0.80	0.40~0.67	0.12~0.28		母屋	0.14~0.27	
インター線	SB03	側柱か	2×-	4.4	-	2.08~2.32	-	N20° E	-	0.47~0.78	0.41~0.68	0.11~0.25	0.1			
インター線	SB04	側柱	2以上×2	(4.75)	3.52	2.35~2.40	1.71~1.81	N34° E	(16.7)	0.47~0.78	0.41~0.68	0.11~0.25		母屋	0.14~0.18	
インター線	SB05	側柱	2×1	4.83	4.57	2.41	4.57	N69° W	22.1	0.92~1.95	0.87~1.00	0.25~0.38	0.15			
インター線	SB06 新段階	側柱	5×2	5.8	5.04	1.00~1.40	2.38~2.66	N67° W	29.2	0.58~0.94	0.38~0.60	0.22~0.39		母屋	0.09~0.17	
インター線	SB06 古段階	側柱	5×4	5.8	4.38	1.00~1.40	0.82~1.48	N67° W	25.4 30.9	0.38~0.78	0.26~0.60	0.14~0.36		母屋	0.11	一面(北)
インター線	SB07	側柱	3×4	4.51	3.88	0.47~0.70	0.89~1.03	N60° W	17.5	0.47~0.70	0.38~0.62	0.14~0.28	0.1	母屋	0.10~0.14	

引用・参考文献

- 遠藤涼子 2003 「越前・若狭国における施釉陶器の一考察」『北陸の古代と土器』 北陸古代土器研究第10号
北陸古代土器研究会
- 小浜市教育委員会 1979 『若狭の中世城館』
- 小浜市教育委員会 1986 『府中遺跡調査概報』
- 小浜市教育委員会 1992 『小浜市史 通史編 上巻』
- 小浜市教育委員会 2001 『小浜市重要遺跡確認調査報告書』
- 小浜市教育委員会 2006 『小浜市重要遺跡確認調査報告書Ⅱ』
- 小浜市教育委員会・福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2009 『西縄手下遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
- 兼康保明 1990 「近江地域」『弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅱ』 木耳社
- 加納俊介・石黒立人編 2002 『弥生土器の様式と編年 東海編』 木耳社
- 狩野敏次 2004 『かまど』 法政大学出版局
- 楠正勝 1996 「弥生中期後葉から古墳時代前期前半の土器」『西念・南新保遺跡Ⅳ』 金沢市教育委員会
- 芝田寿朗 1998 「野里と古代丹後道—野里の所在とその周辺の古代寺院について—」『紀要』第7号 福井県立
若狭歴史民俗資料館
- 杉山大晋 2009 「若狭国遠敷郡における官衙・集落遺跡—西縄手下遺跡の解釈をめぐって—」『条里制・古代都
市研究』第24号 条里制・古代都市研究会
- 竹内理三編 1989 『角川日本地名大辞典』18 福井県 角川書店
- 田嶋明人 1986 『漆町遺跡Ⅰ』 石川県立埋蔵文化財センター
- 田嶋明人 1988 「古代土器編年軸の設定」『シンポジウム古代土器研究の現状と課題 報告編』 石川県考古学
研究会ほか
- 田中昌樹 2003 「北陸地域の「竈形土製品」について」『富山考古学研究』第6号
- 田辺昭三編 1966 「陶邑古窯跡群Ⅰ」『平安学園考古学クラブ記念論集』第10号 真陽社
- 中世土器研究会編 1995 『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社
- 寺沢薫・森岡秀人編 1989 『弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅰ』 木耳社
- 独立行政法人 文化財研究所 奈良文化財研究所 2004 『古代の官衙遺跡Ⅱ 遺物・遺跡編』
- 中司照世 1994 「遠敷古墳群分布調査報告」『紀要』第5号 福井県立若狭歴史民俗資料館
- 橋本勝行 2002 「京都府北部地域の住まいと煮沸具」『第10回 京都府埋蔵文化財研究集会 発表資料集』 京
都府埋蔵文化財研究会
- 馬場基 2007 「古代の道と若狭の駅家」 若狭歴史民俗資料館・郷土史講座資料
- 東日本埋蔵文化財研究会 1998 『古墳時代の豪族居館をめぐる諸問題』
- 福井県 1993 『福井県史 通史編1 原始・古代』
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2010 『木崎山城跡・木崎遺跡』
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2011 『府中石田遺跡』
- 北陸古代土器研究会 1999 『須恵器貯蔵具を考えるⅠ つほとかめ』 北陸古代土器研究第8号
- 北陸中世考古学研究会編 1997 『中・近世の北陸』 桂書房
- 埋蔵文化財研究会 1992 『古墳時代の竈を考える』
- 鷲巢孔亮 2004 「若狭地方検出の後期弥生土器の傾向について—小浜市検出の土器を中心に—」『みずほ』第39
号 大和弥生文化の会

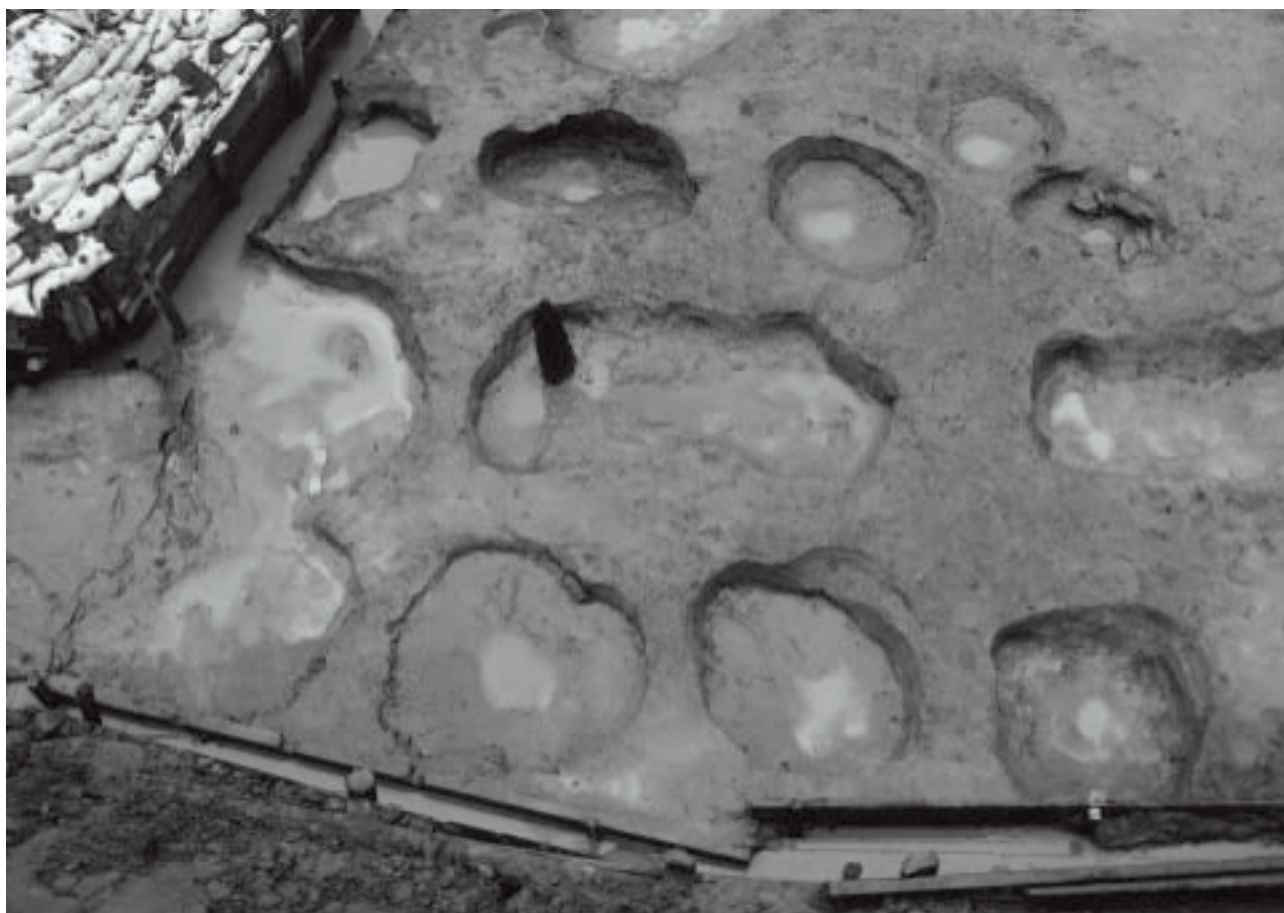
写 真 图 版



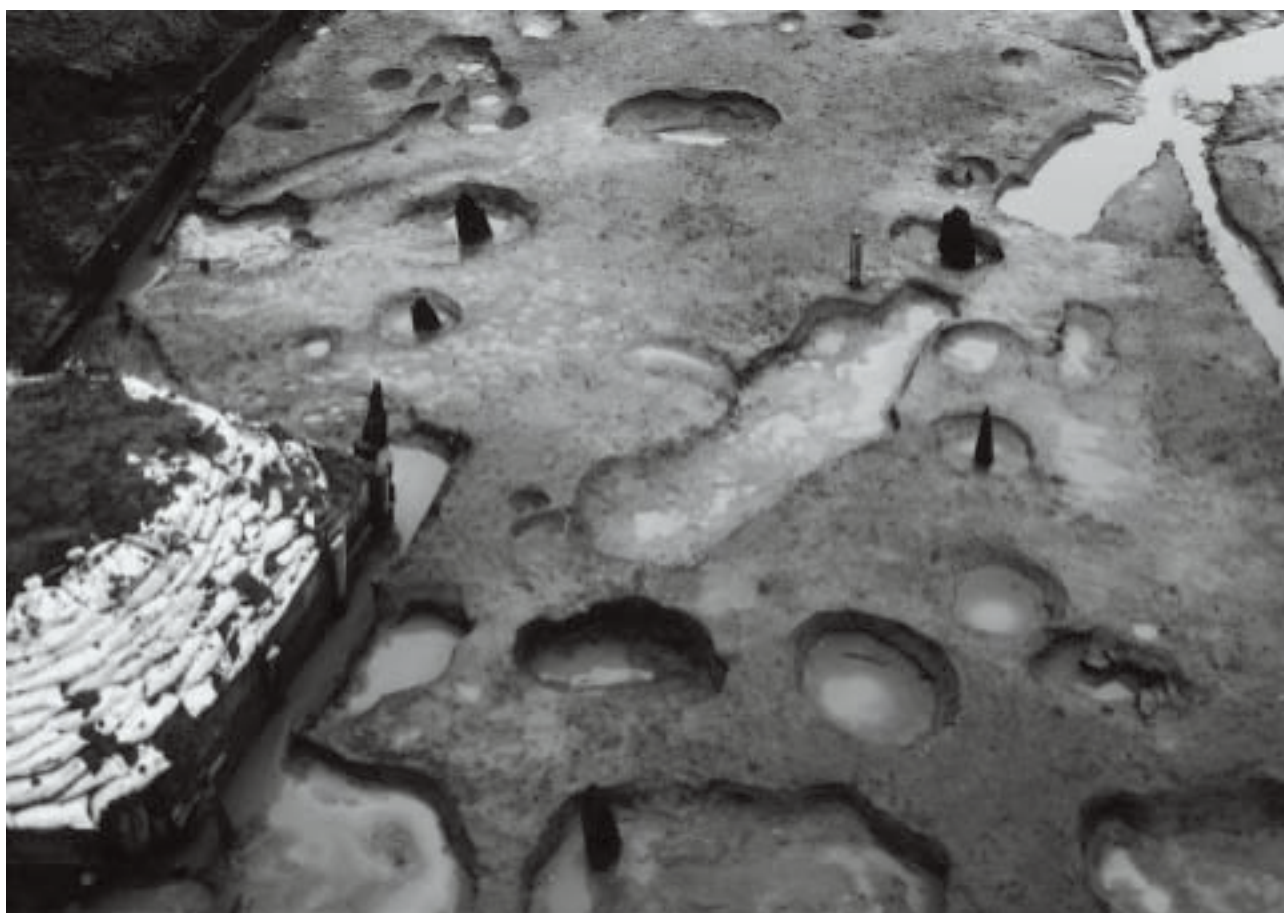
(1) 調査区全景・木崎山城跡遠景（北より）



(2) 調査区全景（東より）



(1) SB01 (南より)



(2) SB02 (南より)

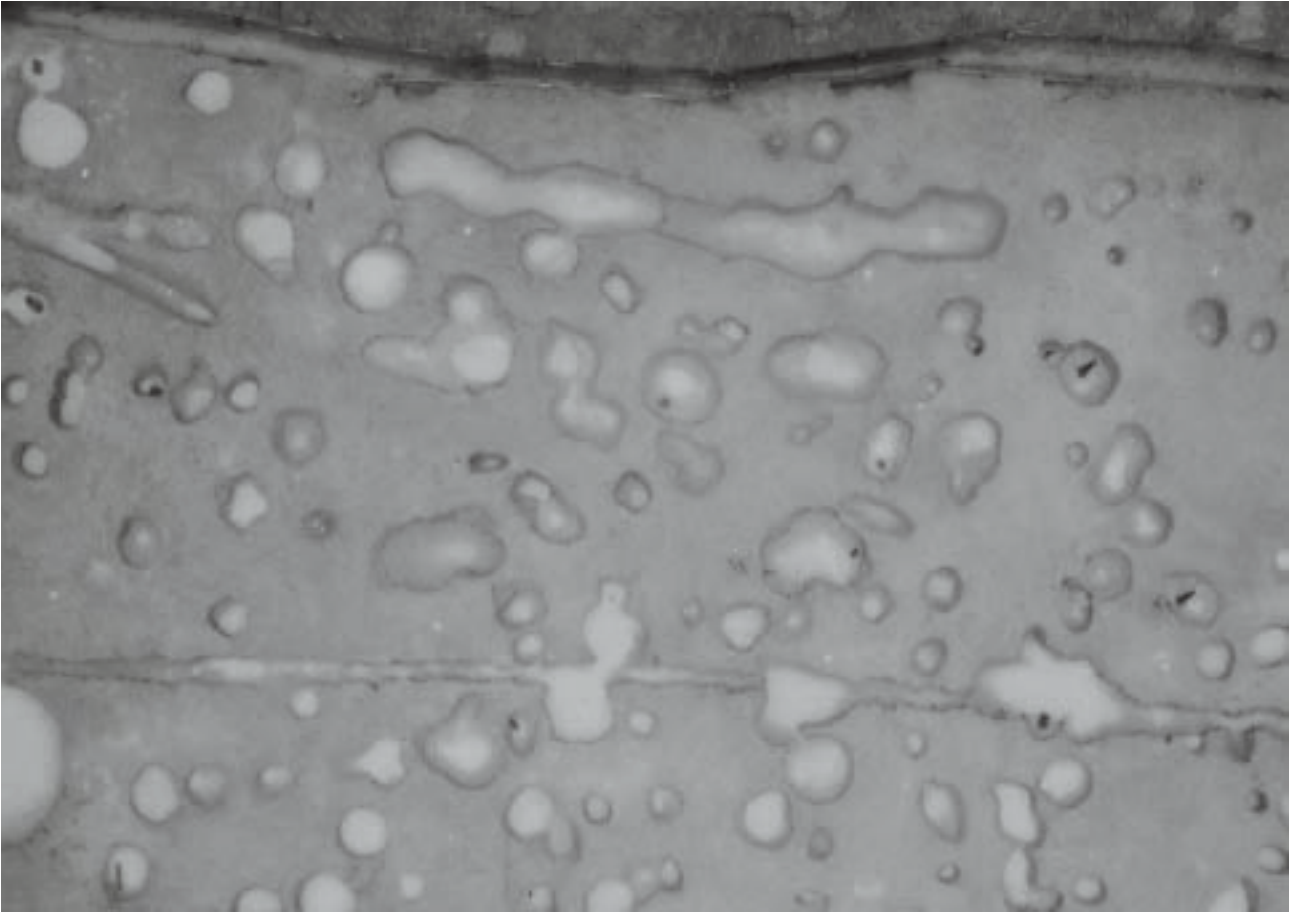


(1) SB03 (西より)

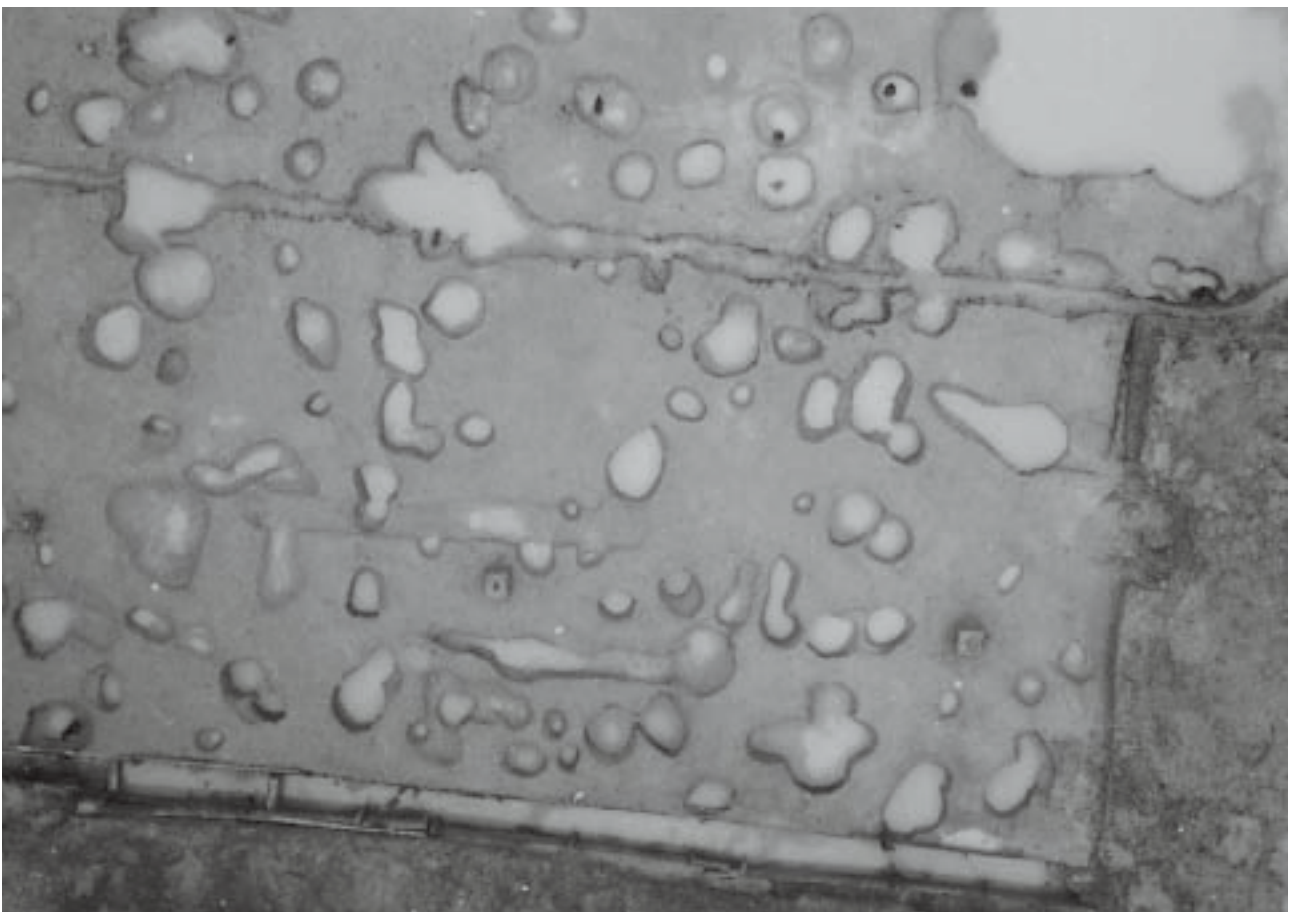


(2) SB04 (北西より)

図版第四
遺構



(1) SB05 (東より)



(2) SB06 (東より)



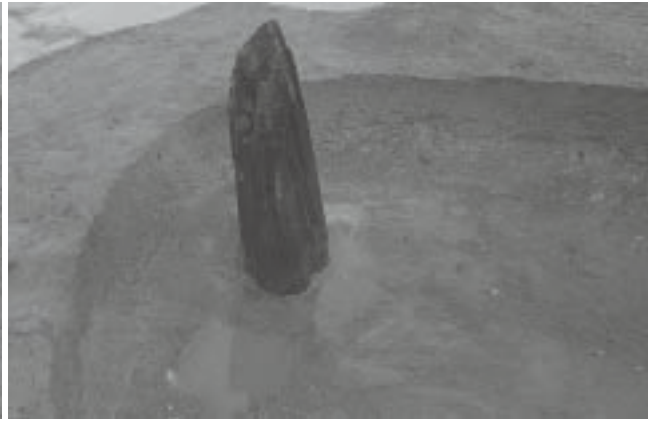
(1) SB07 (南より)



(2) SK02 (南より)



(1) SB01 SP50 (南より)



(2) SB01 SP26 (南より)



(3) SB02 SP150 (東より)



(4) SB02 SP03 (西より)



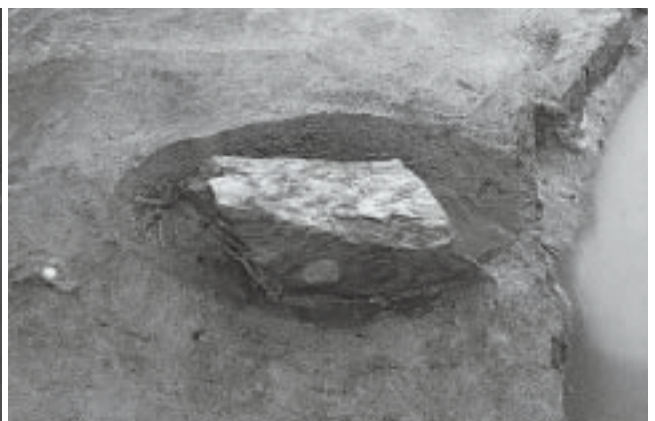
(5) SB02 SP04 (南より)



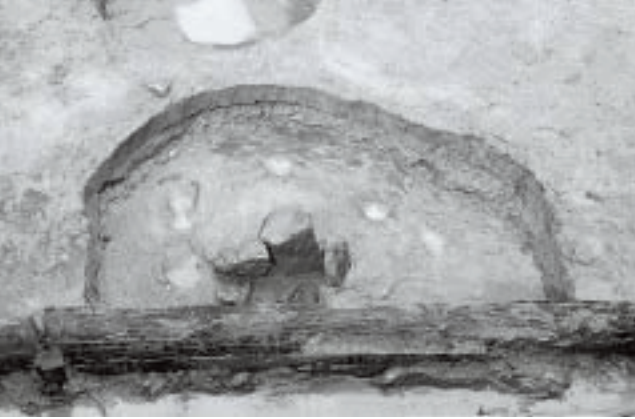
(6) SB02 SP152 (東より)



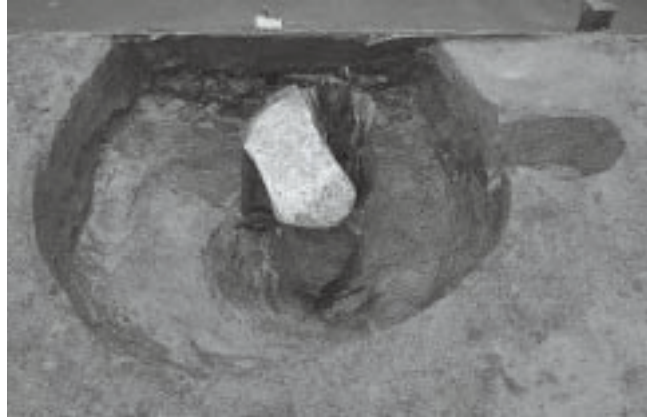
(7) SB02 SP05 (西より)



(8) SP164 (南より)



(1) SB03 SP171 (東より)



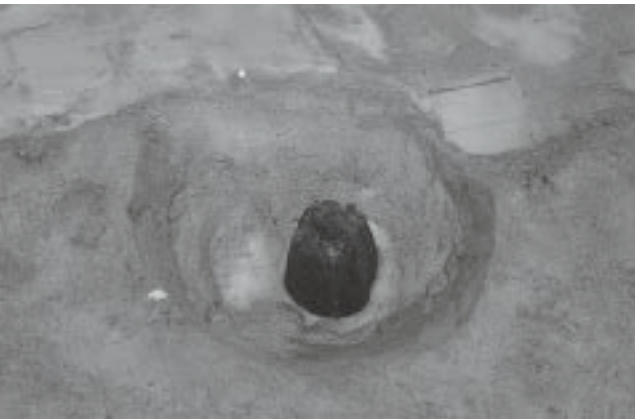
(2) SB03 SP172 (西より)



(3) SB04 SP11 (東より)



(4) SB04 SP06 (西より)



(5) SB04 SP402 (東より)



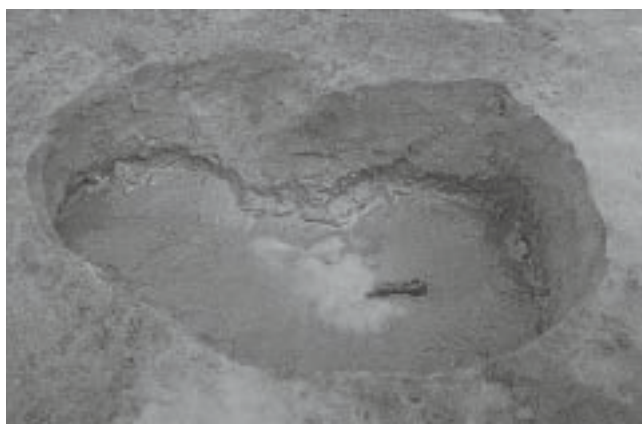
(6) SB05 SP374 (西より)



(7) SP85 (西より)



(8) SB06 SP240 (西より)



(1) SB06 SP312 (南より)



(2) SB06 SP276・285 (南より)



(3) SB07 SP60 (西より)



(4) SB07 SP58 (南より)



(5) SB07 SP218 (西より)



(6) SB07 SP219 (西より)



(7) SB07 SP63 (西より)



(8) SB07 SP55・SP70 (南より)



(1) SP415・416 遺物出土状況 (南より)



(2) 立会2区全景 (西より)



遺構内出土土器

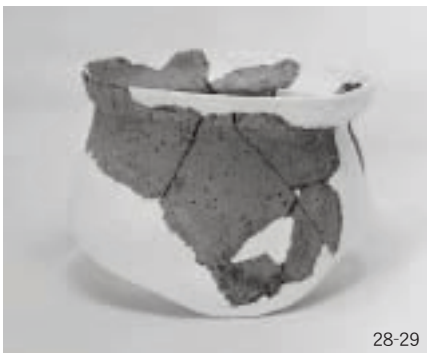


27-1



28-23

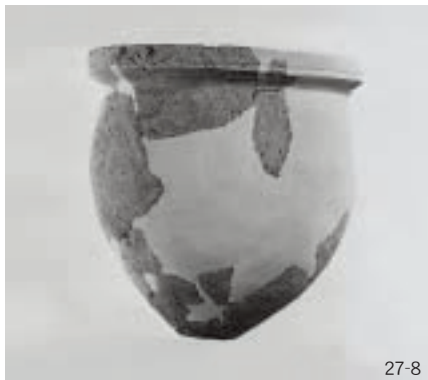
27-22



28-29



27-21上半



27-8



27-21下半



27-12



28-26



28-33



28-40



28-44

28-45



28-34



28-38



28-51



28-55



28-46



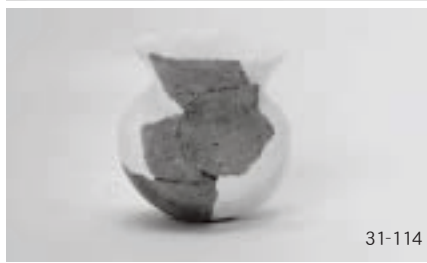
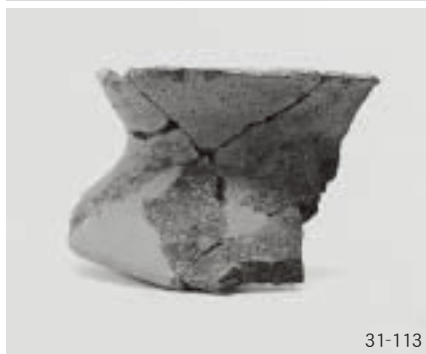
28-52

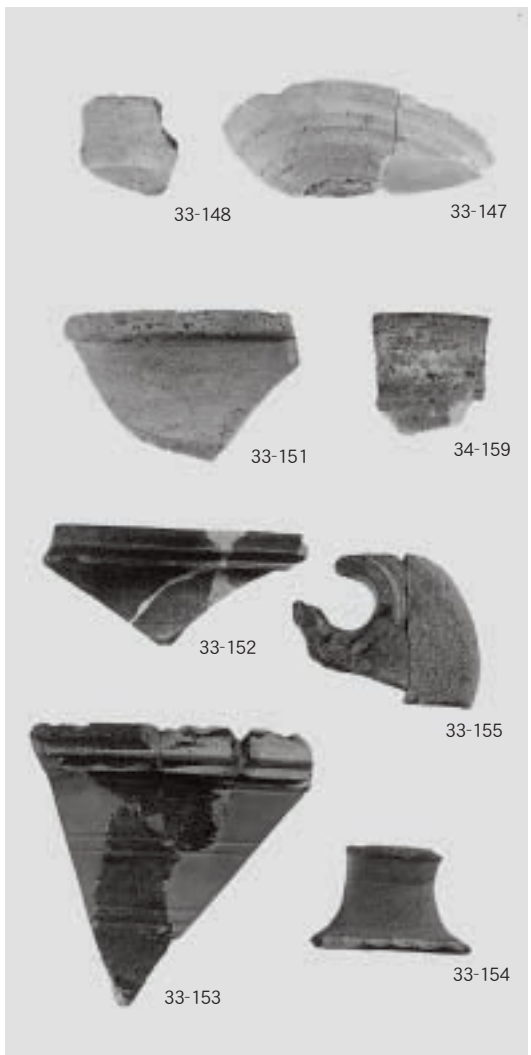
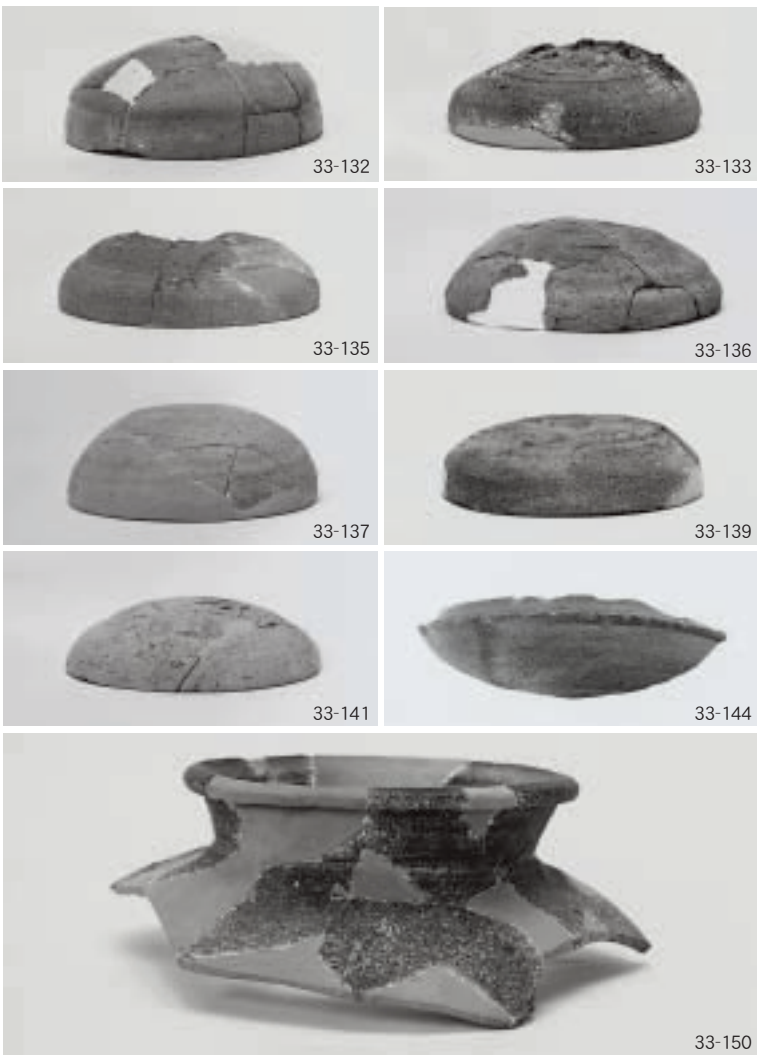
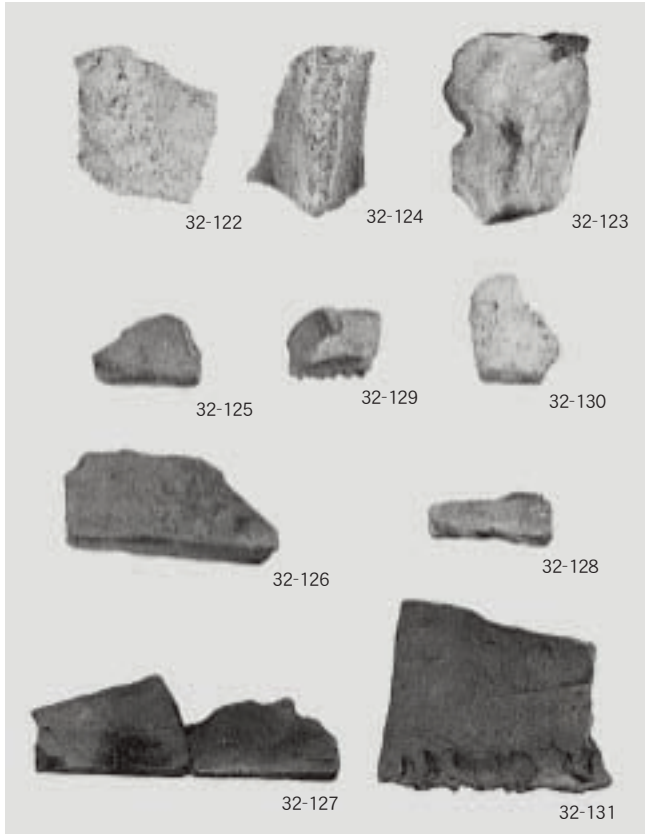
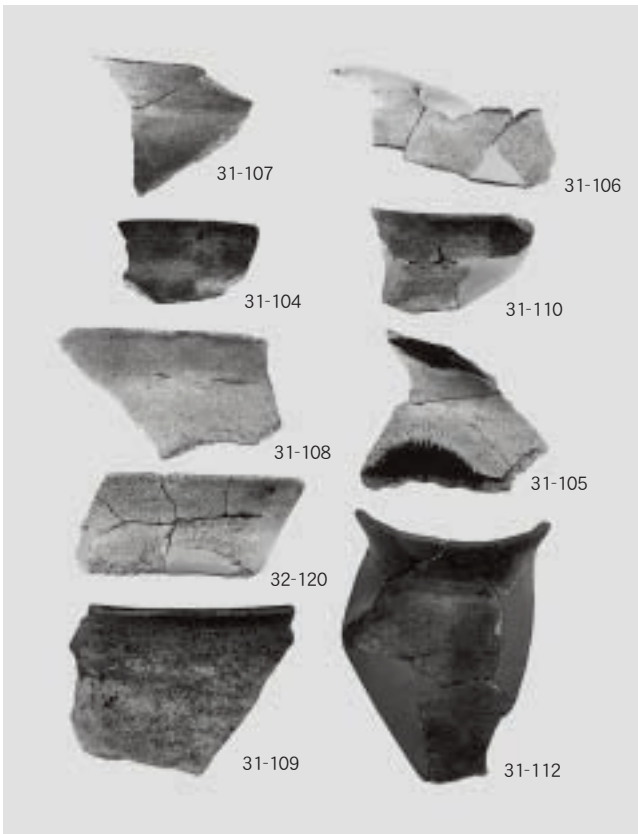


28-57

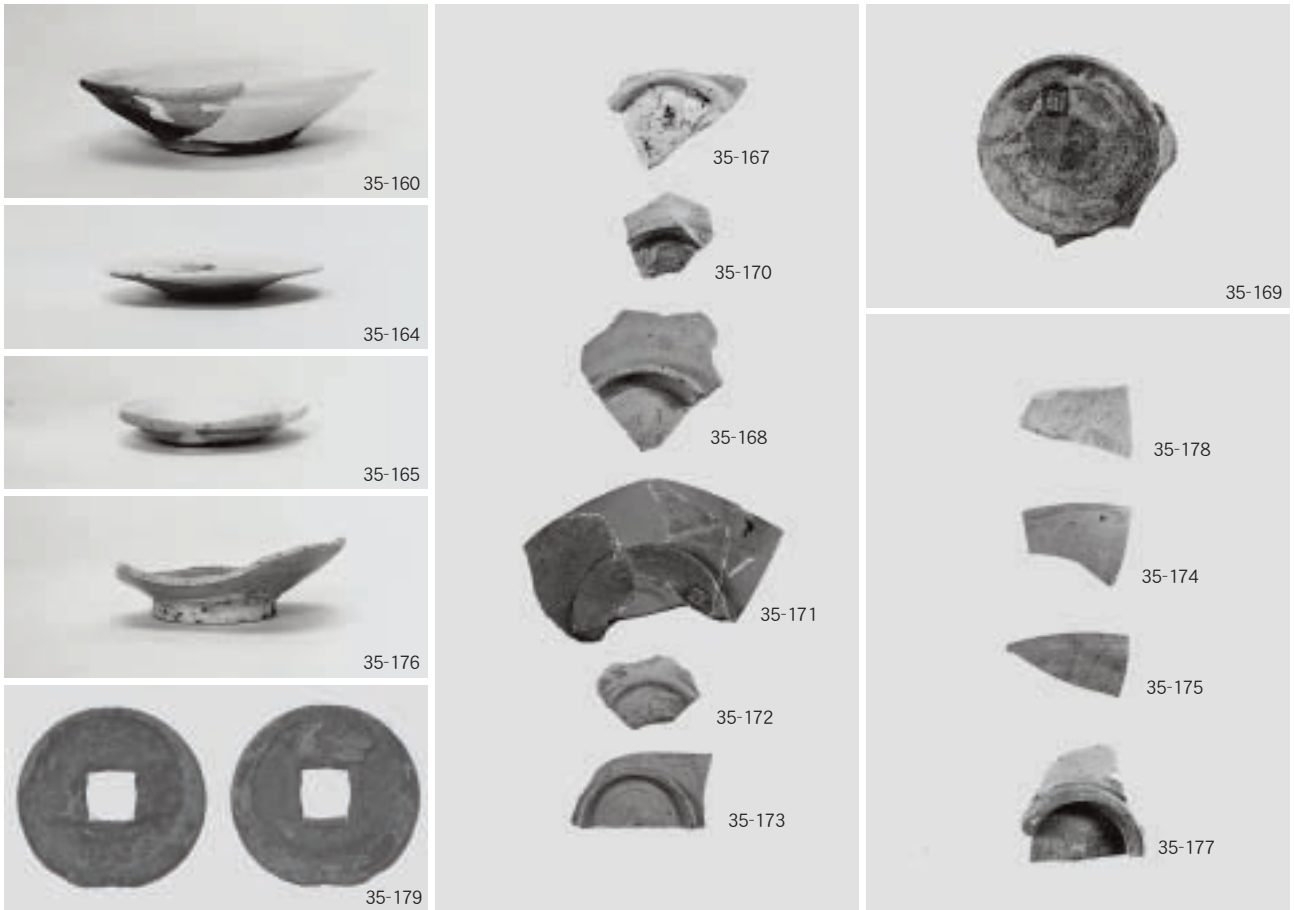


28-54

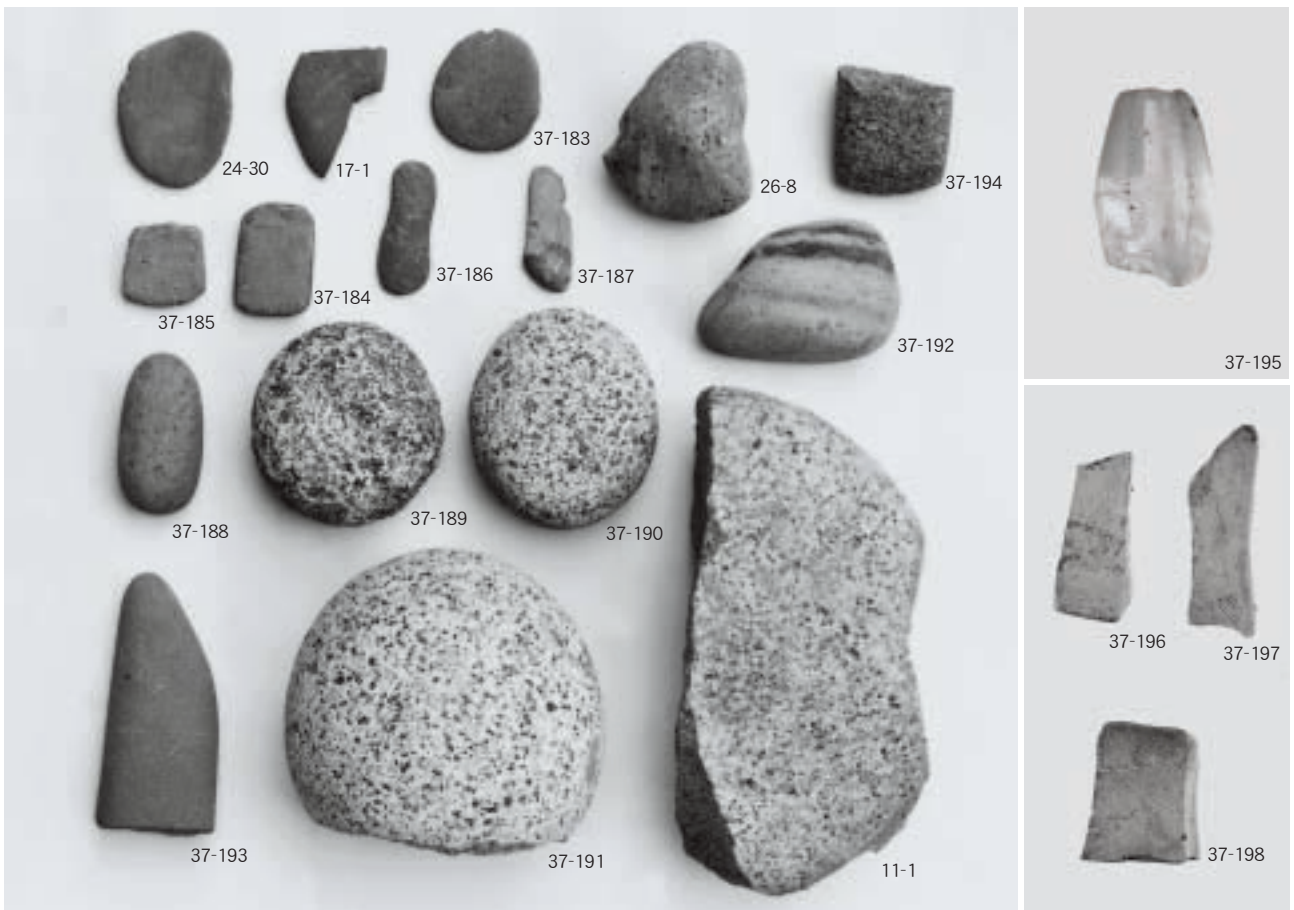




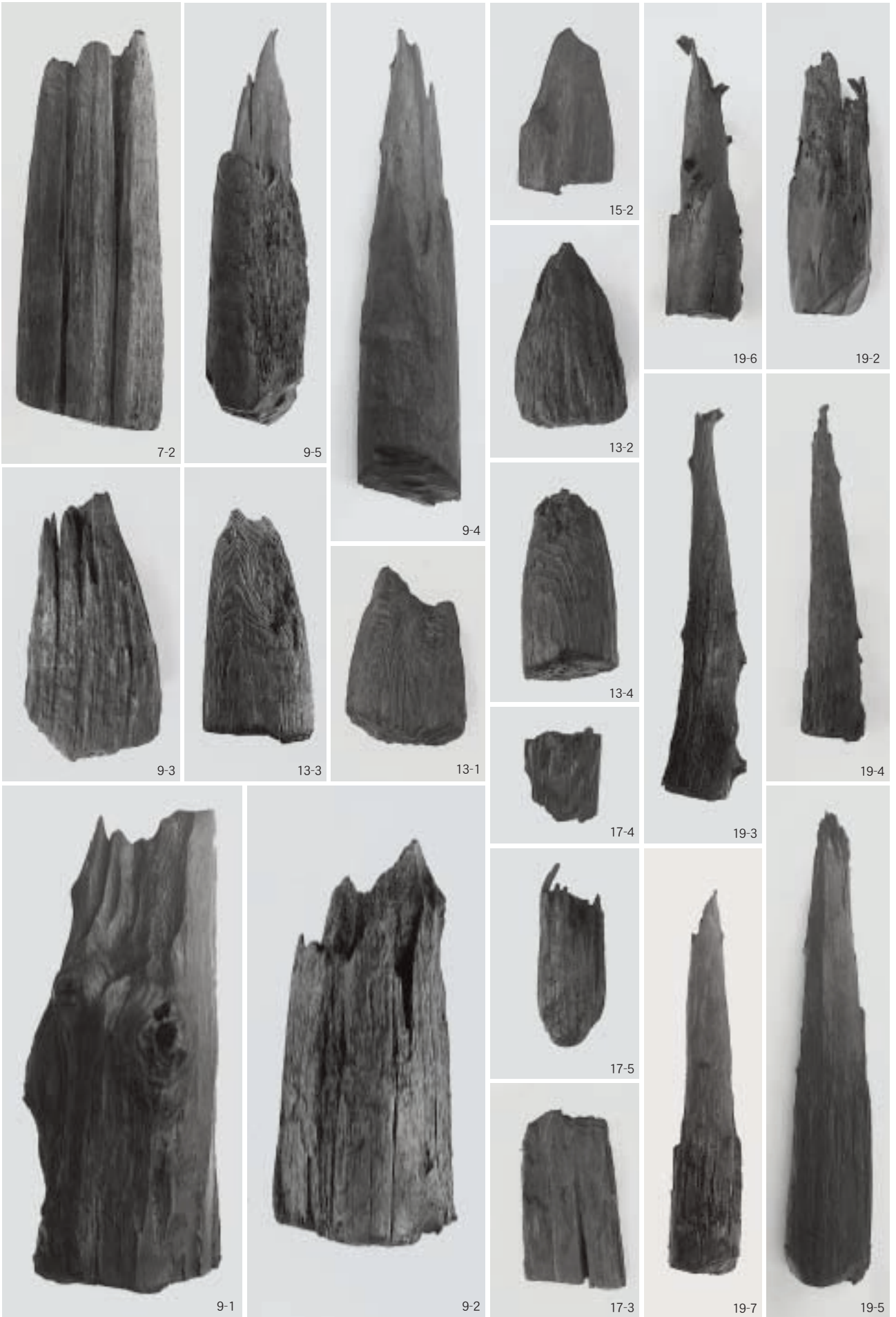
遺構外出土土器 3



(1) 遺構外出土土器4・銭貨

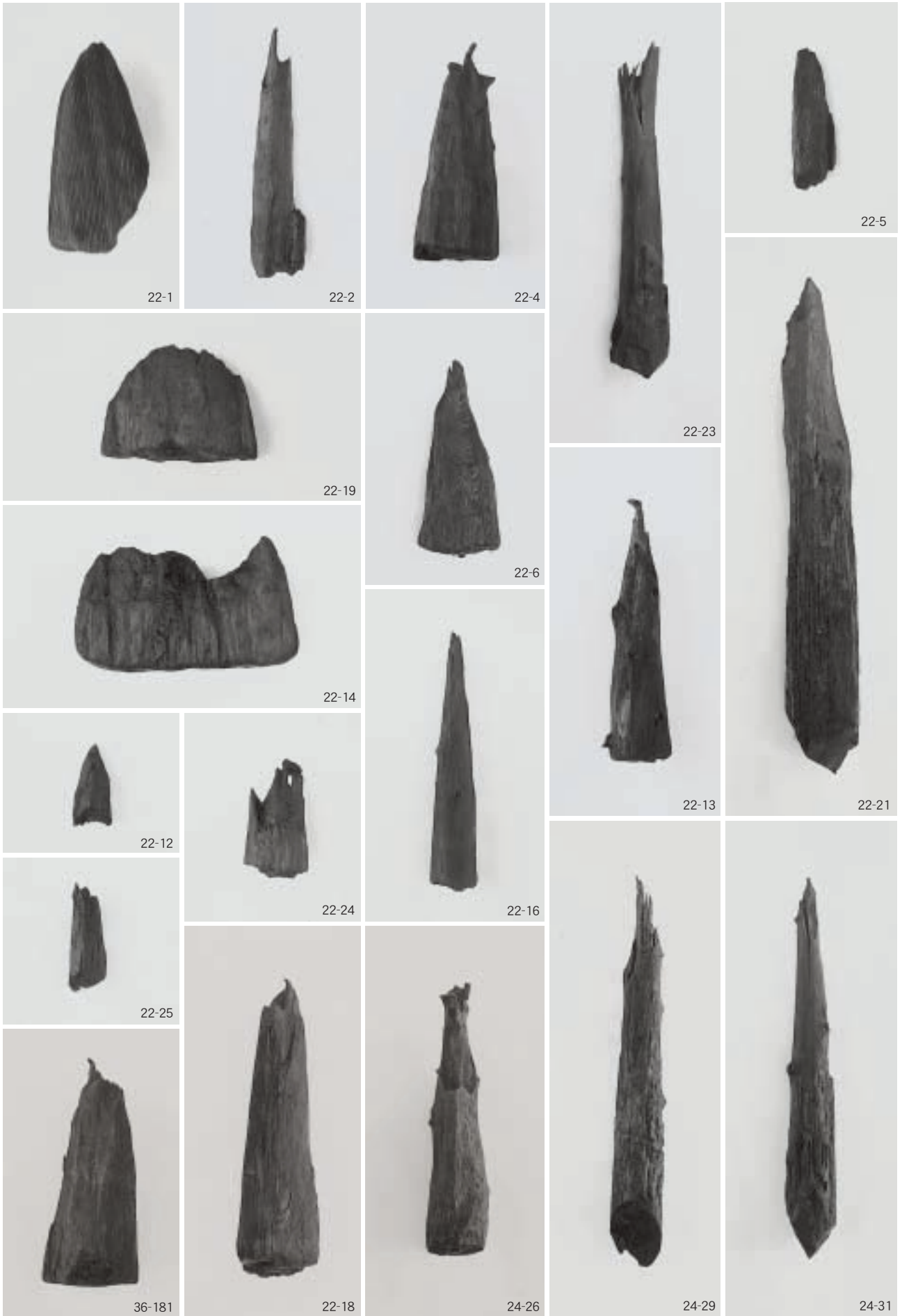


(2) 遺構および遺構外出土石器・石製品 (遺構出土: 11-1、17-1、24-30)



遺構（掘立柱建物）出土柱根

図版第一六 遺物



遺構（柱穴）および遺構外出土柱根

報告書抄録

ふりがな	きざきいせき							
書名	木崎遺跡							
副書名	一般県道小浜インター線道路改良工事に伴う調査							
巻次								
シリーズ名	福井県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第122集							
編著者名	坪田聡子 富山正明 光谷拓実							
編集機関	福井県教育庁埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒910-2152 福井県福井市安波賀町4-10 TEL0776-41-3644							
発行年月日	西暦2011年03月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
きざきいせき 木崎遺跡	ふくいけんおばまし 福井県小浜市 わくり 和久里	18204	07112	35° 29′ 19″	135° 45′ 52″	20061018 ～ 20061218	540	記録保存調査
遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
木崎遺跡	集落	弥生時代 古墳時代 平安時代	掘立柱建物 土坑		弥生土器 竈形土製品 土師器 須恵器 灰釉陶器 石器・石製品 柱根			
要約	古墳時代後期を中心とする集落遺跡である。先に行った舞鶴若狭自動車道建設に伴う発掘調査の際には、大規模な掘立柱建物を検出しており、今回の調査ではこれと軸をほぼ同じくする総柱建物や掘立柱建物を確認した。これらの建物群は、その整然とした配置から、居館とも想定できる大型掘立柱建物に関連している可能性が高いと考えられる。							

福井県埋蔵文化財調査報告 第122集

木崎遺跡

— 一般県道小浜インター線道路改良工事に伴う調査 —

印刷 平成23年3月10日

発行 平成23年3月31日

発行 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

〒910-2152 福井市安波賀町4-10

印刷 株式会社 エクシート

〒919-0482 坂井市春江町中庄61-32
